モモンガさんと異形の母

belgdol

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ｎ番煎じのオリ至高がモモンガさんと転移してイチャイチャするだけのお話。

アインズ様ではなくあくまでモモンガさんです（重要）

一部原作より不遇なキャラが居ますがさらりと助かる人も居ます。

アンチ・ヘイトはそういった一部キャラに対する配慮です。

１～６、７話あたりまでは自己のＢｌｏｇ「メモ帳みたいなもの」にも掲載しています。

若干文章を整えてそちらを延長したのが本作品となります。

目次

本編
終わりが終わり始まりが始まる時 ―― 1
強制賢者モード ―― 6
ありんすちゃんとの出会い ―― 11
モモンガとアヴェ、反省する ―― 16
死の王と怪物達の慈母 ―― 22
遠隔視の鏡＜ミラー・オブ・リモートビューイング＞ ―― 27
出撃！ユリ・アルファ ―― 32
モモンガさんに膝枕を ―― 37
レア物収集 ―― 42
派遣社員コキュートス ―― 47
慰労会 ―― 53
蒼の薔薇と ―― 58
そして死の王と慈母は伝説へ ―― 63
その後の雑多なお話
番外編1・ほのぼの山河社稷図 ―― 68
番外編・プレアデスのお仕事 ―― 73
アヴェさんの鱗のお手入れ―またの名をプレアデス女子会―
85
番外編：Ｈｏｗ　ｔｏ・・・ ―― 89
番外編：その後の蒼の薔薇 ―― 93
番外編：星の下で ―― 97
番外編：ティータイム ―― 103
番外編：さよならザイトルクワエ ―― 109

番外編：嫉妬マスク ―― 114
番外編：モモンガさんとアヴェさんのファッション事情 ―― 122
番外編：カルマ極悪と食人種へのフォロー ―― 128
番外編：コキュートスとナーベラル ―― 133
番外編：至高のものまね大会 ―― 139
番外編：ちょっとした行き違い ―― 146
番外編：デートｉｎＢＡＲ ―― 151
番外編：ツアー・コンタクター ―― 159
閑話１８・赤ちゃんはどこからくるの？ ―― 166
万物の胎盤 ―― 172
産むというスキル ―― 177
ナザリック地下大墳墓の応対 ―― 183
爆発すべき人（？）達 ―― 187
指輪の話 ―― 191

本編

終わりが終わり始まりが始まる時

「いよいよ最期ですね。アヴェさん」
「そうですね、モモンガさん」
荘厳な玉座の間で玉座に座る二人の人影。
いや、良く良く注視して見るとそれは人と数えていいのか疑問が残る姿だった。
王座に座るは仰々しい肩当と漆黒のローブを羽織った白骨。
妃が納まるべき対になる座には頭部と胸部だけは美しい人型、しかし六本の腕と蛇の下半身がそれを人間ではないと知らせる女性がなだらかな傾斜の台に尻尾を投げ出して持たれ掛かる。
ローブの白骨はギルド、アインズ・ウール・ゴウンのギルドマスターモモンガ。
蛇身の女性はアインズ・ウール・ゴウンの中期から終末期に掛けてモモンガを支え。
この二人以外のギルドメンバーがログインしなくなってから婚姻システムを用いてゲーム内で妻となった女性……?だ。
実を言うとリアルでの性別はお互いに知らない。
オフ会にはアヴェは参加しなかったためだ。
それに、所詮ゲーム内での婚姻である。
日々黙々とナザリック大墳墓の維持費を稼ぐ狩りを行っているモモンガが人と触れ合いたくなったとき。
ほぼ毎日ログインし続けて個人チャットで会話を交わしていた。
その事実だけでアバターの性別が違う二人を結びつけるのには充分だった。
アヴェのアバターは直接戦闘能力が非常に乏しいため、並んで狩りをする事は殆どしなかったが、最期までログインを続けたもの同士。
廃れ行くユグドラシルから離れられない寂しい者同士が結びつくのは必然だったのだろう。

傍から見れば寂しい者二人はユグドラシル最期の日を二人きりで迎えるために、玉座の間から守護者統括という役割を負わされたＮＰＣアルベドを退出させて長年親しんだ仮想空間の最期の時間を楽しんでいた。
「最期に、ヘロヘロさんだけでも来てくれてよかったよかったですよー」
「そうですね。忘れないでいてくれて、時間を割いてくれる人が一人でもいた。それだけでなんだか、報われちゃいました」
「はは、本当に。……そう思えるのもアヴェさんのおかげかな」
「私も、モモンガさんのおかげだと思います」
「ですねー。一人なら、こんな気持ちにはなれなかったと思います」
お互いに、笑顔のアイコンを交し合う二人。
その姿に最後の時という悲壮感はない。
お互いがいるほうの肘掛によりかかりながら、荘厳な玉座の間には小さすぎる声量でささやきを交し合う。
「あ、そういえばモモンガさん私のアドレス知ってますよね？」
「はい、知ってます」
「ユグドラシルのサーバーがダウンしてもメール、しましょうね」
「……はい」
「それで、また一緒に、新しいＤＭＭＯをはじめましょう。二人で」
「アヴェさんがそういってくれるなら、是非」
「こちらこそ、よろしくお願いします」
お互いぺこりとお辞儀する。
そして、再び笑顔アイコン。
さらに明るく笑い声を出す。
お互い大事な思い出を守ってきた、しかしこれからは新しい思い出を作ってゆくのだ。
そう思うと、モモンガも、アヴェも、失うことの辛さに耐えられる、そんな気持ちでサーバー内時間が０時を指す瞬間を迎えた。
しかし、終わらなかった。
「ははは……あれ？」

「あれ、ログアウトしませんね」
「どういう事でしょう。サーバー閉鎖の延期？」
「ユグドラシル２が始まるなんて話、無かったですよね」
「噂にも出なかったですね……知ってれば多分、モモンガさんを誘っています」
「うーん？ちょっと全体チャットをいれ……え!?」
「どうしました？モモンガさ……え？」
「どうしまし……えええ？」
お互い、呆けたように口を開いて見つめ合う。
そう、「口を開いて」だ。
ＤＭＭＯユグドラシルにおいて、アバターの口は動くものではなかった。
しかし今、現実としてお互いの認識の中で口は動いている。
骨のモモンガはともかく、アヴェにいたってはその表情は驚きに彩られ、美しい顔はどんな表情でも美しいという事を示している。
「顔、動いてますね」
「動いてますね……」
「え？なんで、ありえないですよね」
「ないない、ないです」
「えっと、ＧＭコール……え？コンソールでないですよ!?どう……ふぅ」
「嘘！そんな……！ってなんだかモモンガさん急に落ち着きましたね？」
思わず玉座から立ち上がったものの、突然だった起立のように急に落ち着きを取り戻して席に着いた。
そのあまりのギャップに、アヴェはさらに混乱を加速させる。
頭の中で何かモモンガさんは事態にアテでも付いたの早すぎるでしょ!?などの驚愕を持って。
「いや、なんか混乱極まったら急に落ち着いちゃって……おっかしいな？納得したりはしてないんですが」
「あ、あー、キャパ超えちゃってフラットになった感じでしょうか？」

「んー。表現するならそうなんですけど……これ大丈夫なのかな」
「どうでしょう……でも、モモンガさんが冷静になってくれたおかげで私も冷静になれそうです」
「あ、それは何より……にしても、バージョンアップにしては告知無しはおかしいですよね」
「おかしいですよ。こんなのが許される状況は法律がそんな規約を許しません」
「ですよねー。何が起こったんだろう。とりあえずナザリックの外に出てみますか？」
「そうですね。外に出て人がいるとは思えませんけど」
「はは、俺らの大墳墓は毒沼の中、ですからね」
混乱の後の会話で何とか平静を取り戻した二人は視線を交わした後……モモンガの表情は解らないが……微笑みあったような雰囲気を出す。
そしてお互い言わなくとも解る行動として、ギルド所属者の証である指輪の力で地下墳墓の地表へと転移を行う。
今だにゲームの中だと思っているからこその自然な行使。
一瞬の視界の暗転のあと、揃って壮麗な霊廟が並ぶ大墳墓の入り口に出る。
この場合は大墳墓の複数ある霊廟の入り口ではなく、墳墓そのものの入り口だ。
「あ？え、わあああああぁぁぁ……ふぅ、なんだろう、感動したのに落ち着いちゃったぞ」
ぶつぶつと呟くモモンガを他所に、とぐろを巻いてへたりと肩の力を抜いたアヴェは大きく息を吸う。
「空気が、美味しい……それに、これが草原なの……？こんな、こんなのって……」
彼女（？）は泣いていた。
静かに、目の前に広がる広大で、緩やかな風に揺れる草むらは異形種が多く持っている暗視能力によって鮮明に見えた。
さらに二一三八年では地球上のどこにも存在しないはずの白い抜

けるような星空。
　その光景に心揺さぶられて。
「あ、匂い……この青っぽい匂いってもしかして草の匂いですかね、アヴェさん！匂いなんて今までのＤＭＭＯじゃなかった、機器にだってそんな機能無いはず……どういうことだ!?」
「くさの、におい……」
　異常事態を飲み込みつつあるモモンガと、静かに感動に涙するアヴェを他所に草だけが静かに揺れていた。

強制賢者モード

「アヴェさん。感動しているところすいませんけど、ちょっといいですか？」
「え……あ、なんで、こんな……」
「ええ、なんとなく自分も気分を強制的に落ち着かせられた感じがなければアヴェさんと同じような状態になったと思います」
「あ、ご、ごめんなさいモモンガさん。お話をどうぞ」
　涙を拭うアヴェに、今浮かんだ奇妙な考えを打ち明けるべきか、改めて逡巡してから。
　モモンガはゆっくりと口を開いた。
「いいですか、急に付いた表情、消えたコンソール、ユグドラシルにありえない環境の変化、そして匂い。これらを総合するとですね」
「どう、なるんですか？」
「ここは、ユグドラシルでも、日本でもない、ここはそんな場所なのかもしれません」
「は、あ……ありえるんでしょうか？」
「ありえるかどうかはさておき、他にちょっと、表情だけならビジュアル機能のアップデートで納得できるんですけど。その他の要素が現実離れしすぎていて、結論も飛躍しちゃうんですよ」
「なんだか、現実感ないですね」
「環境はこんなにリアルなんですけどね」
　そこでふっと気付いたという様にアヴェが目を丸くして六本ある腕のうち、真ん中の左腕を眼前に突き出し、指輪を凝視する。
　彼女の様子が少しおかしいので、モモンガは思わず声を掛ける。
「あ、リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンがどうかしました？アヴェさん」
「もしここが現実なら、今さっき私達凄く自然に指輪の効果を使いましたよね」
「あ！そういえば」
「漠然と大墳墓の入り口へ、って思っただけで移動しましたよね？私

達」
「確かに」
「こんなのって、現実にある、んでしょうか？」
月明かりの下、なんだか全てをどうしたものかな？という雰囲気で二人が固まる。
ゲームのアップデートならいいと思う一方。
ユグドラシル内で出会うお互い以外に拠り所のない二人は思ってしまった。
こんな現実も、あっていいんじゃないか？と。
「あの、モモンガさん。何か、何かここがゲームかどうか確認する手段ってないでしょうか？」
「え……うーん、そうですねー……あ、いやいや、それは不味いよ……」
何か思いついたようだが、慌てて打ち消すように頭を振るモモンガを見て。
なぜそんなに必死になって打ち消すのか、アヴェは不思議そうな顔をした。
その表情を見てモモンガは実に言いにくそうに、搾り出すように腕を組んでアヴェに言った。
「いや、そのー……十八禁に抵触するような行為をしてみる、とか。ゲームが続いてるなら即、ＧＭからの警告が入るはずです」
「あ、なるほど」
ぽん、と三対の腕で綺麗に揃った手を打つアヴェをみてモモンガは少しきょどった。
どうやら小さな精神の動きなら急にフラットな状態になったりはしないようだ。
え？何でそこで納得しちゃうの？そういうの気持ち悪いー！とか言われると思ったのに。
そんな動揺がモモンガの心中にはあった。
「どうしました。モモンガさん」
「え、いや、だって、お嫌、ですよね？」
モモンガはギクシャクとぎこちない動きで胸元を隠すブラのよう

な衣装と、様々なアクセサリしかつけていないアヴェを見やる。
　え？嘘だろもしかして触って良いの？そんな思考を巡らせて眼窩に浮かぶ赤黒い光を明滅させる。
　視界的に言えば何度も瞬きをしているような感覚だ。
　慌てるモモンガを見て、アヴェはふっと笑う。
「モモンガさん」
「は、ひゃい！」
「私は貴方の何ですか？」
「え、それは、ギルドの仲間で……」
「それだけ？」
「その、それは」
　するりと音もなく這い寄る蛇女の胸に視線を吸い寄せられながら、モモンガは後ずさる。
　内心、正答はなんだとヒントを求めて、すっと突き出されたアヴェの整った細い面と胸の間で視線を行き来させる。
　そして……。
「ふぅ……」
「あ、落ち着きましたねモモンガさん」
「すいません。超テンパったみたいです。あの、解らないので教えてもらっても……ダメですか？」
　ガクリと頭をかしげて姿勢を崩すモモンガの様子見て、アヴェは微笑む。
　そして少し意地悪だったとでもいいたげにだらりとさげられたモモンガの手を取る。
「モモンガさん。私達は婚姻システムで結婚しているのですから。もし警告が飛んできても言い訳はしやすいと思いますよ。それに」
　結婚している、という所ではっとしたようにモモンガが顔を上げると、悪戯っぽく冷たくも見える美貌を崩して彼女は微笑む。
「私達は夫婦じゃないですか。例えそれが仮想の夫婦でも、お互いの間にはそれをするに足る信頼があると思っていたのですけど、私だけでしたか？」

「そ、そんにゃことは、にゃ、ない、です……」
モモンガに激しく頬が紅潮するかと思うような気恥ずかしさが湧き上がり、一気に沈静化する。
そして目の前で微笑むアヴェと、次の生といえるかもしれなかったＤＭＭＯを共にしようと思っていたことを思い出す。
仮想の世界で始めて絆を作れたモモンガが、仮想の絆を限りなく現実に近づけて、次に繋げる相手。
そう思えば、少しくらい、ほんのちょっと、運営が存在するのかどうかを確認するくらいは。
何より本人が許しているのだし……。
モモンガは許される、気がした。
実際どうかはやってみるまで解らないが、少なくとも彼の中の人、鈴木悟はそう思った。
ここまでして触ったらキモイ！とか男心弄びすぎですからねアヴェさん！と腹を据えて口を開く。
「で、では触らせてもらいます……貰うよ、アヴェさ……アヴェ」
「はい、あなた」
「たはーーーーーー！……ふぅ。改めて、失礼します」
軽く、骨だけのスカスカの手でアヴェの胸に手を添える。
そしてお互いに何の警告も現れないことを確認すると、口を開く。
「きませんね、警告」
「来ないですね……本当に、これがリアル、なんでしょうか」
「リアル、な感触なんでしょうか、これ」
「えっと……はい、自分で触った時もこんな感触だったと思います」
実際の女性に触れたことのないモモンガが問うと、ついといった感じでアヴェが口を滑らせた。
慌てて自分の胸に触れていた手を口を塞ぐのに廻すアヴェを前に、モモンガが間抜けな声を出してしまう。
「え？」
「あ、そこは触れない方向で！元の性別がどっちだったかはお互い触れないほうがいいと思います！モモンガさんが女性だった、なんてこ

ともありえるわけですし」
「いやいや、俺むっちゃ男ですよ!?」
「可能性です、可能性。捨てきれない以上、気にしないことにしませんか?ここははっきりしておきませんと」
「そう、ですね。ではお互いの元の性別は気にしない方向で……」
「はい、お願いします」
　そんなやり取りをしながらわきわきと添えた手を動かすモモンガに、アヴェが言った。
「あの、これ以上は……外ではだめです」
「あ、ああ!ですよね!?ごめんなさい!」
「いえ、その。外でなければ、はい」
　いいのかよー!と内心で叫んだモモンガは、再び強制的に賢者モードに入ったのだった。

ありんすちゃんとの出会い

精神は落ち着きを取り戻すものの、気がつけば玉座の間で並んで座るより近くに寄り添い。

柔らかな腕をそれとなく前腕（骨だが）に添えてくるアヴェの手の柔らかさに、ついつい甘やかな気分になってぽえ、っとしているモモンガだが。

そんな雰囲気を崩すものが霊廟の中から現れた。

「失礼いたしんす。モモンガ様、アヴェ様。転移の反応をかんじんしたので第一階層が守護者、シャルティア・ブラッドフォールン。拝謁の誉れを頂きとうございます」

「……！シャルティアか」

一瞬、流暢に話し、動いている、本来そのような存在ではないＮＰＣであるはずのシャルティアをモモンガは強く動揺する。

しかし彼のＰＫ及びＰＫＫの経験として動揺は敵の利になるだけだという経験が冷静さを取り戻させる。

まだＮＰＣが現れたが、彼らが動き出すなどというのは想定外で、敵なのか味方なのかの判断を要する、と思考する。

もしシャルティアが敵対行動を取るようならば、かなり不味い。

モモンガとシャルティアのキャラ構成は完全にシャルティア側がモモンガのメタであり、まともにやり合えばその勝率は二割行くかどうか。

アヴェの特殊技能はそれを僅かに上げてくれるかもしれないが、それも技能が働いていればの話だ。

シャルティアの能力がゲーム時代のままならば、アヴェの能力もゲーム時代のままだと思うが。

あちらにはあってこちらにはない可能性だってある事をモモンガは充分に解っている。

それはアヴェも同じなのか、彼女はモモンガの腕に縋りつくようにさらに身を寄せている。

（あ、柔らかい……）

そして腕に触れるアヴェの胸がこんな状況だというのにモモンガに女体の柔らかさを伝える。
彼がそんな事を考えているとはつゆ知らず、シャルティアは恭しくモモンガとアヴェに淑女らしい礼を取る。
「至高の御方、ナザリックの支配者たるモモンガ様とアヴェ様が供も連れずに出歩くのは、僭越ながら危険かと思いんす。よろしければわたしと部下を供回りにつかってくだしゃんせ」
「うーん、その、なんだ」
「どういたしんしたモモンガ様」
お前は敵か？と聞いて素直に答える敵などいないだろう。
どうやってシャルティアにこちらへの害意がないか試すかモモンガが考えあぐねていた所で、アヴェが動いた。
「ねえシャルティア」
「はい、なんでありんしょうか、アヴェ様」
「ペロロンチーノさんの設定とは言え少し盛りすぎじゃないかしら？」
空白が訪れる。
男のモモンガには一瞬本気で「は？」というリアクションしか取れなかったが。
シャルティアは違った。
月光の下で輝く銀髪と白皙の美貌を朱に染めながらゴスロリ服のフリルを弄り回しながらアヴェに哀しげな顔を向ける。
「し、しかし私は創造主たるペロロンチーノ様にそうあれと作られんしたから、盛る以外の選択肢は無いんでありんすの」
「そう、大変ね……たとえそれを指摘されてもそうあれといわれた姿を保つのは辛くないかしら」
「そんなことありんせん！たとえアウラのチビスケに偽乳といわれようが、あると思ったらナインペタンというギャップをペロロンチーノ様が好まれるなら私は望んで無乳地獄に堕ちるでありんす！」
「そ、そう。ごめんなさいね。余計に傷つけてしまったみたいで」
「いえ、モモンガ様と共に最期にナザリックに残ってくださったア

ヴェ様の気遣いでありんすから、ちょっと、ちょっと痛いくらい逆に嬉しいでありんすよ……」
顔を真っ赤に染めてプルプル震えるシャルティアだが、かなり失礼な事を言ったのに攻撃に移るなどの敵対行動を取る様子は見受けられない。
そこでモモンガはこそっとアヴェの耳元に顔を寄せて小声で話し始めた。
「あー……アヴェさん試しました？」
「はい、シャルティア相手に危険かと思いましたが……逆に言えば彼女が敵対しないなら大きな安心を得られますので」
「階層守護者最強、ですからね……領域守護者のルベドは除くとしても」
「ごめんなさい。ぶっつけ本番で危険な事をしてしまって」
「いえ、いいんですよ。正直……自分もゲームと同じ能力を発揮できるかわからない状態で友好的か試すのは誰が相手でも危険ですからね。緊張感のあるうちに最強を相手に試金石を撃てたのは悪くありません。それに……」
話し終わってモモンガは言葉を止める。
気のせいだろうか。
なんだかシャルティアは恥らいながらも息を弾ませて、なんだか嬉しそうな……。
だがそこでモモンガは考えを切り替えた。
彼女がちょっとアレな趣味をしていても頼りになる味方かもしれないという状況を活かさない手は無い。
「どうなさりんした？お二方で内緒話とはつれのうございんす」
「いや、これからどうしようかなと。見ての通りナザリックの周辺地理が異常だ。この調査をどうしようかなと」
「それでしたらわたしの吸血鬼の花嫁は斥候系の能力はありんせんですので……悔しいですが数の多く野生に紛れられるアウラの手勢か、隠密に長けたコキュートスのエイトエッジアサシン、デミウルゴス配下の悪魔も知恵が廻るという点ではよろしいのではありんしょうか

？」
僅かな悔しさを覗かせながらシャルティアが他の階層守護者の名前を挙げる。
それを見た上でモモンガは再び考える。
ここは一つ念を押しておくべきか、先ほどはアヴェさんが行動したわけだから今度は自分が、と。
「シャルティア。他の階層守護者が俺達に敵対する可能性は？」
何気なく放ったその一言にシャルティアのただでさえ白い面貌が一気に蒼白になり震えだし、モモンガ達に土下座する。
「お許しを！わたしども階層守護者がモモンガ様をご不快にさせることをしたでありんすか!?なにとぞ、なにとぞそのようなことを仰る原因を教えてくださるようお願いしんす！わ、我々ナザリックが至高のお二人を失ったら、明日からどう生きていけばいいか……わかりんせんでありんす……！」
「え、あ、いや」
震えて深く深く頭を下げて這い蹲るシャルティアの姿に、小さくない罪悪感を感じてモモンガは思う。
え？俺たちがいないと生きられないとか超好感度高くない？と。
思わずアヴェに助けを求めるように視線を動かすと、心得たというように彼女は頷く。
「落ち着いてシャルティア。私達は何も不快に思ってはいないわ。でもね、少し不安なのよ。見なさい、このユグドラシルにありえざる景色を。この環境の変化が守護者達になにか変化を与えていないか、それをモモンガさんは心配しているのよ」
宥め、言い聞かせる優しい声色で体を低くして三本の腕をシャルティアの体に添えて、優しく一本の手でシャルティアの頭を撫でるアヴェ。
本当に怒ってはいない、ただ不安なのだと言い聞かせる。
「そんな、至高の御方々がわたしたち如き下僕を……あ！そう、そういうことでありんすか。モモンガ様」
じっと、シャルティアがアヴェを見る。

そう、彼女もまたレベル百プレイヤーだが、その直接戦闘能力はプレアデスにすら劣るかもしれない。
なぜなら彼女は完全にＧｖＧ支援能力に特化しており、そもそもが直接戦闘をするようなキャラ構成をしていないためだ。
スキュラやキマイラなどのエキドナの娘である異形種の種族レベルを最大限にまで延ばし、六種の種族レベルを合計で七十五以上取得した上ではじめて得られる種族異形の母《《エキドナ》》。
さらにそれをカンストさせているので職業スキルは０という異様なビルド。
そこから生み出される能力はパーティーメンバーの能力値をレベル五分だけ上昇させるという、十レベル差があれば互角の装備では勝敗がほぼ決定するユグドラシルでは垂涎の能力。
それも本来の上限レベルである百レベルを突破して百五レベルで戦えることの有益さは凄まじいの一言に尽きる。
しかしその代償に種族的なスキルしか使えず、異形種の装備制限をもろに受け、五レベル分の上昇スキル異形の母神の効果は自身は得られない。
完全な特殊支援型なのだ。
もし仮にシャルティアが本気で挑めば彼女は容易く討ち取られるだろう。
「了解しんした。ではこのシャルティア・ブラッドフォールン。他の階層守護者及びプレアデス、執事長などのナザリック所属者の安全が確認できるまで、僭越ながらお二人の直援の壁として勤めんしょう」
「うん、頼んだよシャルティア」
「頼りにしています」
「はっ、もったいないお言葉でありんす」
即座に全力の戦闘態勢……ゴシック服から真紅のフルアーマーを着用して、神話級アイテムスポイトランスを携えたシャルティアがモモンガとアヴェの前に立ち、吸血鬼の花嫁達が後方を固める。
こうして一先ずはナザリックの観察の準備は整ったのである。

モモンガとアヴェ、反省する

モモンガとアヴェの二人は第一から第四階層をシャルティアに先導されて移動する間、各階層に配置された自動湧きの低レベルＮＰＣが尽くひれ伏すのを見た。

その崇拝の様はどこか二人に据わりの悪い思いをさせ。

第五階層でシャルティアが出した先触れの吸血鬼の花嫁によって二人の階層通過を知って、出迎えたコキュートスの態度によってそれは最高潮に達した。

「オオ！栄エアル、アインズ・ウール・ゴウンヲ象徴スル尊キ御夫婦ノ来訪ヲ受ケテ、コノコキュートス万感ノ想イデゴザイマス！」

元から寒冷耐性を有するモモンガは元より、氷結牢獄の極寒から課金によってスロットを拡張した指輪で耐性を得ていたアヴェも震えが走った。

なに、シャルティアもそうだったけどなんでこのＮＰＣ達はこんなに好感度マックスなの？

設定担当のタブラ・スマラグディナ達の基本ラインには一部の例外を除き、アインズ・ウール・ゴウンへの忠誠は書き込まれていたはずだが。

それでもコレは度を越している。

何が、彼ら元ＮＰＣを駆り立てるのか。

その未知が二人を我知らず震えさせた。

どうしてそう想うのかといえば鈍く蒼い光を放つ二足歩行の蟻と蟷螂をまぜたような甲虫で、四本腕の武人染みた性格のコキュートスが平伏しているからだ。

これは確実にただの忠誠ではありえない。

「あ、あのなコキュートス。そんなに腰を低くしなくていいぞ？」

「イエ、御方々ノ前ニテ平伏スルノニハ未ダ不足カト。ココは五体投地ヲ持ッテ……」

「コ、コキュートス。そこまでする必要はありません。貴方は仮にも武人なのですから、そう易々と体をなげうつような事はしてはいけま

せん」
「ムゥ……モモンガ様ト、アヴェ様ガソウ仰ルノデアリマスレバ」
「解ってくれたか……さ、立ってコキュートス。武人建御雷さんもお前のそんな姿は望んでいないはずだよ」
「ハッ！勿体無キ御言葉ニゴザイマス！」
そこまで言われてコキュートスはようやく立ち上がった。
しかしその全身から発せられる尊崇の念は衰えない。
「ねぇモモンガさん。私どうにかなりそうです。なんというかその、手厚すぎて」
「あ、実は俺も沈静化が……」
忠誠度マックスのコキュートスを前に二人はこそこそと言葉を交わす。
そんなモモンガとアヴェを他所にシャルティアがコキュートスに声を掛ける。
「それでは確かに至高の御方お二人のナザリック視察の警護、お願いしんした」
「承知。第六階層マデハコノコキュートス、シカトオ送リスル」
「お頼みするでありんすよ。モモンガ様は強大で頼もしい方でありんすが、アヴェ様はすこうし、ね？」
「ソレ以上ハ不敬ダ」
「でも事実でありんしょう？警護、しっかりお願いするでありんすよ」
「ソレモ含メテ承知シテイル。心配無用ダ。デハモモンガ様、アヴェ様。参リマショウ」
「あ、うん。頼むよコキュートス」
「お願いしますねコキュートス。この美しくも厳しい階層を見せてください」
「ハッ！」
ここでシャルティアは下がり、供回りの吸血鬼の花嫁達も本来の守護領域である第一から第三階層に戻って行く。
そしてコキュートス配下の雪女郎が吸血鬼の花嫁達がいた位置につき、コキュートスが先導する。

先導する傍ら、少しでも至高の存在の言葉を戴きたい、というのが本音だろうが。
コキュートスは敢えて夫婦の会話には口を挟まず警護に徹する。
「うーん。もしかしてアウラやマーレ、デミウルゴスもこの調子なのかな？」
「それは……気疲れしてしまいそうですね」
アヴェの言葉にクワッと眼を見開くことは出来ないが、コキュートスは顎をガチリとうちならして氷結した世界で尚周囲を白く染める凍結の吐息を吐く。
「アヴェ様ガ気疲レトハ！コノコキュートス、何カ粗相ヲ!?」
「あ、いや、そうではないんだけれど」
「コキュートス、俺やシャルティアと違ってアヴェさんは精神作用無効のスキルがない。その為傅かれればどうしても疲れが貯まるのだ。それに、アヴェさんはカンストプレイヤーとはいえ種族レベルだけでそれを賄っているため、本来職業を修得する事で得られるステータス的な恩恵も薄い。だからまぁ、その、あまり気を使いすぎるな。彼女にはその方が気が楽だ」
「そうそう！もっとフレンドリーにしてくれた方が私は気楽ですね！」
「ムゥ……至高ノ御方ノ御命令トアラバ……イヤシカシ不敬デハ……」
安全を自負する自己の階層内だからか、コキュートスはモモンガに言われた言葉を丸みを帯びた胸甲の中で反芻する。
至高の御方の統括者であるモモンガの配偶者であるアヴェにも当然礼は尽くすべきである。
だがそれが負担になるといわれれば、納得してしまうほどに彼女はか弱い。
故にどのような節度を持って接するのが最適なのか、彼らＮＰＣは考えずにいられない。
そして第六階層に到着しても尚、その答えはでることはなかった。
「ようこそモモンガ様！アヴェ様！この第六階層へ！」

「え、えと、ようこそいらっしゃいました。お二方にその、最高のおもてなしをさせていただきますう」
第六階層円形劇場にて、コキュートスから双子の第六階層守護者スーツを着た少女アウラ・ベラ・フィオーラとブレザーの制服……ただしスカートの……を着た少年マーレ・ベロ・フィオーレが出迎える。
コキュートスが先触れの雪女郎に「あまり過分な配下を引き連れてアヴェ様のご負担にならないように」という伝言によって。
彼女達姉弟が連れている下僕はドラゴン・キン数体に留まっている。
「あ、ああ。出迎えありがとうな。アウラ、マーレ」
「闘技場に来るのも久しぶり……私は基本的にパーティーにいるだけ、戦場では隅っこで死なないようにするのがお仕事だったし、ギルド内での模擬戦にも縁遠かったから」
「アヴェ様は仕方ありませんよ！それに……なんだか急に力が湧いてきたんですけど、それがアヴェ様のお力だってわかるんです！」
「え？」
「今まで至高の御方々のみが受けられた母神の寵愛、ですっけ。レベルを押し上げるスキルの効果を感じるんです」
「あの、だから、創造主であるぶくぶく茶釜様達が感じていた力を僕達も感じているんだと思うと……えへへ。嬉しいんです」
「そう、そうなの……それは私も嬉しいわ」
「ありがとうございます！やっぱりアヴェ様はお優しいですね。我々ナザリックの母で在らせられるお方に相応しいお心の持ち主だと思います！」
「ふむ。母神の寵愛の効果がお前たちにも？」
「はい。なんとなく力がみなぎって、これはアヴェ様のお力だなーっていうのがわかるんです」
「ふむ……」
「なんだか与えている実感は無いのだけれど、私なんかが貴方達に何かを与えられるなら嬉しいですね」
「そんな！私なんかなんて至高の御方にあるまじきお言葉です！」

「そ、そうですよ。アヴェ様はそのお力を誇ってください」
無邪気そうに笑うアウラと、頬を染めて悦ぶマーレ。
ソレを見ながらモモンガは考える。
母神の寵愛とは件の上限を超えてレベル五分のステータス補正を与えるスキルの事だ。
コレは本来ギルドメンバーと異形種にのみ与えられる恩恵だったが。
今この双子の姉弟は異形種ではない亜人種であるのにそれを感じているという。
どうやら、ゲーム時代のスキルは存在するが微妙に効果が変わっている場合もあると心に留めなければならないな、とモモンガは心に刻む。
「それでは参りましょう、御二方。第七階層、溶岩へ！」
「きっとデミウルゴスさんも喜び……」
「モモンガ様！アヴェ様！突然いらっしゃらなくなられて……！とうとう最後のお二人が私どもを捨てたのかと思いました！」
「あれ？アルベド!?」
「あ、あれれ、デミウルゴスさんまで」
「アルベドと並び勝手な判断で持ち場を離れた事、深く陳謝いたします。しかしアルベドが御二方の消失を感じ取り第九階層のメイド達は大混乱。今はメイド長のペストーニャがなんとか抑えていますが……至急、お戻りになられますよう。どうか、どうか」
円形劇場に現れた一対の角と黒い翼を供えた黒髪のお淑やかそうな美女アルベドと、蛇腹のような尻尾がはえた東洋系サラリーマンといった出で立ちの眼鏡の青年デミウルゴスが、跪いて二人に願い出る。
ソレを受けた二人は内心のんびり、というよりどんな状態にあるか解らない守護者達とは個別に、味方であると思えるものを傍に置きながら会いたかったのを外されて不安を覚える。
しかし。
「モモンガ様、アヴェ様。なにとぞ……」

「伏して、お願い申し挙げます」
コレまでの階層守護者のようにひれ伏すアルベドとデミウルゴスを見て思った。
少し軽率だったかもしれない、と。

死の王と怪物達の慈母

アヴェの頭は自然と下がっていた。
「心配を掛けてごめんなさい。アルベド、デミウルゴス」
「アヴェ様！至高の御方が我ら如きに頭をお下げにならずとも」
「そうです！僭越ながらモモンガ様とアヴェ様はただ許せといってくだされば、それだけで私達守護者は心がほぐれます」
「いや、アヴェさんの言うとおりだ。心配を掛けてすまなかったな。そして二人の言葉を受け入れよう。許せ、アルベド、デミウルゴス」
「モモンガ様……慈悲深き我らが至高の主。御言葉、ありがたく頂戴致します。」
「モモンガ様とアヴェ様のお二人に頭を下げられるなんて……ああ、出すぎてしまったかしら」
生真面目な顔で頭を下げるデミウルゴスと、うろたえるアルベドの姿にモモンガはもう少し高圧的に接したほうがいいだろうか。
もしかってのギルドメンバーの残した彼らがソレを望むなら……と考えたところで、アヴェに手を引かれる。
「ん？なんだいアヴェ」
「無理は、いけませんよ。人は、他人の理想どおりにはなれない。それをこの子達にもゆっくりわかっていってもらいましょう」
「だけどなぁ……」
モモンガの胸に去来するのは、忘れ形見のような存在を喜ばせたいという想いだ。
彼らを喜ばせることで、なにがしかの失せてしまったものが一部でも帰ってくるような気持ちがあったので、そう思った。
だがアヴェはモモンガの骨だけの手に自らのそれを添えたまま首を振る。
「貴方が無理をして演じることの方が、かつての皆さん……たっち・みーさん達は喜ばないと思います。あの人達はそのままの貴方を好きだったんですから」
「……そう、だな。はぁ、アルベド、デミウルゴス、そしてアウラにマー

レもだ。聞いてくれ。いや、シャルティアとコキュートスにも聞いてもらいたいな。呼んでくれないか？」
「ナザリックの警備が薄くなりますが、よろしいのですか？」
「うん。良いんだ。シャルティアはさほど気にしていなかったけれど、全員が知るべき変異が起こっているし……ああ、全員といえばセバスもだ。メイド長とプレアデスの代表として彼も呼ぶように」
「モモンガ様の命とあれば……即座にメッセージなどで伝達いたしますわ」
「頼むよ。さて、三人を待つ間はどうしようか」
　張っていた肩肘を骨なりに緩めると、モモンガはかかと顎骨を打ち鳴らした。
「一先ず、観客席かどこかにでも座らないか？」
　その言葉に同意しない者はその場にいなかった。

「え、。マーレ、お前その服装の意味知らずに着てるのか？」
「そ、そうですけど……何か問題がおありですかモモンガ様」
「んー、あー、いやそれはなぁ……」
「ええとね、ぶくぶく茶釜さんは少し変わった趣味をしていて……異性装というのは解るかしら」
「ふむ。語感からすると異性が着用すべき服を着用する、ということでしょうか」
「そうだ、さすがは知恵者として作られたデミウルゴスだな、話が解る」
「ソレが何か問題なのでしょうか？至高の御方々のお一人が決められたことならそれが常識になるのではないでしょうか」
「いいえ、それがね。アウラとマーレが異性装しているのはぶくぶく茶釜さんの個人的な趣味なの」
「えええ!?そうなんですか!?」
「あああ、あのっ、じゃあ他の至高の四十一人の皆さんは……この姿がお嫌いでしょうか……」
　なんとなしに守護者達と雑談する会話の内容となると、どうしても

過去のギルドメンバーの話になる。
　今はその中でも守護者一堂も疑問に思っていた、なぜ男のマーレがスカートなのか？という事にまつわる会話になっていた。
「私達四十一人に男の娘……「男」の「娘」と書いておとこのこって読むのだけれど、それを毛嫌いするような人はいなかったから安心してね」
「うむ。せいぜい茶釜さんの趣味人っぷりに苦笑いする程度だったな。これは他の守護者皆の「そうあれ」と作られた部分全てに当てはまることだ」
「確かに……私どもナザリックに仕える者もエクレアに関してはアレが「そうあれ」とされているから受け流していますもの、そういうことですね、アヴェ様」
「そう思ってくれていいと思うわ。しかし、レベル一のＮＰＣに敢えて獅子心中の虫を演じさせる餡ころもっちもちさんも中々人が悪いわね」
「だねぇ。あの人結構愉快犯的な所があったから……」
　コロコロと笑うモモンガとアヴェを見ての守護者達の反応は様々だ。
　アルベドはほぅっとため息をついてちらちらとデミウルゴスやマーレを見ている。
　デミウルゴスはアルベドからの視線を軽く受け流して笑みを浮かべる。
　アウラとマーレは優しい支配者の姿に終始嬉しそうだ。
　そしてデミウルゴスが口を開く。
「いや、そういえば記憶にあるお二人は恐怖と威をもって部下を統括するようなお人柄ではありませんでしたね。至高の御方々同士でもお二人は常に調整役でありました」
「そうねデミウルゴス。私の記憶でもお二人は愛情を注いで下さった皆様方の中でも特にお優しかったわ」
「じゃあ、これからはもっと気楽にお話させてもらってもいいんでしょうか！」

「お、お姉ちゃん。さすがにそれは不味いよ……でも、今まで思っていたよりは気楽にお話させてもらえる、気はするなぁ」
「節度を忘れてはダメよ。けれど……残られた至高の御方であらせられるお二人がどのような方でも。我らナザリックの者は全身全霊をもってお仕えさせていただきます」
「そうだねアルベド。モモンガ様とアヴェ様こそ私達ナザリックに所属する者の存在する意味であり、意義。このラインは守らせていただきたく存じます」
「うん。そのあたりは好きにしてくれて構わない。だが各々の俺達に対する態度の違いで諍いを起こすのはやめてくれよ。いや、ちょっと位は喧嘩しても良いのかな？過去にいたお前たちの創造主も喧々諤々やっていたものだ。そしてそれが今はいい思い出だ……」
「「「「はっ！」」」」
「この事はシャルティアとコキュートスにもお話してあげないとね」
　和気藹々といった雰囲気の中で、コキュートスとシャルティアが姿を顕す。
「コキュートス、御命ニヨリマカリコシマシタ」
「シャルティア・ブラッドフォールン、至高の命に従い御前に」
　礼をとる二人に、モモンガが楽にするように言う。
「まぁそんなに格式ばらないでくれ。とはいっても無理な話かもしれないが……とりあえず、話の前提として皆が俺とアヴェをどう思っているのか聞きたい」
　モモンガのその問いに、アルベドから口を開く。
「慈悲深く英知に溢れたお方であるモモンガ様と、それを良く支える賢母であらせられるアヴェ様です」
　次にデミウルゴス。
「深謀遠慮の底は見えず果て無き賢さを持ち強大な力をも有する端倪すべからざるべきお方こそがモモンガ様。アヴェ様は我らナザリックの下僕達に慈悲を持って力の恩寵を下さる、まさに異形の慈母でございます」
　さらにコキュートス。

「偉大ナル死ノ王モモンガ様。両義ヲ成ス生ヲ司ルアヴェ様。マサニ理想ノ御夫婦デアラセラレマス」
続いてアウラとマーレが。
「すっごくお優しい方々です！」
「この格好をぶくぶく茶釜様がお好きだから設定してくださった事を教えてくださった優しい方々です」
最後にシャルティアが。
「この世の美の結晶。その美しい骨格は世界を魅了する、それがモモンガ様でありんす。アヴェ様はわたし達ナザリックを包む慈母そのものでございんす。」
非常に高い守護者達の評価にモモンガは内心苦笑する。
そして、最初にこの印象を聞く前にぶっちゃけられて良かった、と思った。
もし内心をさらけ出していなかったら日々をこの高評価に相応しい演技をする事に腐心する日々が待っていたかと思うと震えがきそうだ。
そして、そうならなかったのはすぐ傍らに寄り添ってくれるアヴェがいてくれたから。
モモンガは深く感謝し……彼女が慈母という評価は間違っていないんじゃないか？と思うのだった。
これ以後、ナザリック大墳墓を拠点とするアインズ・ウール・ゴウンは大きく本来の歴史から外れることになる。

遠隔視の鏡＜ミラー・オブ・リモートビューイング＞

和やかな空気が流れるナザリック第六層円形劇場だが、ふとした瞬間に沈黙が下りると。

それは何となしに生まれた空白だったひとしきり語り終え、さて次は何を話すか、なんていう事をモモンガとアヴェが考えようとしたその時。

アルベドとデミウルゴスがそろって跪き、二人に願い出る。

「モモンガ様、アヴェ様。お二人が出た外は普通の草原だったのですね」

「そうなりますと、私共としてはナザリックの警戒レベルの引き上げを提案させていただかなくてはなりません」

ナザリックでも随一の頭脳を持つアルベドとデミウルゴスの言葉に、モモンガとアヴェは何を言われるのかと顔を見合わせる。

彼等以外の階層守護者も揃って何故？という顔をしている。

デミウルゴスは眼鏡の位置をすっと直すと、一堂に対して解説を始める。

「まずモモンガ様とアヴェ様には勿論ですが。シャルティア。君にも確認するがナザリックの周辺は草原になっていたのだね？」

「ああ、その通り」

「その通りね」

「それがどうしたんでありんすか？デミウルゴス」

重ねて確認したデミウルゴスの問いに肯定交じりの問いを返したシャルティアにアルベドが言う。

「それはねシャルティア。ナザリック大墳墓は沼地の中にあったはずの施設……周囲が知らぬ間に草原になっているなどという変化は第一から第三層を守護する貴女が報告すべき事態よ？」

「あ、ああー！それはたしかにそうでありんす！妾はなんという失態を……！」

「え？あ、そっか！今さっきモモンガ様達がお話になってた周囲が草原っておかしいよね！」

「そ、そうだねお姉ちゃん。そこまでの大魔法が働いたなら僕に感知できないのはおかしいよ……」
「ドルイド等ヲ修メテイル　マーレガ　気ヅカヌト　言ウノハ　確カニ明確ナ異常ダ」
　そうしてさらに話を進めようとしたところに壮年の執事といった体のセバス・チャンと顔の中心に縫い目が走る犬頭のメイド、ペストーニャ・S・ワンコが現れた。
「お待たせしました皆様。何やらただならぬ雰囲気なようで」
「お待たせしました……わん。モモンガ様とアヴェ様に階層守護者の方々が御揃いで何かございましたでしょうか……わん」
　そろって、素早く、しかし急ぎ過ぎないように整った挙措でモモンガ達のところへ相応しい距離へと近づいたセバスとペストーニャが一礼する。
　そんな二人にくつろいだ様子で足元を楽に構えたモモンガが鷹揚に手で応える。
「うむ。よく来てくれたセバス、ペストーニャ。シャルティアらの守護者は解っているがナザリックの外が毒の沼地からただの草原に変化した」
「む。それは……！」
「ナザリック全体の異常事態でございますわ……ん」
「そういうことだ。であるので皆に警戒態勢の構築を頼む」
　事態を把握した二人が膝をつくのを見て頷くモモンガは、並んだアヴェの手を強く握る。
　彼女は種族レベルを百重ねているというビルドの構成の関係でDPSの高いスキルや補助スキルと言ったものがほとんどない。
　ゆえに彼女はナザリックの第十層で守られるべき存在であり、守りたいモノなのだ。
「はっ。守護者統括としてこのアルベド、全階層守護者に万全な通達をだし守りを固めたいと思います」
「うむ。頼むぞ。セバスもプレアデスの……」
「申し訳ありませんモモンガ様。お言葉を遮るのは不敬と思います

が、もしや供も連れずにアヴェ様と外へ出ていらしたのですか？」
「ん、んん。そうだけど」
「僭越ながら申し上げさせていただきます。モモンガ様という絶対なる御方が共にいれば万が一はないと思います。ですがアヴェ様は億に一つがございます。それでなくとも私含めプレアデス一同モモンガ様アヴェ様ご両名の盾に成れず生き恥を曝したとなれば痛恨の極み。どうか、その事をお含みおきいただきたく存じます」
　ぎらり、と目を光らせて申し出るセバスに若干引きながら。
　なんというべきかモモンガが迷っている間に、アヴェがするりとフォローに入る。
「ごめんなさいセバス。私が久しぶりに外を見たいとこの人にお願いしたの。貴方たち最も私たちに近くに居る護衛に声を掛けずにごめんなさいね」
「いえ、アヴェ様。セバス様も言い過ぎでした……わん。そう言っていただけるのは嬉しいですが少々……わん」
「私たちは気にしていなくてよペストーニャ。けれど指揮系統ははっきりさせておかないといけないかしら。アヴェ様。このアルベド。守護者統括で全下僕の最上位者でございます。セバスやプレアデス、ペストーニャに指示を出されたなら私も把握しておきたいところですわ。お二人の気配が第九階層から消えて私たちがどれほど心細く慄いたかを御知りください」
　気まずげにアルベドを一瞥したペストーニャへかぶりを振り、その懸念を振り払いながらアルベドはアヴェに言い放つ。
　勿論正面切ってではなく、申し上げ奉るというように深く頭を下げながらだ。
　その動きに自分が失言をしてしまったことに気付きアヴェは僅かに顎を下げアルベドに謝罪した。
「ごめんなさいね。そう、確かにこのナザリックを統括するアルベドにまず謝るのが筋でした。勘気を恐れずに発言してくれたのはありがとう。気を付けるわ」
「そう言っていただけると光栄ですわアヴェ様。職務上至高の御方か

らの命令の経路の思い違いは看過しかねましたので。」
「確かにアルベドとしては職務上そういわざるを得ない問題ね。本当にごめんなさい」
「いえ、解っていただければそれで……」
　わずかなやり取りで互いの調整を終えると、アルベドが優雅に膝をつき礼を尽くす。
　恭しく跪くアルベドにアヴェは頭を下げ返す。
　それを見たら驚くのはアルベドの方で、慌てて頭を深く下げる。
「ア、アヴェ様もうしわけありません！私はなにもアヴェ様に頭を垂れさせるようなつもりでいったわけではありません。御顔をお上げくださいまし」
「そう……？気を遣わせてしまってごめんなさいね」
「お気になさらずとも、職務上申し上げた、というだけでアヴェ様は至高の御方でございます」
　と、ここでモモンガがアヴェに声をかける。
「過度に謝り合うのは不毛だよアヴェさん。それよりちょっとやってみたいことがあるから付き合ってくれませんか？」
「はい。なんでしょう？」
「周辺の偵察を行うべきだと思うんですが、未知の土地にいきなり人員を送り出すのもなんですし。部屋にある遠隔視の鏡を使えるか一緒に試してくれませんか？」
「なるほど……ではアルベドには改めてデミウルゴスと共同してナザリック内部の警戒を引き上げてもらう仕事をしてもらいましょうか」
　行動を決めた二人にさりげなく、デミウルゴスが案をだす。
「恐れながらモモンガ様。遠隔視の鏡の動作チェック中にも近隣……特に差し迫った半径1，2㎞程度の偵察は行っておくべきかと」
「うーん。それもそうか。ではセバス……いや、シャルティア。君の下僕のヴァンパイアブライドを総動員して今言った範囲の索敵をアウラの下僕の索敵能力を持ったモンスターと共同して行うように。知的生命体がいた場合とにかく交戦せず情報を持って帰ることを優先して」

「ア、アウラと共同でありんすか？」
「なあにシャルティア、モモンガ様の決定に不満でも？」
「おんしはありんせんでありんすか？」
「べっつにー。実務は下僕だし。シャルティアと並んで仕事するわけじゃないからね」
「あっそ。そういわれればそうでありんすね。ご下命、確かに承りんした。モモンガ様」
ひとまずの方針が決定したことで場の雰囲気が引きしまる。
そして守護者一同が改めて礼を取りモモンガとアヴェに命令を復唱する。
こうして各々の任務を果たすために守護者は分かれていき、アヴェとモモンガはゲーム時代二人の寝室だった部屋に指輪の力で転移した。
「さてと、それじゃあ始めましょうかアヴェさん」
「はい。ふふ、なんだか並んで遠隔視の鏡で市場を物色しながらお話していた時みたいですね」
「あー、異形種は街に行くのにも気を使いましたからね……あのころとはまた別な意味で大変になりそうですよ」
「ふふ、そうですね。さて、この鏡の使い方は……と」
二人並んで各々の遠隔視の鏡の前で様々な動作を試してみる。
その効果は見上げた星空が太陽に変わるころに現れるのだった。

出撃！ユリ・アルファ

「よ……お、おお！アヴェさん！解ってきましたよ鏡の使い方！」
「おめでとうございます。一緒に頑張った甲斐がありましたね」
「おめでとうございますモモンガ様。さすがは至高の御方」
「ありがとうナーベラル。とはいえこんな簡単な事で至高といわれるのはなんだかこそばゆいね」
「どのような事であろうと至高の御方々がなさることに些末なことなどございません」
「ははは……さーて、それじゃアヴェさん。シャルティアとアウラの報告では知的生命体はいなかった範囲外を見てみようか」
「はい。お供します」
　それからしばしモモンガとアヴェは手分けして視界を飛ばす。
　二人分で行う作業は一人であるなら手間が掛かったであろうことは想像に難くない。
「モモンガさん」
「はい？なんですか？」
「これを見てください。怪しい騎士風の男たちが歩いています」
「ん？なんだろう。このあたりの巡察かなにかかな？」
「察知系に対する防壁もないようですし、しばらく観察しますか？」
「うん。それが良いと思います遠隔視の鏡の視点を人里に連れて行ってくれるかもしれませんしね」
「では……」
「あ、その前に。アヴェさん寝たりご飯食べたりしてませんよね。大丈夫なんですか？」
「何言ってるんですかモモンガさん。私だって飲食不要や睡眠不要の指輪をつけていますよ」
「あ、そうでしたね。なら大丈夫……なのかな？」
「ええ。私はへっちゃらです」
「それじゃあ、もうちょっと二人で……」
　金属鎧を身に着けた騎士風の集団を仲睦まじく観察し続ける二人

を前に、ナーベラル・ガンマは努めて空気になろうとしていた。
まあ、元からメイドというのは空気のようにそこに居て当然を心がけるものだが。
改めて、と言ったところだ。
「あ。村っぽい所が見えてきましたねー」
「……？この騎士たち変ですモモンガさん。剣を抜いてますよ」
「揃いの鎧だけど盗賊か何か……いや村の方が違法な何かをしていて手入れの可能性も……」
「どうするべきかしら……あら」
遠隔視の鏡に小さく、だがアヴェの眼には十分なサイズで子供が写り込む。
「……モモンガさん」
「はい？どうしましたアヴェさん」
「子供がいるみたいですね」
「んー。あー、いるみたいですねー」
「モモンガさん。ここは一つ騎士たちを村を襲おうとしている悪役だと仮定して」
「はいはい」
「ナザリック・オールドガーダーを十体ほど送り込んで騎士たちで実験してみませんか？」
「ふむ……指揮官は？」
「万が一騎士の中に精神操作系の魔術を使う敵がいた場合に備えてユリ・アルファを」
「なかなかいい案ですが、こういう場合ってトップが陣頭指揮をとるものじゃないですか？」
「他のプレイヤーがいた場合でもユリ・アルファならアインズ・ウール・ゴウンのメンバー以外顔をしりませんしごまかしが効きます。いきなり私達が出るよりは良いんじゃないでしょうか」
「それもそう、ですね……えーと、魔法って使えるのかな……よくよく考えたら守護者との連絡方法考えてなかったぞ。伝言」
モモンガはダメ元で伝言の魔法をセバスに向けて飛ばしてみる。

　するとほどなくして回線がセバスとつながる。
『ん？あ。セバス？』
『は。何かご用ですかモモンガ様』
『あ……うむ。ユリ・アルファにナザリック・オールドガーダーを付けて威力偵察に出すことにした。防衛責任者のデミウルゴスと転移門の使えるシャルティアにはこちらから伝達しておくので準備をさせてナザリック地表に行かせるように』
『は。かしこまりましたモモンガ様』
　モモンガの様子を横から見ていたアヴェがどうでした？という顔をすると、モモンガは頷いた。
「伝言……魔法使えるみたいです」
「ああ、それならナザリック内の連絡網はある程度大丈夫ですね……。私はビルドの都合で使えませんが」
「あ、そっかぁ。アヴェさんは種族レベルでビルド埋まってるから魔法取ってないんですよねー」
「まあ、モモンガさんがお話したいときにはいつでも繋いでくだされば、いいんですけれど」
「そうですね……と、デミウルゴスとシャルティアにも連絡付けなきゃいけないのでちょっと失礼します」
「はい。お仕事頑張ってくださいね」
　モモンガは早速デミウルゴスとシャルティアにも伝言を繋ぎ指示を出す。
　するとしばらくするとデモウルゴスとシャルティアが控えていたナーベラル・ガンマを通して入室を許可されモモンガとアヴェの私室に現れる。
「お呼びに応えて参上いたしました」
「モモンガ様、アヴェ様。おまたせしんせんした」
「うん。よくきてくれた。メッセージでも言ったと思うが……」
「は、既にアルベドとは相談の上ナザリック・オールドガーダーは地表に向かわせております」
「そうか、ではシャルティア」

「はい、モモンガ様のご意向は理解しておりんす。わたしが先鋒を務められないのはちと残念でありんすが、しかとユリ・アルファとナザリック・オールドガーダーをあちらに送って、返しんす」
「ん。解ってくれているようならいい。早速行動に移ってくれ」
「はっ。時にモモンガ様」
「なんだ、デミウルゴス」
「ナザリック防衛の一環としてこれを申し上げるかどうかアルベドと協議したのですが」
「うん？なんだい」
「マーレからナザリック地上部を隠蔽するために周囲に丘陵を築く案がでております。どうなさいますか？」
「ふむ。他の強者を警戒するというならばそういった点が抜けていたね。ではその案の実行を認める。アルベドを通してマーレに実行の許可を」
「ありがとうございます。献策を受け入れられてマーレも喜ぶでしょう」
「ふふ、後で褒めてあげなければいけないわね」
「そうですねアヴェさん。ああ、それと。これから俺とアヴェさんの案を実行してくれるデミウルゴスとシャルティアもありがとうね。ユリ・アルファにも伝えておいて」
「はっ！では失礼いたします」
「同じく、承りましてございんす」
　デミウルゴスとシャルティアが一礼して下がるとモモンガはアヴェに声をかける。
「はー。どうなりますかね。アヴェさん」
「ユリ・アルファにとって大変なことにならないとよいのですけれど」
「まあそれを言ったら何もできなくなってしまいますから……精々敵が大したことが無いのを祈りましょう。それと」
「なんでしょう」
「ユリ・アルファがやられたらここでも金貨でのＮＰＣ復活ができるか試す機会にも……ああ、でもそれはなんかやまいこさんに悪いか

なぁ」
「そうなった時には威力偵察の案を出した私が悪い、ということで。モモンガさんはなにも気になさらなくて良いですよ」
「いやー、結局許可を出したのは俺ですから。責任は取らないと」
「では二人で半分ずつ悪いという事ではダメですか？モモンガさん」
そっと、アヴェがモモンガのローブ越しに腕に手を添える。
そうするとモモンガの力みも消えて、骨だけの顔で呵々と笑う。
「そうですね、二人で、半分こしましょう。もしやまいこさんが来ていたら二人で謝りましょう」
そうこうしているうちに遠隔視の鏡の視界にユリ・アルファ率いるナザリック・オールドガーダーの一団が騎士たちの前に現れる。
こうして一方的な殺戮が始まった。

モモンガさんに膝枕を

終わってみればあっさりしたものだった。
不穏な騎士たちはナザリック・オールドガーダーに傷一つつけられず。
なすすべもなく全滅した。
その後現れた王国戦士長ガゼフ・ストロノーフに対して対応を決めるためにモモンガはユリ・アルファに伝言を繋ぎ続けたがナザリックの名前を出さないことと無用な交流を深めることを禁じた上でユリ・アルファに自由にさせたところ、法国なる国の特殊部隊と当たることになったが、それもさした難敵ではなかった。
ガゼフ曰く法国の精鋭であるという部隊もナザリック・オールドガーダーと本気を見せたユリ・アルファの前には木っ端の如くだった。
「警戒は必要だけれど、ひとまずはこの世界で強者と呼ばれる存在でもプレアデス程度で対処可能、みたいですね」
「そのようですね。ユリ・アルファは戦闘後引き揚げさせて直接聞き取りしましたけれど、脅威度は極めて低い、という事ですね」
「レベル上限が低いのか、それともレベリングがしにくい世界なのか……」
「ここはレベリングがしにくい、と思っておいた方がいいのではないかしら。ユグドラシル時代と違ってこの世界の人間に死に戻りはないでしょうから」
「ああ、ゲームじゃないですもんね……」
「それと、私の異形の母でレベル5分のブーストが掛かっていますからね。ユグドラシル基準だとかなりのアドバンテージです」
「確かに、確かに。そういえば俺もなんだかこっちに来てから調子がいいんですよね」
「異形の母の効果範囲が大幅に広がっている、というのは明るい情報ですね。プレアデスでも60台後半となれば相性次第では70台のプレイヤーとも戦えるという事ですから」

「ナザリックの防衛面でも最弱のスケルトンがこの世界の騎士レベル……無限ＰＯＰのユニットが一戦力になるのは大きいですね」
「ですね、にしても」
「どうしました？」
「アヴェさんの膝？枕がこんなに気持ちいいのも異形の母の効果ですかね」
「ふふ、甘えたさんですか？モモンガさん」
「うぐ、それは……はい」
ここまでの会話は全てアヴェの長大な蛇の下半身がとぐろを巻かなければはみ出してしまうにしても、二人で並んで眠れる超キングサイズのベッドでモモンガがアヴェの蛇部分の上に寝転がって行っている。
モモンガの髪一本無い白骨の頭を愛おし気に撫で、鎖骨をさするアヴェ。
そんな状態にモモンガは無上の安心感を覚えているのだ。
今のモモンガはローブを脱ぎ、体に一体化しているワールドアイテム「ももんが玉」のみの姿だ。
閨を共にしている状態と言っていいだろう。
「それにしても」
瞳を閉じているかのようにモモンガの虚ろな眼窩に灯る炎が消える。
「変な世界ですよね。ただの物として持つ分には剣も持てるのに……」
「モモンガさんも私も振るといつの間にか落としてるんですよねぇ」
アヴェがモモンガのとがったあご骨をさする。
その心地よさにモモンガは思わず頭をアヴェの身体にこすりつける。
「そういえばアヴェさんは飲食できるんですよね」
「ええ、指輪の力があるので趣味程度ですけど」
「じゃあナザリックの食事ってどうですか？俺にはわからない部分なんですけど」

「んー、そうですねー。私もそんなに食事の経験が豊富というわけではないですが……」
「ふむふむ」
「あちらの世界の合成食料にあるような不要な苦みや素っ気なさがなくて、旨味、というんでしょうか。それがあふれていてとても美味しいですよ」
「そっかー。いいなー。俺もスケルトン以外の種族にしておけばよかったかも」
「そういえば同じアンデッドでもシャルティアの様な吸血鬼には味覚があるみたいなんですよね。なんでなのかしら」
「ああ、それは吸血するからじゃないですか？舌自体もありますし」
「うーん。そのあたりの違いなんですかね。確かに舌がないと味は解らないですよねぇ」
「……アヴェさん。俺に遠慮して飲食しないなんてしなくていいですからね」
「ふふ、結構楽しんでますよ私。スパ・ナザリックも気持ちよかったですし」
「え！いつのまに!?」
「モモンガさんが戻ってきたユリ・アルファに声を掛けている間にちょっと……少し臭い始めてた気がしたので」
「あ、あー。アヴェさんは生身ですものね。匂い、匂いかぁ」
「良い匂いでしょう？スパ・ナザリックの柑橘系のフレグランスの石鹸やシャンプーを使いましたから」
「あー……いや嗅ぎませんよ!?」
「嗅いでもいいんですよ？」
「うあ……誘惑しないでくださいよ」
「ふふ」
一度、会話が途切れる。
そしてモモンガの身体を六本の腕がそれぞれ撫でる。
しばらくなすがままになっていたモモンガは口を開く。
「アヴェさん。実は……」

「はい、なんですか？」
「ユリ・アルファでこの世界の強者と渡り合えるなら上位道具創造で鎧兜を作って冒険したいなぁって」
「……？戦士職として行くんですか？」
「実はユグドラシル時代にちょっと戦士職にも憧れはあったんですよね。それ以上に魔法詠唱者ロールしたかっただけで」
「なるほど。ですけどそれは早計ではないですか？」
「というと？」
「もし他にプレイヤーがいて、敵対的な行動をして来た時に戦士ロールしてるのは隙になってしまうのでは、と」
「それは……確かに」
「ですので階層守護者やプレアデスから人型のお供を選出して大魔法詠唱者として冒険してはどうですか？」
「んー……それが安定なんですかね」
「あともう一つ」
「はい、なんでしょう」
「もし階層守護者を連れて行くならワールドアイテム対策にワールドアイテムの持ち出しを許してあげてください」
「え、それはもし盗賊系スキルで盗まれたら……ってそれはないか。問題はＰＫされた場合、ですね」
「なるべく戦闘系に寄与しないワールドアイテムを装備させるしかないですね。この世界での効果が不明な強欲と無欲とか……」
「でもそこまでする必要あります？」
「強力なＮＰＣを離反させるようなワールドアイテムを他のプレイヤーが持っていたらどうします？プレアデスレベルなら鎮圧は楽ですけど、階層守護者級になるとやっかいですよ」
「それは……確かに。実質プレイヤー戦力は俺とアヴェさんだけだから……」
「そもそも、この世界ではＮＰＣではなくプレイヤーも洗脳できる能力に変わっていたら……」
「な！そんな無茶苦茶あるわけない！」

「そういう無茶苦茶をするのがワールドアイテムでしょう？油断は駄目ですよモモンガさん」
「!!……いや、アヴェさんのいう通りですね。考慮すべき事象です」
がばりと身を起こそうとして不意に冷静さを取り戻したように動きを止めたモモンガの頭蓋骨をアヴェは撫でる。
そして言い聞かせるように囁く。
「ナザリックから出ない私にはワールドアイテムの効果は考えなくていいと思いますよ」
「そう、そうですね。アヴェさん、出しませんよ」
「はい、おとなしくまたモモンガさんのお話を聞かせてもらいます」
「……実をいうとアルベドの報告を聞くたびに思ってたんですよね」
「何をですか？」
「未知の世界に関する話をアヴェさんにするのは、俺がしたい、って」
「あら、まぁ……嬉しい事を言ってくれますね。モモンガさんったら」
そんな二人の元に近郊の都市エ・ランテルにシャドウ・デーモンを送り込んでいたアルベドが死の軍勢の発動を感知した報告を入れてくるのは、後しばらく後の事。

レア物収集

そもそもエ・ランテルの情報を得たのがユリ・アルファがガゼフ・ストロノーフと共に戦った後、シャドウデーモンとアウラの配下の低位テイムモンスターに索敵の範囲を広げていき、捜索の網にかかったのが一日後。

その後本格的にシャドウデーモンによる情報収集を始めた。

ここからしばらくたった頃にはズーラーノーンなる地下組織が何かを企んでいるのは発覚したが、モモンガとアヴェは大したことのない物として放置していた。

不死の軍勢の発動報告自体もアルベドが細かい話でも事あれば報告するように命じられていたから届けられた話であり、本来なら至高の御方にとっては些事とアルベド並びにデミルウルゴスの段階で切り捨てられていた情報だ。

しかもプレイヤーではなく現地民がマジックアイテムを使って絞り出すように使ったそれは、ナザリックにおいてはプレイヤー絡みではない第七階位呪文とはその程度の存在なのだ。

「うわー、これは面倒なことになってますね」

「そうですねえ。不死系のモンスターばかり……でも見た感じのレベルではモモンガさんの魔力系魔法詠唱者としてのスキルでなんとでもなるかしら」

「あ、スケリトルドラゴン。懐かしくないですか」

「ああー、第六階位以上の魔法なら効くのが解るまでクソゲーって言ってたんですっけ、モモンガさん」

「ははは、だって魔法が頼りの魔法詠唱者の魔法が効かないんですよ。しかも魔法で排除しようにも強制で第六階位以上とかわりに合わないってウルベルトさんと話してましたよ」

和やかに遠隔視の鏡で都市を防衛しようとする冒険者達と墓場から溢れ出るアンデッドの光景を見ながら話している二人。

その心の中にはさした波紋は起こっていない。

人間は人間、自分たちは異形種、という意識が強くあるのはユリ・アルファを強行偵察に出した時に確認している。
「さて、どうしますモモンガさん」
「そうですねぇ……正直敵の底が知れてるからそういう意味ではさして興味を惹かれないんですが」
「ですが？なにかありましたっけ」
「叡者の額冠、とかいいましたっけ。ユグドラシルにはなかったレアなアイテムっぽいのでちょっと欲しいなーと」
「ふふ、相変わらずのコレクター気質ですねぇ」
「お恥ずかしい……まぁ興味があるのはそれくらいですね」
「どうします？出るなら階層守護者達の反応的にソロでの出撃はできませんよ？」
「名誉が欲しいわけじゃないですからねー。大々的に出て行ってどーんとかは考えてないんですよ。叡者の額冠で魔法生成装置になってる少年は墓場の奥地に放置されてるっぽいのでこっそりいこうかと」
「それだったらソリュシャン・イプシロンでしょうか？確かあの子が盗賊系のスキル保持者ですよね」
「ですね。あとは前衛が欲しいけど誰がいいかな……」
「仮想敵が死霊術士やアンデットならシャルティアに強欲と無欲をもたせればいいのではないですか？」
「んーいざ逸れた時に転移門使えるのもシャルティアだから、そこらへんですかね」
「なぜ迷ったんですか？モモンガさん」
「いや、純粋な盾役ならやっぱり純粋タンクのアルベドかなーと思ったんですけどね」
「ですが？なんでしょう」
「彼女忙しいじゃないですか、守護者統括っていう立場のせいで。趣味の収集品拾いに行くのに時間を割かせていいのかなーって」
「ふふ、優しいですねモモンガさんは」
「いや、実はよくわからない組織運営をしてもらってるんだから当然の気遣いじゃないですか？」

「そうですけれども……ＮＰＣの忠誠の高さを想うと連れて行ってもらえない方が悔しがるかも？なんて」
「あ、ああー。確かに……どうしよう……」
「では考え方を変えましょうか。普段からナザリックに目立った貢献をしてくれているアルベドには我慢してもらって、今の所仕事に緊急性のないシャルティアに仕事をしてもらうというのは」
「それ！それでいきましょうアヴェさん！じゃあさっそく伝言飛ばします！」
「はい、解りました。ではこのベッドもしばらくお別れですね」
「……ーですよね。じゃあ俺も装備を整えますんで」
「はい、いってらっしゃい」
「では。えーと、そこのメイドよ。装備を身に着けるのを手伝え……って感じですかね」
「よろしいのでは？凄く嬉しそうですわよ」
「うわー、ホントだ……うわ、泣くな、泣くな、着替えるだけだから。一般メイドでも出来そうな奉仕の中でも最上級？はは、まいったなぁ」
「ふふ、ハーレムですねモモンガさん」
「アヴェさんがそれ言わないでくださいよ。さて、準備準備」
モモンガは骨身でもわかるほど……軽い足取りで姿見の前に行って普段身に着けている神話級装備を一般メイドに手伝わせて身に着け始める。
あちこちへと伝言を飛ばしながら。
その背中は未知を求めに行く楽しみに浮きたっていた。
それを見てアヴェは微笑む。
ユグドラシル末期のギルド維持費を稼ぐだけのプレイを続けていた時のモモンガには無かった、皆がいたころの様な冒険の喜びを感じているのをじっと見つめる。
「うむ。装備良し、スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンもレプリカだけど中々いい感じだ」
鼻歌が出そうな声色で着付けたメイドの前でばさりとローブを翻

すモモンガ。
　アヴェはにこにこ見ているが間近で至高の存在の決めポーズを見た一般メイドは膝をついてモモンガを拝んでいる。
「では行ってきます。アヴェさん」
「はい、いってらっしゃいモモンガさん」
　軽く杖を掲げるモモンガにアヴェはゆったりと手を振る。
　久々に張り切るその姿に、アヴェは今回の冒険とも言えないような小イベントが上手くいくのを確信するのだった。

「うむ。無事に墓地内の目標地点に転移出来たな。よくやったシャルティア」
「光栄でありんす」
「ソリュシャン、付近に潜んでいる敵はいるか？また罠の有無はどうかな」
「はっ。どうやら標的の付近に二体ほど護衛と思しき人間がいますわ。お任せいただければ即座に無力化できます。罠に関しては特に設置していないようです」
「ふむ。魔法詠唱者の集団だから仕掛ける技術がなかったのか、それとも事を起こせば霊廟内までたどり着く人間がいないと思ったのか」
　顎に手をやりわずかに思考するモモンガに赤い装甲の全身鎧の腕部を強欲と無欲に替え、スポイトランスを構えた完全武装のシャルティアが言う。
「至高の御方がそんなこと気になさる必要がありんしょうか？ペキリと踏みつぶせば良いと思いんす」
「シャルティア、そういう油断は良くないな。現に俺達は今からユグドラシル時代には無かったアイテムを奪いに行くんだから警戒しすぎということはないからね」
「は、はい！浅慮をお許しなんし、モモンガ様！」
「うん。今後気をつけてくれればいいから。なんでも無暗に油断するのは良くないよ」
「それでしたら……アヴェ様や一般メイドを除くナザリックの全軍で

くればよかったのでは？」
「まだナザリックを表に出すべきではないと思ったので少数精鋭、というわけだよ。貴重な盗賊系技能の持ち主であるソリュシャン・イプシロンとワールドアイテム対策をした単体戦闘能力最強を誇るシャルティア。これが現状における隠密行動の最適解……だと思う。うん」
　正直八肢の暗殺者を何体か加えても良かった、という言葉をモモンガは何とか飲み込む。
　だが、よくよく考えると至高の存在とあがめる相手でも誤るというのを知らせるためには絶好の機会なのではないか、と思い直し口を開く。
「いや、だが八肢の暗殺者なら数体連れてきてもよかったなソリュシャンを守らせることもできるしその方が万全だったね。ごめん」
「そんな！モモンガ様が謝られることないでありんす！」
「そうです。モモンガ様が私共下僕に頭を下げられるなんてもったいない……」
「不完全とはいえ責任者だからね。誤ったら頭の一つも下げるよ」
　からからと暗く湿った墓場に似つかわしくない笑いを上げるモモンガを前にシャルティアとソリュシャン・イプシロンは慌てる。
「おっと、静かにしなければいけないな……ではソリュシャン。障害の排除を頼むぞ」
「はっ。お任せくださいませ」
「周囲の守りは私にまかせなんし」
「お願いしますわシャルティア様。それでは罠もないようですし、中の人間二人を排除してまいります」
「うむ。頼んだ」
　こうして、若干の失敗を交えつつ無事にソリュシャンが護衛に残っていたズーラーノーンを丸のみ暗殺しモモンガ達は叡者の額冠を手に入れたのだった。

派遣社員コキュートス

モモンガはまたアヴェの肢体の上でまったりしていた。
精神変化系には耐性があるはずだが彼女の腕の中は緩やかな安心感があるのだ。
もしかするとスキルなどの効果ではなく心許せる相手に体を委ねているから安堵しているだけなのかもしれない。
「しかしエ・ランテルでの任務は成功でしたがある意味失敗でしたね……」
「落ち込んでますかモモンガさん。大丈夫？おっぱい揉みます？」
「んっ、んん！いやあ、叡者の額冠を手に入れるのには成功しましたが発動者の方がはるかにレアな存在だったとは」
「異能でしたっけ。生まれつき誰もが持っている可能性のある特殊スキルのような」
「ですねー。まさかマジックアイテムの全ての制限関係なく能力を使える超々レア人物だったとは……」
「まあまあ、こういう時は切り替えませんとモモンガさん。危険な能力者が文句のつけられない形で潰せた、と」
「うーん。それしかないですかねー。個人的にはちょっとコレクトしたかったですね……」
「嫌ですよモモンガさん。少年を監禁してどうするつもりです」
「ははは、あの少年が美少女ならペロロンチーノさんが言いそうなセリフですね」
「ぶくぶく茶釜さんなら骨と少年って誰得よ、っていうところですかね」
「茶釜さん腐ってはいなかったですからね……マーレが男の娘なのもあくまで「可愛い弟」っていうデザインのためですし」
「でも異性装萌えはあったかも……」
「どうなんでしょうね？アウラの部屋には可愛い服もかなりため込んでたと言ってたような」
「あ、そうなんですか。そこら辺の情報の把握はさすがにギルド長で

すね」
「は、ははは。俺の主な仕事はギルメン間のバランス調整でしたから」
「るし★ふぁーさん」
「あ、あの人は秘密主義っていうかこっそり仕込んだ悪戯が多すぎて把握しきれないだけです」
「ふふ。そうですね」
一息ついて、一般メイドにお茶を入れてもらいすっと飲むアヴェ。
そしてソレを区切りに話題を変える。
「そういえば、王都リ・エスティーゼでしたっけ。あちらでシャドウデーモンを倒した人がいるとか」
「ああ、倒されたのがプレアデスとかなら問答無用で殺してる所ですがシャドウデーモンくらいなら逆に興味を惹かれますよね」
「プレイヤーかどうか、ですね」
「そうです。誰か使者になるようなＮＰＣを送って接触してみようかな、と思うんですが」
「良いんじゃないでしょうか。そうなると……セバスあたりですかね。割と暇をしていて比較的人間に当たりが柔らかそうな性格のＮＰＣは」
「ですね。シャルティアやアウラはナザリック以外の存在は塵芥って感じですし、アルベドは忙しい、デミウルゴスは種族的に不信感を持たれる可能性がある。コキュートスはあの外見で街にいったらモンスター扱いで交渉にすらならない可能性あり。マーレは……あんな気弱な子を一人で送り出すのは可哀そうですし」
「そうですね。そうなるとワールドアイテムは何を持たせようかな……」
「安パイは強欲と無欲なんですよね。あれなら奪われても経験値のプール分だけですんでしまいますから」
「んー、そうなりますか」
「ではもう少しシャドウデーモンで情報を集めたらセバスを接触させて様子を見る……ということでいいのかしら？」
「うん。それでいきましょう」

「さて、どんな結果がでるか楽しみですね」
「ですね。楽しくなるといいんですが」
モモンガとアヴェ、二人で笑いあう。
数日後、シャドウデーモンを倒した人物を王都のアダマンタイト級冒険者、イビルアイだと確定するとセバスを送り出した。
その結果、イビルアイはプレイヤーではないもののプレイヤーという存在を知る者だという事が解り。
モモンガとアヴェはそれに対してどう対応するかを話し合うのだった。
「イビルアイ……ちゃん？さん？どうしますかね」
「うーん。他のプレイヤーの存在を確認できた、というところで十分じゃないでしょうか」
「出来るならプレイヤーを知ってる誼でナザリックが集めた情報の答え合わせ役にご招待するというのもありじゃないかと思うんですけど」
「あ、それは有益ですね。ただイビルアイ……さんでいいかしら。イビルアイさんは有名な冒険者なんでしょう？忙しくないでしょうか」
「あー……それなら依頼扱いで来てもらうとか……」
「ずっと引きこもってたせいで現地通貨がありませんね……」
「う、ううん。どうするべきかなぁ」
「ユグドラシルの通貨を使うわけにもいきませんしね」
「セバスにはプレイヤーかどうかの確認のためにもっていかせたんですけどね、ユグドラシル金貨」
「そのお陰でイビルアイさん自身はプレイヤーではないと一応の裏が取れたわけですけど」
「そういえば、竜王国という国ではビーストマンという人食いの種族に困っているという話がありましたね」
「え？……ああー、ナザリックの戦力で竜王国に乗り込んでビーストマンを駆逐して褒章を貰うんですね？」
「です。今の所それが一番無理のない現地通貨の入手法じゃありませんか？他のプレイヤーは居る、という前提で、人間を守るために戦う

人側の異形種という立場も得られますし」
「ふむ。それだとどれくらいの戦力を出すかですよね。異形種の居るアピールとしてコキュートスあたりを出すのは提案するとして」
「餓食弧蟲王は人を苗床にするからだめ……というかナザリックから出す戦力ではありませんよね」
「そうなるとエントマあたりも除外、ですね。ただでさえグリーンビスケットっていう代用食で我慢させてるのに目の前に大量のご飯がばらまかれてる戦場に送るのは酷でしょう」
「コキュートスは決定、ですかね」
「そうですね。人食いもしませんし、彼の人柄なら無用な衝突は産まないでしょう」
「あとは脇を固める人選ですか」
「後衛としてナーベラルはいいかもしれませんね。あの子なら外見がいいから突然現れた異形種の戦士と周囲のクッションになってくれそうです」
「後は兵士ですね。この世界はアンデッドに対する目が厳しいからナザリックの陣容からだと中々……」
「あー、死の螺旋ですっけ？エ・ランテルで叡者の額冠手に入れた後のお偉いさんの話で出てたのは」
「そうですね。強大な死はより強く大きな死を招く。少なくともナザリックではそんなことないんですけれど」
「微妙に世界のルールがずれてるんですかね……死の螺旋が適用されるならタダでナザリックの一階層から三階層の戦力がアップできたんですが」
「と、話を戻しますね。その死の螺旋の伝承がなければ竜王国に出向くのはモモンガさんでもよかったと思うんですが」
「はー……警戒、されますよねぇ。アンデッドじゃ」
「コキュートスでギリギリと言ったところですよね」
「うー。中々冒険ができない……」
「あ、良い事を思いつきましたよモモンガさん。山脈の方にはフロストドラゴンが出るみたいじゃないですか」

「お、そんな話もありましたねぇ！」
「ええ。ですので気晴らしにドラゴン退治としゃれこんできたらいかがですか？」
「いいですねー。低位階のスクロールの材料にはアヴェさんのスキルで生み出したキメラの皮なんかを当ててましたが、ここらで一つこの世界のドラゴンの皮はどこまでの位階の魔法を込められるか実験ですね」
「ええ。後はその他の素材も有効活用できるかどうか……そのあたりの実験はデミウルゴスが上手くやってくれそうです」
「デミウルゴスかー……そういえばアウラとマーレ、アルベドもナザリック内に詰めっ放しですし。デミウルゴスと一緒にドラゴンハントに連れて行こうかなー」
「そうですわね。たまの息抜きにはいいかもしれません」
「よーし、じゃあ階層守護者のスケジュールの調整をアルベドに頼んで……一狩り行こうぜ！なんちゃって」
「古いゲームのネタですっけ？」
「ですです。守護者と話してるとリアル系のネタが通じなくて寂しいんですよね……アヴェさんが居てくれてよかったですよ」
「ふふふ、こんなことでよかったらいくらでもいいですよ。あなた」
「……不意打ちは止めてくださいよ。沈静化するところでした」
「ふふふ」
「あ、そうだ。コキュートスに従わせるのは雪女郎にしましょう。同じ氷結牢獄の上司と部下なら問題なく連携できるはず……」
「いいですね。雪女郎なら精霊とかいってごまかすこともできそうです」
「じゃあその線で……さてさて、コキュートスには頑張ってもらわないと」
「ですねぇ」
　こうして決められたちょっとしたハイキングと資金稼ぎは決行され。
　モモンガと旅路を共にした階層守護者達には満足を。

竜王国への強力な助っ人としてあらわれた異形の武人コキュートスは名誉と金貨を手にナザリックへと帰還したのだった。

慰労会

玉座の間にコキュートスとナーベラル・ガンマが跪いている。
その後ろにはアルベドとデミウルゴス、コキュートスの出張に率いられた雪女郎が儀礼的に控えている。
そして玉座にはモモンガとアヴェ。
「よくやってくれたねコキュートス。本当なら現地の活動資金なんかは先頭にたって俺が稼ぐべきなんだろうけど」
「お疲れ様でした二人とも。良く体を休めてくださいね」
「有難キオ言葉ナレド。不肖ノ身ガ至高ノ御方々ノオ役ニ立ッタナレバ光栄デゴザイマス」
「はっ。コキュートス様の仰る通りでございます。口惜しいのはコメツキバッタどもをお助けになられたのが至高の御方々だと口外するのを止められていたことだけでございます」
「いいよいいよ。蒼銀の昆虫騎士と美姫ナーベラルとして竜王国では英雄級の扱いを受けたそうじゃないか。誇りなよ」
「身ニ余ル光栄デゴザイマス」
「同じく……」
今は外貨を稼いできたコキュートスとナーベラル・ガンマの慰労の時だ。
「いや、本当に良くやってくれたよ。これで正面から蒼の薔薇の面々を招待することができる」
「蒼ノ薔薇トイウ一団ヲナザリックニ迎エルノハソノ様ニ大事デアリマショウカ」
「まぁ今の所穏当なプレイヤーに繋がる情報を持っている唯一の集団……個人だからね。一応あーとなんでしたっけ、アヴェさん」
「スレイン法国の陽光聖典ですね。ユリ・アルファに撲殺された男が魔封じの水晶を持っていましたが。封じ込められていたのが威光の主天使なのでプレイヤーメイドかは多少怪しい所があるという結論になったはずです」
「そうでした。そちらの方にも情報はありそうだけどスレイン法国は

人間至上主義国家。ちょっと穏便に情報を取ることは出来そうにないんだよね」
「不敬ながら発言をお許しください御二方。例えそうだとしてもガガンボ如きが至高の御方々に話を聞いていただけるという栄誉を賜るならば何を置いても駆けつけるべきでは？」
「……あー、コキュートス。ナーベラルは竜王国ではこの調子だったか？」
「イエ、ホボ無言ヲ貫イテオリマシタ」
「そ、そう。ナーベラル、俺達ナザリックは強大だが驕れる者になる気はない。その事を気に掛けて言動には気を付けて」
「はっ。かしこまりましたモモンガ様」
「それならよし、この話はここまで」
　若干大丈夫かなぁという心配を胸にモモンガが話を打ち切る。
「ともあれコキュートスとナーベラルには引き続き竜王国でビーストマンの討伐を頼む」
「ハ、承リマシタモモンガ様」
「私もボウフラどもとの関係に留意しつつ、任務を果たしてまいります」
「あ、うん。頼むよ……」
　もしかするとナーベラルの替わりに他のプレアデスを選出するべきかも、と思いつつすでに名声を形成しているナーベラルを急に差し替えるのも差支えがある。
　というようなことにモモンガは頭を悩ませる。
　だがコキュートスの話では会話をしない、という非常に消極的であるが妥協点としては妥当な行動（少なくともイラっときたら食べてしまいそうな面々よりははるかにましな）を取っているためこのままでいいか、という結論に達する。
　そして忠実に任務をこなしているコキュートスとナーベラル・ガンマに何か褒美を与えるべきか、と考える。
　そこで彼らの後ろに控えるアルベド、デミウルゴスにお伺いを立ててみる。

「ふうむ。さてナザリックに功績の大きいコキュートスとナーベラルに何かボーナスを与えようと思うんだけど。アルベド、デミウルゴス。なにか良い案は有るかな？ああ、ボーナスと言えば日々ナザリックの運営に力を入れてくれている二人にも何かあるべきかな……なにか望みはないか？」
「恐れながらモモンガ様。そのお言葉だけで我々ナザリックのしもべ一同万感の思いでございます」
「その通り。モモンガ様が我々ナザリックの者を気に掛けてくださっているという事実だけで十分でございます」
「正ニ守護者統括殿トデミウルゴスノ申ス通リカト」
「至高の御方からの褒美など恐れ多く……」
　うん、ですよねー！君らそういうところあるって解ってたけどそれじゃこっちの気が済まないんだよ！という内心が思わずこっこっと骨の頬を叩く指先に現れる。
　そこにすっとアヴェが一言を添える。
「ではこの玉座の間ではなくナザリックのＢＡＲで懇親会を開こうではありませんか。未成年のアウラとマーレにはまた別の機会に触れ合う機会をつくるとして、成年の階層守護者とプレアデス、そして私とモモンガさんで……飲み会ですね」
「あ、それはいいですねぇ。アルベド、都合を付けられるかな？」
「は、はい！お望みとあれば如何様にも！デミウルゴス、手伝ってくれるわね？」
「勿論ですとも守護者統括殿。モモンガ様が酒宴をお望みとあらば叶えるのが我らが役目です」
「オオオオー。モモンガ様ト酒ヲ酌ミ交ワスナドト言ウ光栄ヲ授ケラレルトハ！」
「あ、あの、見た目は幼いですがエントマは虫としては成虫、シズは自動人形ですのでどうか参加のご許可を……未成年ではありませんので」
「ん？ああ、そうだね。見た目が幼くても大人かー。ペロロンチーノさんが好きそうな設定……というかシャルティアまんまか」

「ふふ、そうですね」
「ですねぇ。あ、俺は酒飲めないけど皆気にしないで飲んでいいからね」
「大丈夫ですよモモンガさん。お酒も匂いだけで楽しめるものがありますから。匂いを楽しんだ後の物は私が飲んで差し上げます」
「そうですか？いやぁ、悪いねアヴェさん」
「いいんですよモモンガさん。モモンガさんの足りないところを補うのが妻である私の勤めでしょう？」
「アヴェさん……あ、ありがとうございます」
「ああ、後アルベドとデミウルゴスは酒宴に参加できないアウラとマーレも参加できる催し物を考えて頂戴な」
　アヴェの言葉を受けてアルベドとデミウルゴスが跪き同時に言葉を発する。
「ではモモンガ様とアヴェ様のご意向次第ですがナザリック大食堂での食事会などいかがでしょうか」
　言い終わった二人は顔を見合わせ薄く笑いあう。
　考えることは同じか、という様子に。
　それを見てモモンガもアヴェも頷く。
「じゃあアウラとマーレを交えた食事会は一般メイドにも参加を許そうか」
「そうですわね。人は多い方が良いわ」
「おお……さすが至高の御方々。一般メイドの事までお考えになられるとは」
「ふふ、恐悦のあまり参加できない者が現れるかもしれませんね……いえ、そのような不敬なメイド、このナザリックには居ないと思いますけれど」
　なにせ実質モモンガ様とアヴェ様から招待を受けているに等しいのですからね、とアルベド。
　その通り、と言わんばかりの笑みを見せるデミウルゴス。
　モモンガとアヴェは若干やっちゃったかなぁ……などと思うのだった。

こうして開催された酒宴と食事会はナザリックの配下達には大歓迎されたわけだが。
モモンガは一つの懸念を抱いていた。
「アヴェさん」
「はいなんでしょう」
「皆は蒼の薔薇を招待するのに協力してくれますかね？」
「命令、ということなら大丈夫だと思いますわ。それよりも……問題は薔薇の方にあり、かと」
「ですよねー。はー、蒼の薔薇の人達が異形種を受け入れてくれるといいんですけど」
前途は中々多難なようだ。

蒼の薔薇と

「ねぇ、イビルアイ。貴女が言うから受けるけどこの依頼怪しすぎない？」
「だなぁ。屋敷に来るだけで金貨十枚ってのはいかにも怪しいぜ」
　金髪の美女と野獣が異口同音に今回受けた依頼への不信を見せる。
　それに追従して双子の露出過多な忍者の姉妹も口を出す。
「もしかして快楽調教されたとか」
「信じて送り出したイビルアイがアヘ顔ＰＴメンバーを道連れ快楽堕ちするなんて」
　謂れのない酷い言い草に仮面の少女が反論する。
「ティア！ティナ！ふざけすぎだ！私にそういった行為は意味がないのを解っているだろう！」
「それもそう」
「でもそういう心配が出るくらいに今回の依頼は不審」
「なぁちびっ子。そろそろこの依頼が白だっていう根拠を教えてくれねえか？」
「そうね……イビルアイを信頼しているから何も言わなかったけど、目的地を目前にしたらもう秘密主義も必要ないと思うんだけど」
「……はぁ。では予習と行こうか。お前たちは神人と呼ばれる人類を知っているか？」
「あんまり俺達に縁起のいい言葉とはいえねえなぁ」
「確かスレイン法国の言葉よね」
「超人」
「法国曰く無敵の超神兵」
「その神人のルーツと思われる存在がいる」
「え!?」
　金髪の美女、リーダーラキュースが驚きの声を上げる。
　野獣の方、ガガーランは面白げに眉を上げるのみだ。
「やばい匂いがしてきた」
「リーダー、引き返そう」

「やばくはないから落ち着け変態双子。実際私に接触してきたＮＰＣは人格者だった。あのような存在を生み出せる者ならそう酷い人格はしていないだろう」
「接触って……八本指の擬態という可能性はないの？」
「無い。たとえ八本指だろうと作ることはかなわないだろう芸術性を持った未知の貨幣を所持して、それをユグドラシル金貨と呼んでいた。これは接触してきたＮＰＣの背後にぷれいやーが存在することを示す」
「さっきからえぬぴーしーだのぷれいやーだの。それが神人の源流だってのか？」
「そうだ。神人とスレイン法国が呼ぶのはプレイヤーやＮＰＣが普通の人間と血を交わらせた結果、その血筋に生まれる異能の存在だ。タレントとは別の意味で貴重な存在だな」
「んでー、その、えぬぴーしーと会うのが今回の依頼か？」
「いいや、その背後にいる真の強者。プレイヤーと会うのが今回の依頼の本当の趣旨だ。単独行動を許してもらえんかったからお前らも巻き込んだが、まぁお前らはおまけだ。基本的な話は私がすることになる」
「そう……ならいいのだけれど」
　ラキュースが気品に溢れる整った眉をわずかにしかめて吐息をつく。
　そこにイビルアイが一言入れる。
「ああ、ひとつ言っておく。私に接触してきたＮＰＣの話では今回招待されたプレイヤーの拠点、ナザリック地下大墳墓は異形種の巣窟らしいぞ。下手なことはしてくれるなよ」
「やっぱりヤバイ話じゃないか！」
「私は遠慮しておく」
「はっ、おまけで異形種の群れに突っ込まされるのかよ。毎度タフな仕事を持ってきてくれるぜ」
「まあまあ、三人とも行った先で戦闘になるわけじゃないんだから……。ならないわよね？イビルアイ」

「それは私たちの態度次第だろう。悔しいがぷれいやーとなると完全に強さが未知の領域だ。逃げ出すのも最善とは言えん。だからこういう形になった……すまんな」
「はあ。貴女がそういうんならそれが正解なんでしょう。付き合うわよ。地獄への道筋かもしれなくても……ラナーには悪いけど、ね」
「すまん」
「へ、いざとなったら暴れる……わけにもいかねえよなあ。こんな成りじゃ」
その言葉通り、今の蒼の薔薇の面々はそれぞれ着飾ることを優先した格好をしていてとても戦いに行く、という装備ではない。
最低限の自衛程度はできる装備はしているがそれは暗器のようなもので、最大の戦力が魔法詠唱者であるイビルアイと暗器に長けるティアとティナ、という状況だ。
あれは胸じゃなくて胸板と呼ばれるガガーランですら盛装しているのだから、今回の依頼に不安を感じるのも無理からぬことだったのだ。
「まぁ、なにはともあれ行ってみて……だ。強大な力を持つというぷれいやーがどんな歓待をしてくれるか、楽しもうじゃないか」
イビルアイは不敵に言い切り屋敷の敷地内に足を踏み入れる。
あるいはその不敵さこそ不安の裏返しだったのかもしれないが。
屋敷の敷地内に入り、屋敷の中に踏み入れるとセバスとシャルティアが彼女たちを待っていた。
「いらっしゃいませ皆様方。こちらシャルティア・ブラッドフォールン様。皆様をプレイヤーであるモモンガ様とアヴェ様の元へと送り届ける役目を担って頂く方です」
「そちらの方々がモモンガ様とアヴェ様がお誘いなんした方々でありんすか。では早速ゲートを開かせていただきんす」
「イビルアイと蒼の薔薇だ。よろしく頼む……おい、お前ら」
「なんだ?ちびっ子」
「この女、この成りで私以上の吸血鬼だ……同じ種族として本能で感じる。絶対に逆らうな」

「な!?」
「本当……なのね」
「マジか」
「洒落になってない」
「なんなんでありんすか。至高の御方々が特別にナザリックの階層間の転移を解放してくだすっていんすから早うしなんし」
　シャルティアが蒼の薔薇の面々を急かすが、その瞳の中には若干のいらだちが見える。
　彼女にとっては目の前の面々は不敬にも至高の御方々を待たせている「たかが」人間なのだからそれも当然だろう。
「すまない。限定的に転移を制限しているのを解除しているというのは結構なリスクだろうな。皆、行くぞ」
「……おう。行くぜリーダー」
「覚悟決めた」
「行こう、鬼リーダー」
「……ふふ、そうね。行きましょうか」
「ではご案内します。皆様なにやら不安を感じておられるようですが、モモンガ様とアヴェ様はその御名に誓って今回の会談では皆様を決して傷つけないと仰っています。それはナザリックの者にとっては絶対の誓言。違えることはないとお約束します」
「ふ、心強い誓いだな」
「それだけの忠誠心を捧げられている御方々、という事ですね」
「その通りでございます」
「やべえな」
「やばい」
「絶対怒らせない、約束」
「そんなに硬くなられずとも。モモンガ様もアヴェ様もお優しい御方々ですよ。さぁ、これがナザリック地下大墳墓でございます」
　セバスに誘われてゲートを超えた先で蒼の薔薇の面々を待っていたのは、白亜の大宮殿だった。
　まるでこの世の場所とは思えぬ美しさ、威厳そしてそこに待ってい

たのは。
漆黒のローブに身を包んだエルダーリッチ?と種族不明の女型モンスターだった。
思わず怯む蒼の薔薇の面々に、なるべく明るい調子でモモンガが声をかける。
「ようこそ蒼の薔薇の皆さん。ここがナザリック大墳墓。私とアヴェさんというプレイヤーの本拠地です」
モモンガの声は明るいがその顔は骨の無表情。
特に神官戦士系の職業を取っているラキュースの顔色が悪くなる。
「ようこそいらっしゃいました。皆さん、今日は有意義なお話ができればと思います。そうそう、この人……モモンガさんや私達ナザリックのアンデッドに死の螺旋は関係ありませんよ。そうでなければ強大なアンデッドが自動沸きしない理由が見つからないほどの不死者がこの墳墓内に存在しますので」
蒼の薔薇の面々がそれのどこに安心しろというんだ!と心中でつっこんだのに気づきもせず、モモンガとアヴェは先導して客室に向かって歩き出す。
彼女たちはしばらくその後を追えなかったという……。

そして死の王と慈母は伝説へ

「馬鹿な！では人食いの化け物が存在するのを黙認しろというのか」
「落ち着いてください。黙認しろとは言っていません。もしナザリック外でナザリックの者が人を食い物にしていたら戦うも自由。ですが人の代用食であるグリーンビスケットを食べて大人しくしている分には手を出さないでいただきたいというのです。もちろん他のプレイヤーが接触してきたらそういった異形種がいるという情報を渡してもかまいません。まぁ、その場合は勿論該当の者には自己防衛を命じますし、保護しますが」
「……暗に私達では勝てない、そういっているのか」
「そう取っていただいても構いません。アヴェさん、ここから先はセバスに説明してもらいましょうか」
「そうですわね。セバス、この方々に対してレベル、という目安を教えてさしあげて」
「は、畏まりましたアヴェ様」
　鈍く光るの黒壇の机を挟んで向かい合うモモンガとアヴェの「ナザリックには人食いの異形種が居る」という発言にイビルアイがつい感情的になる。
　だがそれを柳のように受け流しモモンガとアヴェは解説をセバスに丸投げする。
　そしてセバスの感覚で蒼の薔薇の面子を計ったレベルを説く。
　そしてその上でモモンガが言う。
「プレアデスの食人を行うメイドの平均レベルは６０前後。そしてユグドラシルにおいて装備が同等でレベル差が１０あると万に一つ程度の勝ち目しかなくなるんだよ。これはお願いでも脅迫でもない。敵対しないのが正解だよ、という忠告だ」
「……目の前で食人を行っていたら戦ってもいいんだな？」
「うん。いいよ。その場合に於いては我々ナザリックは君たちに報復しないことを誓う」
「ガガーラン？」

「ひとまずモモンガさんとアヴェさんを信頼してナザリックの人食いどもが食人しないのを祈って、それが破られたら戦うくらいしかできる事ねえだろ。割り切れ。リーダーもだぞ」
「ガガーラン貴女……いえ、そうね。その通りだわ。ここは冷静にならないと」
ラキュースがガガーランに視線を向け、その手元を見て言葉を納める。
圧倒的な実力差をセバスが隠さなくなったことで震える手を血が出るほど握りしめて彼女が言っているのだ。
あの戦闘本能に忠実で義侠心の塊のようなガガーランが、だ。
「さて、言葉だけでは信頼は得られないと思うよ。なのでひとつ君たちにも有益な提案をしようと思うんだけど？」
「私達に有益？怪しいものだな」
「八本指、と言ったかしら？貴女達が敵対している組織は」
「何故それを……いや、不思議ではないな。あの悪魔を倒した時に私は八本指を追っていた……」
「それ以後も悪いけど密かに探らせてもらってね。大体の状況は把握しているつもりだよ」
「それがどうしたのですか？貴方がたが協力してくださるとでも？」
「君達が不必要にナザリックの異形種の者たちと敵対的な行動……してもいない行為を他のプレイヤーに吹き込んでナザリックを攻撃させるなど、だね。をしないというのなら協力する用意がある」
モモンガが膝を机の方に詰めて手を組む。
熾火の様な眼が瞬く。
それをみてティアとティナがラキュースに視線をやる。
「鬼リーダー」
「信じるの？」
「イビルアイはどう思う？」
丸投げに近い問いを出されたイビルアイはやれやれ、というように王宮にあるソファよりも柔らかく、しかししっかりと体を受け止めるスプリングの効いたチェアに体を沈めて言い放つ。

「ここは虎口だ。すでに飛び込んだ私達に選択肢はない。だというなら少しでも成果を持って帰ろうじゃないか」
「はっ。確かにな」
「信じるしかないとか性質が悪い」
「強制加入って感じ」
「はいはい、ティアもティナも愚痴はなしよ。解りました。その話お受けましょう」
「すいません。脅迫になってしまって……でもこればかりはこちらの持つ力が大きすぎるが故の悲劇だと思っていただくしかありません」
「俺達は譲歩しました。恩には恩を、仇には仇を。この言葉に従って我々は行動します。皆さんにはその事をご理解いただければ幸いです」
「解りました。蒼の薔薇は故無くナザリックと敵対することはしません」
「ふふ、穏便に話がまとまってよかったですわ。セバス、皆さんへの歓待の準備を」
「はっ。畏まりましたアヴェ様」
「歓待、ね。ここで人を食わせてお仲間認定はなしだぜ？モモンガさんよ」
「そんなことしませんよ。このナザリックには一般のメイド……ホムンクルスですがね……もいましてね、彼女たちは通常の食材の料理を大量に食べますから。彼女たちと同じものをださせますよ」
「そうそう、ナザリックのＢＡＲからお酒も出させますから飲みすぎない程度にお楽しみくださいな。美味しいですよ」
　顔だけは美しいアヴェにそういわれて微笑みかけられて、ラキュースたちは微妙な顔をするのだった。

「美味かったなぁ……」
「材料がこの世の物とは思えなかったけどね……良い意味で」
「天上だった……」
「でもあそこは地下墳墓だから地獄？」

「どちらにせよろくな場所ではないさ……何だ貴様らその顔は！たるんどる！」
「でも、なぁリーダー」
「あの美味はねぇ……ため息が出るわ」
「鬼リーダーは普段いいもの食べてるから」
「いや、正直あそこの食事には私達も心動かされそうになった」
「ええい！バカ者どもが！食い物で懐柔されるな！」
「わーってるって。はー、それにしても美味かったなぁ。はんばっかも酒も。なぁ？」
「その通り」
「あの美味はまた味わいたい」
「貴様ら！」
　魔法詠唱者らしからぬ素早い動きでガガーラン、ティア、ティナにチョップをいれたイビルアイをラキュースが制する。
「はいはい、じゃれ合いもそれくらいにね……さて、どんな風に力を貸してくれるのかしら、あのモモンガさんとアヴェさんは」
「それは確かに気になるな」
「怪物たちのやることだ。ろくなことにはならんだろうな」
「恐ろしいなー」
「リーダーに迫る触手の脅威」
「なんで私なの!?」
「処女で姫騎士」
「くっ殺せ」
「貴女達は時々わけのわからないことというわよね……」
「いえーい」
「いえーい」
「褒めとらんからな……まったくこの双子は」
「がはは！まぁあの爺さんの気当たりを前にいつもの調子を保ってくれるのは心強いぜ」
「ふん。そういうことにしておいてやるか」
　この数日後、如何に力のある貴族でももみ消せない形で八本指の全

ての部門の証拠が王都に拡散し、王都に粛清の嵐が吹くことになる。
デミウルゴス率いるナザリックの一団がほくそ笑むような形で。

全てが終わったモモンガの私室で、アヴェがモモンガに寄り添っているとモモンガが口を開く。

「ねえアヴェさん」
「はい、なんですかあなた」
「その内イビルアイさんの言ってた空中都市とか、全ての呪文を記した呪文書とか見てみたいですね」
「その時にはモモンガさんとナザリックの誰かのお供によるＰＴだと思いますけどね」
「すいません。折角こんな綺麗な世界にこれたのにアヴェさんを自由に出してあげられなくて」
「いいんですよモモンガさん。消えていくだけだった筈のナザリックと、リアルで会う約束をしたとはいえそうそう会えるかどうかは解らなかったモモンガさんと一緒に居られる今があるだけで」
「アヴェさん……」
「ねぇ、だからモモンガさん。今のうちにリアルの名前教えてくださってもいいでしょう」
「……そう、ですね。俺の名前は鈴木悟、でした。今は、モモンガです」
「ありがとうございます。私の名前は……」
これ以降は二人だけの秘密。
ただ一つ言えることは、異世界にもアインズ・ウール・ゴウンの名は高らかに鳴り響いたという事だけ。

その後の雑多なお話
番外編1・ほのぼの山河社稷図

「山河社稷図にこんな使い方があったなんて盲点でしたね、ももんがさん」
「これも味方に対するフレンドリーファイア解禁されてたのでもしや、とは思ったんですけどね」
「今回の空間隔離役は……」
「はいはい！私アウラ・ベラ・フィオーレが務めさせていただきました！アヴェ様！」
「う、受け取り役の隔離対象の中心は僕、マーレ・ベロ・フィオーラが務めさせていただきます」
「ああ、アウラとマーレが今回のおつきなのね？ありがとうね二人とも」
「そそそ、そんな！もったいないお言葉です！」
「えへへ、普段お役に立てる機会がないから嬉しいです。アヴェ様！」
タダでさえ垂れている耳をさらにへんにょりさせているマーレ（弟）と、にこにこ笑顔のアウラという本当に物おじしない姉のコンビ。
それを見て良い事を思いついた、というようにアヴェがアウラとマーレを手招きする。
「はい、なんでしょうかアヴェ様」
「ふぇっ、な、なんですかアヴェ様」
「ちょっと失礼するわね」
アウラとマーレを左右三本ずつの腕で優しく抱きかかえる。
「ふ、ふあぁ!?アヴェ様」
「ふえええぇ！アヴェ様!?」
「ふふ、良い子良い子。マーレがアウラに触れると山河社稷図が解除されてしまうから気を付けてね」
「！はい！」

「は、はいぃ……」
「どうしたんですか？アヴェさん。急に二人を抱っこなんかして」
「それは日々の待機でうっぷんが溜まっている二人をねぎらうのと……モモンガさん、私の横に並んでくださいな」
「？こうですか」
疑問を抱きつつもモモンガはゆったりとアヴェの横に並ぶ。
そんなモモンガに珍しくアヴェはさらに注文を付ける。
「もっとくっつく感じでお願いしますわ」
「んん…？こんな感じですかね？」
「肩に腕を回してくださいな」
「あ、はい。でもこれが一体……」
「親子ーなんちゃって？」
「あああ、アヴェさん！……ふぅ……ちぇ、沈静化が働いちゃったなぁ」
「お、親子って！モモンガ様とアヴェ様の子供ってことですか!?私達が」
「う、うぅぇぇぇぇ!?それはさすがに不敬だよお姉ちゃん！」
「ふふ、不敬だなんて思わなくていいのよマーレ。アウラもね。他のギルドメンバーの皆さんが居ない今、ナザリックのＮＰＣは皆私達の子供の様なものなのですから」
「……そうですね。そうですよアヴェさん。よーし、アウラ、マーレ。どちらか俺におんぶされてみないか？」
「えぇぇ！いいんですか!?」
「ちょっ、お姉ちゃん！」
「ははははは、良いよ良いよ。さぁ、どっちがおんぶされる？二人ともまだまだ子供なんだから遠慮することはないぞ」
「じゃ、じゃあ私がしてほしいです！えへへ……私の生みの親はぶくぶく茶釜様だけど、お父さんがいたらこんな感じなのかなぁ……」
「そうだな……さ、アヴェさん、アウラをこちらに」
「はい、お任せしますあなた」
蛇身が這いずる姿勢ならモモンガより低い体高も、とぐろを巻いて

いればモモンガより上半身が上に来るのがアヴェの身体だ。
　右腕に抱えていたアウラを優しくモモンガの肩の上に移すと、モモンガの漆黒のローブのショルダーアーマーの上にアウラが乗る形になる。
「うん……？なんか違うような気がするけどこれでいいのかな」
「うわぁー！モモンガ様の肩の上、とっても高いです！フェンもクアドラシルも乗る時は姿勢が低いから地面がもっと近いのにモモンガ様の肩の上は見通しがいいですね！」
「ははは、そうかそうか。思う存分乗ってていいぞー」
「ふふ、ご機嫌ですねモモンガさん」
「お、お姉ちゃんも楽しそうですね、アヴェ様」
「マーレはどう？楽しい？」
「あの、その……とっても落ち着きます……」
「あらあら、瞼が下がってきているわよ？」
　笑み交じりにアヴェが指摘するとマーレはぶるると顔を振って精一杯きりっとした表情を作る。
「ね、寝ませんよ！仕事中ですから！」
「山河社稷図の効果が切れるまでだったら眠ってもいいと思うのだけれど……」
「こ、これでも護衛も兼ねていますから！」
「そうね……それじゃあどんな風に護衛するのかみせてくださる？小さな騎士さん」
「あ、あのー……僕は騎士じゃなくてドルイドなんですけど」
「マーレ、こういう時の騎士様は男の子が女性をどんなふうにエスコートするのか聞いているのよ？騎士さんというのは様式美のようなものよ」
「そうなんですか？すいません。僕そういう事に疎くって……」
「良いのよ。少しずつ覚えていきましょうね。それにしても」
「？」
「あの人とアウラは本当に楽しそうね」
「そ、そうですね……いいなぁ、お姉ちゃん」

「あら、マーレもおんぶしてもらいたい？」
「そんな不敬な事！」
「不敬だなんてことないわ。貴方達ナザリックの子らはみな私達の子供……養子……？の様なもの。セバスみたいに外見がお爺ちゃんだとさすがにモモンガさんも躊躇うかもしれないけれど、今のマーレならモモンガさんも喜んでおんぶしてくれるわ」
「そうでしょうか……」
「間違いないわ。さ、おんぶしてほしいなら勇気を出して」
「は、はい！モモンガ様ー！」
アヴェの腕の中を抜け出してモモンガの方へふぇっふぇっとなよっとした走り方で向かうマーレ。
若干モモンガの肩の上の姉に意地悪（まだ替わらないよーなど）されたようだが、そのうち無事入れ替わってモモンガの肩の上に乗る。
「ふぁー！すごーい！」と感嘆しつづけのマーレはさておいて、アヴェはアウラを呼び寄せる。
「どうでしたアウラ、あの人の背中は」
「はい！とっても大きくてさすが至高の御方だと思いました！世界で一番のおんぶですよ！」
きらきらした笑顔でいうアウラの柔らかな金髪をくしゃり、と撫でるアヴェ。
「そうでしょう、そうでしょう。モモンガさんの御背中は世界で一番頼りがいがあるの。見た目以上に大きくて、そこに色んなものを乗せているわ」
「えーと、それはナザリックとか……？」
「そうよ。何時いかなる時も、モモンガさんはナザリックを背負っているの……私と半分こで、ね」
「うわー！それすっごく素敵です！」
「その素敵の一端をアウラたちも担っているのよ？」
「へ？どういうことですか？」
「ナザリックの一員であるという自覚がある、それだけでその者はナザリックの一端を担っているの。最高責任者のモモンガさんと私の

ように半分こ、というわけにはいかないけれど、確かに貴女もナザリックをその肩に乗せているのよ。アウラ」
「……アヴェ様……光栄です！」
「あら、そんな涙ぐまなくても……あらあら……」
感極まる、というようにぐしぐしと目元を擦り続けるアウラにアヴェが困っていると、周囲を一周してきたモモンガがアヴェを揶揄う。
「あ、アヴェさんアウラを泣かせてどうしたんですかー？いじめたりしたんですか？」
「酷いですよモモンガさん。そんなことするわけないじゃないですか」
「お、お姉ちゃん！どうしたの!?どこか痛いの!?回復魔法いる!?」
「違うわよバカ。アヴェ様にね、私達しもべもその肩にナザリックを乗せているっていわれて感激しちゃっただけ！」
「そ、そっか……えへへ、でも光栄だね。僕達もモモンガ様やアヴェ様を助けてナザリックを背負っているっていうと……」
「そうでしょ！だから別に回復魔法なんていらないの！」
「あ、泣き止んだみたいですね」
「もう、人の悪い事は言いっこなしですよモモンガさん」
「ははは、すいませんアヴェさん。にしても」
「はい？」
「聞こえてましたよ。ナザリックを半分こで背負う……俺にはアヴェさんが居てくれて本当に良かった」
「……私もですよ、モモンガさん」
改めて、モモンガとアヴェ二人寄り添う。
そうこうしているうちに山河社稷図のタイムリミットがやってくる。
それは隔離空間への外出の終わり。
山河社稷図を展開していたアウラから対象者のマーレにアイテムが移動し、アヴェはナザリックに素早く入っていく。
これはそんな平和なある一日。

番外編・プレアデスのお仕事

「モモンガさん。モモンガさん」
「はいはい、モモンガです。どうしましたアヴェさん」
「プレアデスの中にも格差があると思いませんか？」
「えーと、そうですか？皆重要な……重要……ルプスレギナとか完全に游兵化してますね」
「でしょう？食人生態で食いしん坊なエントマや、敵に捕獲されるとナザリックのギミックが丸裸になる可能性のあるシズはともかく。ルプスレギナなんてかなり暇してるんじゃないかと」
「うーん。ナーベラルは竜王国で働いてナザリックに貢献してますからねー。そういう意味では忠誠心が行き過ぎてる彼女達には負担がかかっているかもしれません」
「そこで、です」
「はいはい」
「適当な役職を作ろうと思います」
「適当な役職、ですか？」
「ええ、鱗の手入れ係とか、別に任せなくてもいいんだけどひとまず仕事をしているという実感を持ってもらう仕事です」
「ああー、なるほど。ＮＰＣ達の忠誠心は高いから、俺達に関することなら些細な事でも重要な案件を任されてるとおもってくれるかもしれませんね」
「そこで鱗の手入れ係です」
「なるほど。ナイスアイディアですよアヴェさん」
「何他人事みたいな顔してるんですかモモンガさん。もちろんモモンガさんにも手足の骨のお手入れ係ということでエントマを付けますよ」
「え〝っ、そういう方向に行きます？」
「行きます。満足感を与えてあげることも親の務めでしょう」
「はあ、それもそうか。わかりました。その案飲みましょう。あ、でも」

「なんでしょうか」
「ユリとソリュシャンはどうします？」
「ああ、あの二人には今度は帝国方面に行ってもらいましょう」
「帝国方面ですか？なにをさせるんです？」
「カッツェ平原という場所が古戦場だからか何故か年中霧が掛かっていてアンデッドが湧くみたいなんですよね。死の螺旋が関係しているのかどうか……ナザリックでは検証できませんから。そのあたりの調査をお願いしようかなと」
「ふむ。あの二人なら万が一、人と遭遇しても人間の振りをし切ることができますからね」
「後は、スレイン法国が森でなにやらしていたという話」
「ああー、あれですね。シャドウデーモンが最後の意地で伝言で知らせてくれたあの件……確かにそちらの調査も必要ですね。よし。ちょっとユリとソリュシャンには忙しく立ち回ってもらいましょう」
　カチリ、と骨の指を鳴らすとモモンガはさっそくアルベド、デミウルゴス、セバスなどの各方面の責任者に伝言を飛ばし始める。
　それが一段落した様子を見せると、アヴェはさらにモモンガに告げる。
「ちなみに、これはあくまでテスト……彼女たちに受けがいいようならナザリック待機中のプレアデスの持ち回りにしようと思います」
「はぁー、娘みたいな子達に骨の手入れをされるっていいのかなー」
「よろしいんじゃないでしょうか？肩を揉んでもらうようなものですわ。スキンシップスキンシップ」
「んー、ですね。じゃあやってみましょうか」

　というわけで
【モモンガさんの手足のお手入れ：ルプスレギナ・ベータの場合】
「失礼いたしますモモンガ様。ルプスレギナ・ベータ。御身のお手入れの為に参上いたしました」
「ああ、頼むよルプスレギナ」
　楚々とした挙措で入室したルプスレギナ・ベータの前にどっしりと

椅子に腰かけ、肘あてに手を投げ出し、グリーブを脱いだ足をさらけ出すモモンガ。
「おっほ……」
「おっほ……？なんだいルプスレギナ」
「な、なんでもないっ……ありませんモモンガ様。早速お手入れを始めさせていただきます」
「うん。お願いね」
　こうしてルプスレギナ・ベータのモモンガの手足の骨磨きが始まったのだが、どうも雰囲気がおかしい。
　具体的に言うとルプスレギナ・ベータが時々よだれを垂らしそうになる。
　奉仕されているモモンガからはそれは見えないのだが、傍に控えるアヴェの眼からは一目瞭然であった。
「ねぇルプスレギナ」
「はい」
「モモンガさんは美味しそう？」
「はっ！いいえその様な事は……」
「いいのよ。ここは正直な感想を聞かせて頂戴」
「で、では……正直取ってこいと投げられたらまっしぐらに駆けだしそうなくらいには……」
「ぷっ、ふふふ、あははは！聴きましたモモンガさん。ルプスレギナにはモモンガさんは美味しく見えるようですよ」
「え？参ったなぁ。さすがに可愛いルプスレギナの頼みでも体の骨はあげられないなー」
「も、申し訳ありません！この不敬は腹を切って……！」
　褐色の肌を蒼白に染めて人狼としての爪を伸ばし腹に向けるルプスレギナをモモンガとアヴェは慌てて止める。
「いやいや、良いからね？おいしそうだなーと思っても実行に移さないでくれればいいから！不敬とか考えなくていいから！」
「そうですよ。私も夫が美味しそうだと評価されるのは……正直可笑しくて笑ってしまいますが、そんなに悪い気はしませんからね」

「は、はい！ありがたきおことばです！」
「じゃあ手入れの続きをしてもらおうかな」
「誠心誠意努めさせていただきます！」
　その後二十分ほどかけて手入れを終わらせたルプスレギナ・ベータはお淑やかに退出して行ったのだが……。
「エンちゃん！エンちゃん聞くっすよ！モモンガ様とアヴェ様はチョー優しいっす！モモンガ様の骨が美味しそうっていっても笑って許してくれたっすよ！」
「そうなのぉ？良かったわねぇ」
「やっぱりモモンガ様とアヴェ様こそあたしらの支配者っすよー、その貫禄に私蕩けちゃうッス」
　……
「ねえ、アヴェさん」
「はい。モモンガさん」
「ルプスレギナには意外とこの部屋の扉は薄いってこと、教えてあげましょうね……」
「そうですね」
　苦笑するアヴェ。
　モモンガも顎に手を当て瞳の炎をちらつかせて笑っているようだ。
　そんなこんなでルプスレギナの場合、は終わりを迎えた。

【モモンガさんの手足のお手入れ：エントマ・ヴァシリッサ・ゼータの場合】
「モモンガ様、アヴェ様ぁ。失礼いたしますぅ」
「うん、よく来てくれたエントマ。早速だが頼んでもいいかな？」
「はぁい。お任せください。一般メイドも使っていいという事なので色々ご用意させていただきました」
「ふむ。桶とタオルは解るが、あの小瓶は……？」
「香水の類かしら？」
「はぁい。アヴェ様の仰る通り、フレグランスオイルでございますぅ。

高貴なる御身を香りで持っても飾るのがよろしいかとおもいまして
ご用意させていただきました」
「ふーむ。香水かぁ。俺は匂いなら楽しめるしなかなかいいかもね。
アヴェさん」
「そうですね。良い香りのモモンガさんも素敵そうです」
「では早速手入れに入らせていただきますねぇ」
「お、おおう……」
エントマの手はその本性（蟲）からはかけ離れた柔らかい繊細なものだった。
ただ、外骨格なのか硬柔らかいという相反する属性を兼ね備えた、人間だった時の感覚でいえば虫に張り付かれているようなおぞましい感覚に陥っただろうが、異形種に変じたためか忌避感は驚くほど少ない。
「うん。エントマはお手入れ上手だね」
「この程度の事はプレアデスとして当然の仕事でございますわぁ。さ、仕上げのフレグランスオイルでございますわ。これは少量、薫る程度に……」
指の先に乗せる程度のオイルを伸ばして擦り込むエントマ。
するとモモンガとアヴェの鼻孔に何とも言えない微かに甘やかな香りが届く。
「エントマは香りのセンスもいいのね。とてもいい香りだわ」
「そういっていただけるとぉ、なによりでございますわぁ。蟲は匂いで情報のやりとりをしますので、これでもちょーっとうるさいのでございますぅ」
「うん。満足のいく結果だったよエントマ。お疲れ様」
「うふふ、恐悦至極にございますわ。モモンガ様ぁ」
このように、エントマ・ヴァシリッサ・ゼータのお手入れ体験は穏便に終わった。
アヴェなどは自分の鱗の手入れの時にどんな香りを付けてもらえるのか楽しみにしているほどだ。
もちろん、モモンガもアヴェの体臭と混じり合い良い香りになった

自分の体臭に非常に満足した。

次にテストケースになったのはシズ・デルタだった。

【モモンガさんの手足のお手入れ：シズ・デルタの場合】

「失礼しますモモンガ様、アヴェ様」

「気を楽に……といっても自動人形にそういう機能はあるのかな？」

「恐れながらそのような機能は搭載されていません」

「そうか、残念だな……表に出ているプレアデスの末妹として普段の他の姉妹とのやり取りとか聞きたかったんだけど」

「そういうことなら話せる。たとえばエントマがおやつの部屋と称して黒棺に出入りしてるのは有名な話」

ここでアヴェの表情が若干強張る。

さすがに異形の母神の種族を持つ彼女にもあの恐怖公の部屋は抵抗があるものらしい。

「それだけならいいけどエントマはおやつと称して少数のGを持ち歩いて……」

「エントマはどこだぁ！」

「お、おおー。モモンガ様どうしたー」

「エントマには衛生観念という物を叩き込まなければならないようですね……」

「……？Gの持ち歩きの話なら恐怖公の無限召喚のGは無菌培養。人間が食用にしても問題ないレベルの清潔さ。慌てる事、ない」

「そ、そうなのか？ほんっとーに問題ないのか!?シズ！」

「本当。私モモンガ様に嘘つかない」

「うう。それなら認めてあげるのが優しさなのか……なんだかパンドラの箱を開けてしまった気分ですよ」

「そうですねモモンガさん……あ、そういえばパンドラと言えば」

「やめてください！」

宝物庫の例のあれを思い出して沈静化するモモンガ。

だがそんなモモンガにシズ・デルタがじっと見上げる視線で見つめながら言う。

「モモンガ様」
「なんだい、シズ」
「そのうちパンドラズ・アクターも宝物庫から出してあげて」
「ぶふぅ……！」
「パンドラズ・アクター。ちょっと変でうざいけどナザリックの仲間。だからそのうち……」
「わ、解った。それについてはアヴェさんと厳重に！検討を重ねて置く！」
「……ありがとうございます」
「まぁ色々あったがそろそろ手入れを頼むぞ、シズ」
「了解。洗浄に取り掛かります」
洗浄なら毎晩アヴェさんにやってもらってるんだけどね、とは口に出さず。
こういう、エントマのような細やかな気配りがないあたりはやはり自動人形の特性なのかな、とモモンガは思いつつ。
恙なくシズ・デルタによるお世話は終わったのだった。

【モモンガさんの手足のお手入れ：ナーベラル・ガンマの場合】
「ナーベラルはコキュートスとの任務があるからそう頻繁に頼む機会はないとおもうけど頼むよ」
「は！一所懸命！一磨きごとに命を込める覚悟で当たらせていただきます！」
「いや、そんなに気合を入れなくても……」
「まあまあ、モモンガさん。ナーベラルがやる気になっているんですから」
言われてみれば普段無表情なナーベラル・ガンマの頬に紅が差し興奮しているようだった。
その姿を見れば竜王国の美姫ナーベラルのファン達は悔し涙を流すことだろう。
なぜ骨なんかにそんな顔を見せるのか、と。
もちろん、そんなことはナザリックの者なら呼吸をするかのように

当然ながら持っている至高の御方に対する奉仕に対する高揚感。
　それからすれば当然なのだが……。
　ナーベラル・ガンマの手入れはさほど波乱もなく終わった。
　が、波乱がなかっただけで時間は最長になった。
「な、なあナーベラル。そのくらいでいいんじゃない？」
「まだです。モモンガ様の御指ならもっと磨けば輝きを……ああ、アインズ・ウール・ゴウンに栄光あれ……」
「アヴェさーん……」
「これは気が済むまでやらせてあげるしかありませんね。こんなに夢中になって……ふふふ」
「うう、アヴェさん笑ってるけど鱗の手入れになったらこれはアヴェさんにもいくんですからね」
「……覚悟の上です」
「じゃあ俺の顔見てくださいよ！」
　ともあれ、ナーベラル・ガンマの場合、了！

【モモンガさんの手足のお手入れ：ソリュシャン・イプシロンの場合】
「うん？ソリュシャンは何も道具を用意しないんだね」
「はい。僭越ながらモモンガ様の身体を清めるのに最も適しているのはこの身体ですので」
「んー……？ともかく頼むよ」
「はい、お任せください」
　とろりと蕩けるような笑顔を見せたソリュシャンがゾブリと自らの腕の中にモモンガの脚を沈める。
「うぉ!?」
「モモンガ様は酸耐性をお持ちですから、このように粘体の特性を持つ私の身体の中に沈めるのが最も手っ取り早いのですわ」
「なるほど……合理的ね」
「さ、足は終わりましたわ。次は手ですわモモンガ様」
「う、うん……あのーアヴェさん」
「はい。なんですか？」

「怒ってません？」
「怒ってませんよ。これくらいで怒っていたら今までのプレアデスの子達のお手入れも叱らなくてはいけなくなるじゃないですか」
「そうですか……」
「む。でもお手つきしたらさすがに怒りますからね、モモンガさん」
「しませんよ！」
「うふふ、お二人とも仲がお宜しいですわね。さ、手も綺麗にさせてくださいませ、モモンガ様」
「あ、ああ。頼むよ」
　ソリュシャンの手が指先からモニュモニュとモモンガの腕を飲み込んでいく。
　そして驚くほどあっさりと解放される。
「終わりましたわモモンガ様」
「おおー……なんだか一番綺麗になった気がするよ」
「ありがとうございます。でもそれは他の姉妹たちには秘密におねがいしますね？嫉妬されてしまいますので」
「そんな姉妹間で格差をつけるようなことしませんよね、モモンガさんは」
「うん。当然だね。ありがとうソリュシャン。君のそつのない仕事の腕はいつも俺達を満足させてくれる。これからも励んでね」
「はい。御言葉、ありがたく頂戴いたします」
　ソリュシャンの手入れは若干モモンガの考え過ぎでアヴェに気を遣わせたが。
　概ね問題なく終わった。

【モモンガさんの手足の手入れ：ユリ・アルファの場合】
「随分と気合を入れた準備をしてきたようだが……それより」
「如何いたしましたか？モモンガ様」
「グローブを外したユリというのも新鮮だなぁ」
「僕……失礼いたしました。私は普段グローブを常備していますけれ

ど、さすがに至高の御身の手入れをさせていただくのにグローブ越しというのはありえないことですので」
「いや、悪いっていうんじゃないよ。むしろ綺麗な指だ」
「!!そ、そんなお戯れを……」
「いや、本当に綺麗な指だよ。アヴェさんもそう思うよね？」
「そうですね。綺麗な指です……でもモモンガさん、ふつうそういう話は配偶者に振らないし、目の前でいうことではありませんよ」
「あ？え？あ！そ、そうですよね！あはは、俺何言ってるんだろう！ユリ、手入れの方を頼む」
「か、畏まりました。こほん。それでは始めさせていただきます。
　ユリ・アルファの手入れ自体は基本に忠実に骨を水拭きしてから乾いたタオルで拭き、丁寧に艶出しクリームを塗り一度ふき取り、その上から改めて香油を塗るという物だった。
　堅実安定、ユリ・アルファらしい堂にいった洗い方だった。
「いやあ、ユリの仕事は丁寧だねえ」
「それだけが取り柄ですので」
「それだけ、とはいうけれどとても重要な美点だわ。なんでも基本を疎かにしないという事は難しい事よ」
「ありがとうございますアヴェ様。プレアデスの副リーダーとしてそこまで仰っていただけて感無量でございます」
「傍で見ていてこれからもプレアデスの皆にはナザリックで時間を持て余すようなら持ち回りでモモンガさんの面倒を見てもらうのが良いと確信を持てました。これからもよろしくね」
「は、命に代えましても」
「はは、そこまで重要ごとじゃないよ。手足を洗ってもらう程度だから」
「至高の御身に触れさせていただけるという栄誉ある仕事、それに恥じない成果をお見せする所存です」
「そ、そう？じゃあ頼むよ」
　相変わらず忠誠心凄いなーとぼんやり考えるアインズを置いて、ユリ・アルファは来た時のようにきりりとした様子で下がって行った。

ともあれ、こうしてナザリックで待機している組のプレアデスにも「栄光ある仕事」が用意されたのであった。

【番外・アヴェによるモモンガのお手入れ】

「さあ、モモンガさん両手を開いてください」

「はーい」

「ふふ、良い子ですね。では洗いますよー」

「お願いします」

アヴェの六本の腕がそれぞれにブラシをもってモモンガの複雑な突起を持つ骨格を速やかに洗浄していく。

「はふ……」

その心地よさにモモンガは思わず息をつく。

同時多発的に刺激される研磨の感覚は人間の時には味わえず、ソリュシャンのスライム風呂ともいえる身体の清め方とも異なるほのかな快感を産む。

これが自らの腕でせこせこ磨いているなら嫌になってしまう所だが、アヴェが洗ってくれているという事実と、実際素早い的確な洗浄にあるのは満足感だけだ。

「気持ちいいですか？モモンガさん」

「あー……やっぱりいいですよこれ……特にこう、肋骨を一気に擦られる感覚とかちょっと説明できないくらい爽快ですね」

「それは何よりです。私もさすがに自分の肋骨を洗うわけにはいかないのでその感覚は解りませんが」

「アヴェさんが肋骨洗ったら大惨事でしょう、させませんよ」

「ふふ、ですね。さて、磨き終わったから流しますよ」

「お願いします」

洗い流しもアヴェの手に掛かれば完璧だ。

六本の腕に持たれた六個の桶に満杯になったお湯を浴びれば濡らし損ねなどありえない湯量が一度に浴びせかけられる。

そうしてさっぱりとしたモモンガにアヴェが蛇身を絡みつかせて急かす。

「ではいっしょにお風呂に浸かりましょう。あなた」
「うん……はあー、アヴェさんとのお風呂……さいっこうですよぉ……」
そうして後は心行くまで風呂でもいちゃつくのだ。
バカップルに幸いあれ。

アヴェさんの鱗のお手入れ―またの名をプレアデス女子会―

「この度はアヴェ様のお身体の手入れをさせていただくことになりまして真に光栄でございます」
「宜しくね、ユリ、ルプスレギナ、ナーベラル、ソリュシャン、エントマ、シズ。今日はプレアデスの間でするように気楽な会話をして頂戴」
「どうか我々プレアデスのサービスをお楽しみください、アヴェ様。皆、かかるよ」
「了解です」
「はい、ユリ姉様」
「承知しました」
「はぁい」
「頑張る……」
　副リーダーであるユリ・アルファが音頭を取ってゆったりとスパ・ナザリックの広い洗い場にその長い蛇身を横たえるアヴェの下半身にプレアデスの面々が集う。
　その目的は古くなった鱗をこそぎ落とし、至高の御方の美を保つこと。
　プレアデスの誰もがその栄誉ある仕事に対して表面上は冷静を保っているが、皆やる気に満ち満ちていた。
　ルプスレギナ・ベータなどは内心「うっしゃー！やってやるっすよー！うひひひ、至高の御方のアヴェ様の身体に触れられるなんて後で一般メイドの皆にもたっぷりねっとり話してあげないといけないっすねー」と邪念に満ちた思いを抱いていた。
「ふん」
　だがすかさずユリ・アルファのガントレットではなく垢擦りのような手袋を嵌めた手がルプスレギナ・ベータの頭部に振り下ろされる。
「あたー！なにするっすかユリ姉!?」

「邪念が顔から洩れていたよ」
「げっ、まじっすか」
「ルプーわぁ、完璧に演じ分けられるのにぃ。ちょっとした油断でくずれるのよねぇ」
「ちぇー、エンちゃんは完全ポーカーフェイスでいいっすよね。まぁお面なんで当然っすけど」
「あら、ポーカーフェイスぶりならナーベラルも中々のものでしてよ？」
「ポーカーフェイス……私にお任せ……ナーベラルは至高の御方関連になると途端にでれでれになる。今も」
「……何の事かしら」
「うひゃひゃひゃ、アヴェ様の鱗落してて恍惚としてるの丸わかりだったっすよナーちゃん」
「……ルプーのバカ」
「あ、怒ったっすか？ごめんっすよー、許してナーちゃん」
「ルプスレギナ、手が止まっているよ」
「わわ、失礼しました。アヴェ様も怒ってないっすか？」
「ふふ、ふふふ。怒るどころか楽しそうな姉妹仲に愉快なくらい。本当に仲がいいのね？」
「当然……プレアデスは仲良し姉妹。そういう設定」
「設定って言ってしまっているわよ？シズ」
「てへぺろー」
「ソーちゃんも大概謎の女っすけどシーちゃんも結構わけわかんない経絡で思考してるっすよねぇ……」
「あら、ソリュシャンは謎の女なの？」
「謎も謎っすよ。人間を格納してる時なんでデブらないのかーとか。酸で融かせるなら何でも食べられるのかーとか。全然教えてくれないっす」
「あらあら、それは謎多き女ね。でも謎の多い女の方が美しいとはいうわね」
「そういっていただけると何よりですわ、アヴェ様」

「……」
「あら、どうしたのかしらエントマ。なんだか動きが鈍いわよ？」
「あ、それは、そのぅ……」
「アヴェ様、エントマは仮面の下の異形度が高いので美醜の話になると気後れしてしまうようなんです」
「あ、あ、なんでいっちゃうのようユリ姉様のばかぁ」
「エントマ」
「は、はぁい。アヴェ様」
「少しこれを借りるわね」
「あ」
　アヴェがエントマの擬態である顔の仮面を外して、その下にある巨大な蜘蛛のような顔に触れる。
「女の子にこんなことをいうのは違うかもしれないけど確りした顎。合理的な生物的な美しさがあるわね」
「あぅぅぅ……」
「貴女には貴女だけの美しさがあるの、だから気後れする必要はないのよ。と、いって急に意識が変わるものではないけれど。今はこれをお使いなさい」
　擬態した蟲である顔の仮面を返してアヴェが微笑む。
「ありがとうございますぅ……アヴェ様」
「……羨ましい……」
「お、なんすかナーちゃんエンちゃんに嫉妬っすか？」
「嫉妬だなんて、私は純粋にアヴェ様に気を掛けていただいたエントマが羨ましいだけで」
「シーちゃん、至高の御方の事になると早口になるのって」
「よしなよ。ナザリックに所属する存在なら普通の事」
「ありゃ、さすがにこのネタには乗ってこないっすか」
「あ、それ数世紀前の「あいつ○○の事になると早口になるの気持ち悪いよな」「やめなよ」っていうネタよね？」
「げっ」
「ひぃ」

「……」
「はぁ……おバカな姉を持つと苦労しますわ」
「う」
「……ルプスレギナ。即座に謝罪を。至高の御方を語らう事を気持ち悪いなどと囃し立てるのはジョークでも不敬だよ」
「も、もうしわけありませんアヴェ様！この不敬はこの首掻っ切ってお詫びを！」
「今この場は許します。ですがナザリック内に不和を呼びかねないネタは以後封印なさい」
「は、はい。御慈悲を賜り恐悦至極にございます……」
「ふぅ、雰囲気が固まってしまったわね。そんな事より苦手な姉妹、好きな姉妹の暴露大会でもしたほうが建設的ね。ぶっちゃけてしまいなさい」
「ふへぇ、このタイミングでそれはキツイっすよアヴェ様ー」
「ふふふ、無理にとは言わないわ。とにかく話題が変わればなんでもいいから」
「じゃ、じゃあっすねあんまり理解されないんすけど私はおやつは骨がいいっす！あ、骨っていっても骨っこっていうガムなんすけど！」
「必死」
「必死ねぇ」
「無様だわぁ……」
「はぁ……ルプー……」
「まったく、アヴェ様の前でなければ問答無用で囲んで棒で叩いてたところだよ」
　そんなどこか物騒なガールズトークを交わしながら、尾の先からアヴェの鱗が続く腰辺りまでピカピカに古い鱗を落としてアヴェの鱗の手入れは終わったのだが。
　やはり一人に任せては時間が掛りすぎるという結論がでてアヴェの鱗の手入れは其の時手の空いているプレアデスによる分業制、という事に落ち着いたのだった。

番外編：Ｈｏｗ　ｔｏ・・・

それはある日の事だった。
モモンガは森林を越えた所にある蜥蜴人の暮らしをレポートしますよ、とちょっとした息抜きにでかけ。
アヴェが一人で玉座の間に座りモモンガの代理としてアルベドの報告を受けていると、ふとアヴェがアルベドに問いかけた。
「ねえアルベド」
「はい。何か報告に疑問や問題点がおありでしたかアヴェ様」
「こんなことを聞くのは恥ずかしいのだけれど……」
「アヴェ様が恥ずかしいとは、それは重要な問題でございましょう。モモンガ様が居ない場で聞いたという事は女性特有のお悩みですか？もしや月経がこないであるとか」
月経が来ない、の部分に大いに喜色を乗せるアルベド。
彼女の中ではモモンガとアヴェの御子が自分の手製の産着を着ている姿が浮かんでいるのだ。
「いえ、月経は問題ないと思うわ。日々スキル多産なる母神による自動ＰＯＰのモンスターを生み出してスクロールにしてもらっているから」
「では、どのような問題が……？」
問いを重ねるアルベドに、恥ずかしそうに頬を染めながらぬるりとアヴェが近寄り耳打ちする。
「実はね……同じベッドで寝てはいるのだけれど、モモンガさんとその、ね、どう子作りをすればいいのか解らなくて」
「……まぁ！まあ……まぁ……まぁ……」
アルベドにとっては晴天の霹靂。
予想外の難問。
言われてみれば確かに、である。
アルベドはサキュバス、ある意味こういった問題のエキスパートではある……が。
「申し訳ございませんアヴェ様！無知な私ではその問いに対する答え

を持ち合わせておりません！この失態を償うためなら吸精無期限禁止といった処分も甘んじて受けます！
「あ、いやそこまで深刻にしなくても……」
「いいえ！これは大・問・題でございます！モモンガ様にアヴェ様という王妃がいらっしゃるのに御子ができないなど……ああ、世界単位での損失でございます！」
「そ、そこまでかしら？アルベドは少し大げさではないかしら？」
「何を仰いますか！同じことをデミウルゴスやコキュートス、シャルティアに……子供であるアウラやマーレでもお二人に御子様ができないとなれば残念がるに相違ありません！」
「そう、そうね……ねえアルベド、その、メイクラブの専門家としてなにか良い案はないかしら？」
「申し訳ございませんアヴェ様。この問題は正直私一人の手に余ります……せめてデミウルゴスと協議した上でモモンガ様の作成なされたアンデッドとアヴェ様のＰＯＰさせたキマイラ等のモンスターを使って検証するご許可を戴きたく」
「あの人には内緒にしてくれる？」
「そ、それは……」
　両手を胸の前で合わせて聞くアヴェに、アルベドは言葉を濁す。
　ナザリックの運営に関わる者として理由なき事業の隠匿は不敬ですらある。
　が、それも至高の御方の片割れから直接請われたとあっては難しい問題である。
「お願いアルベド。同じ女として男に希望を持たせて駄目でした、というのが怖いのは解ってくれるでしょう？」
「そう、ですね。この問題はモモンガ様にも極秘のプロジェクトとして進ませていただきます。ですがモモンガ様にアンデッド作成で作成していただいた段階でモモンガ様自身で気付かれた場合にはどうかお許しくださいませ」
「そうね……そこで気付かれたら私も大人しく諦めて全てをモモンガさんに話すことにします」

「ではそういった条件で事を進めさせていただきます」
「お願いね、アルベド。私の方でも色々、その、試してみますから……」
「了解致しました。最善を尽くしますわ、アヴェ様」
「ありがとうアルベド。はぁ、この悩みを誰かに言えて楽な気持ちだわ」
「その、思いつめていらしたのですか？アヴェ様」
「思いつめて、は居ないと思うけれど。やはりそう簡単に相談できることではないからアルベドに話せて気は楽になったわ」
「まぁ、お労しい……でももう大丈夫ですわ。私とデミウルゴスに全てお任せください」
恭しく頭を下げるアルベドに、心底ほっとしたという表情でアヴェが胸を撫でおろし。
どうかこの件をよしなに、という事でその場は収まった。
そして……。

「ふむ。なるほど……アヴェ様はモモンガ様との御子を作る方法そのものでお悩みでしたか」
「そうなのよ。でも実際頭の痛い話なのよ？」
「と、言いますと？」
「私はサキュバスだから、精が取れる相手ならアヴェ様と交接できない種族でも種を取って胎内に植え込むくらいは容易いのよ」
「なるほど。サキュバスの姿で精を取りインキュバスとして女性に仕込む、というのは聞く話ですからね」
「問題はオーバーロードで在らせられるモモンガ様は取るべき精……種が無いのよ」
「モモンガ様はアンデッドですからね。問題はそこからですか」
これにはさすがにナザリック一の知恵者デミウルゴスも頭を抱える。
「一応、アヴェ様にモモンガ様の作成なされたアンデッドとアヴェ様の御産みになるモンスターの掛け合わせ実験のお許しはいただいて

いるのだけれど」
「何を試すか、というところから手探りですね」
「そうね、時間はかかると思うわ。いっそ貴方と私のように即物的な手段が取れれば問題は解決なのだけれど」
「もしそれができるならアヴェ様の母胎はお強いですからね。今頃モモンガ様とアヴェ様の御子をお手入れさせていただくだけで人手が足りなくなったかもしれませんね」
「私としてはそういう人手不足なら歓迎だわ」
「私も同感ですねアルベド」
「まぁ……そういうわけだから、速やかに問題の解決にあたりましょう。デミウルゴス」
「そうですねアルベド。全ては」
「「栄光あるアインズ・ウール・ゴウンの為に」」
なお、アルベドとデミウルゴスの実験は実を結ぶことなく。
結局は数十年後、モモンガの持つ流れ星の指輪でアヴェがモモンガの絶望のオーラレベル五を受けた時に、モモンガの子を孕むようになると願って妊娠することになる。

番外編：その後の蒼の薔薇

碌な事にはならない。
イビルアイのその言葉を蒼の薔薇は思い知った。
それは、ナザリック地下大墳墓を訪ねたその翌日だった。
街のあちこちに虚ろな目で自らの罪状を叫ぶ、あるならば証拠の書類を積み上げて断罪を乞う人々。
その中には八本指という組織の構成員、関わりのある平民、貴族。
有象無象の区別なく、王都のあちこちで声が上がる。
本来このような事態を揉み消すために居るであろう暴力を司る部門の者に至るまで。
まるで何かに操られているかのように罪を叫び続ける。
そして、露わにされた罪の重さの内容に対して王都リ・エスティーゼの自身を善良であると信じる人々の怒りが爆発する。
至る所で自ら罪を主張する人間に対する私刑が行われ、それに残った数少ない清い身体の警備兵では対応しきれない。
怒れる群衆を前に私刑を止める有効な術をガガーランも持たない。
唯二人、ティナとティアが影縛りの術で一部の私刑執行者達を足止めすることしかできない。
この王都民の怒れる日は鎮圧されるまで数日を要した。
それもランボッサ三世がガゼフ・ストロノーフに命じて自供をしている平民・貴族を手討ちにさせて、だ。
なかったことにするには、あまりにも事態の規模が大きすぎた。
王家そのものからすらも罪状を吐瀉物のようにまき散らす人間が現れてしまって幽閉に追い込まれた人間もいる、それは第一子バルブロ。
第二子ザナックは対抗馬である兄が見えざる手によって蹴落とされたことになるが、素直にそれを喜べるほど間抜けでもなかった。
王家の生ける汚点と化したバルブロに可及的速やかに毒酒を呷らせるよう年老いた父王を説得するのは酷く骨の折れる仕事だったし。
自らの支持者であった国王派の貴族からも自白者がでているのだ。

その中には蝙蝠と呼ばれた最大の支援者レエヴン候も含まれている。
いっそ国がその場で解体しないのが不思議な惨状なのだ。
だが同時に、王都に拠点を持つほど有力な貴族の座に人並みに善良な人間を押し込むチャンスであることも確かではあった。

「マジで碌な事になんなかったな」
女傑と言われて遜色ないガガーランをして深い疲労の色を滲ませる声を漏らさせる。
そんな数日間だった。
蒼の薔薇の面々は定宿にしている最高級の宿の一室に集まってラキュースを除いて暗い顔をしていた。
「たしかにね、これからの王国の往く道を考えると正直明るくはないわね」
「すまん。虎口にあるなら成果を手に戻らなければ、というのは私の判断ミスだった」
「気にすることない」
「こんなの誰も予想できない」
「ティアとティナの言う通りよ。それに言い換えればこれはチャンスなのよ。じわじわと蝕まれるだけで徐々に死んでいくだけだった王国という身体が切り開かれて膿を出した！やってやろうじゃない、王国の立て直しはぷれいやーなんかじゃなくて私達人間の仕事よ！」
明るく笑い飛ばすラキュースだが、他の面子の顔色……とはいってもティアとティナはラキュースの脇を固めて無表情。
イビルアイに至っては仮面をつけているので解るのはガガーランのものだけだが、それは芳しくない。
「でもよぉ。その為にお前さんは新王ザナックの勅命で貴族生活に戻るんだろ？いいのかよ、折角アダマンタイト級にまでなったのによ」
「私は、納得してるわ。この死に体に近い王国を支えるためなら飛び出した貴族に戻って偶像になることも、務めだと思ってる。それより

ガガーラン貴女よ。蒼の薔薇が解散という事になっちゃってごめんなさいね」
「へっ、謝んなよリーダー。俺くらいの戦士になれば引く手数多、モテ女はつれーわってくらい誘われるよ。何なら童貞どもを育ててもいいしな」
「悪いガガーラン。私とティアは」
「リーダーに付いていくから」
「ティアとティナもそんな珍しく殊勝な事いうな。リーダーの事、密偵として助けてやれ。それにお前らの道も平坦じゃねえぞ。これからやり合う相手は帝国の隠密なんかも含まれるんだからな」
「そうだな、この場に居て楽な道に進める人間は一人も居ない。ガガーラン。お前の童貞育成計画だがしばらく後回しにしてくれないか。リグリットの婆に蒼の薔薇解散とぷれいやーのことを伝えなければならんだろう。付き合え」
「げっ。あの妖怪婆さん探して西東かよ。それはそれでタフな仕事になりそうだぜ」
「言ったろう？この場に居て楽な道を歩める人間は一人も居ない、とな」
「しゃあねえ、つきあってやるか。じゃあリーダー、ティア、ティナ。こっちも方針が決まったぜ」
「今日は飲もう」
「出来れば明日も飲みたいけど今日だけ飲もう」
「そうね、明日からは別の道を往くんですもの、今日は飲み明かしましょう」
「……今回ばかりは私も賛成だ。お互いまた会えるか解らん身の上になる。再開を祈って飲もうじゃないか」
「特に私達二人が危ない」
「存分に安全を祈ってほしい」
「はいはい。私の奢りで一番良い奴を飲ませてあげるわ」
「おう。リーダー、俺達にもたのまぁ」
「ふっ。しめっぽいのはお断りだからな。私にも頼むぞ。『リー

ダー』」
「あーもう解ったわよ！今日は私の奢りで飲み放題！全部持ってきなさい！蒼の薔薇解散記念にこの宿屋のお酒全部開けるわよ！」
ティアとティナの言葉を皮切りに完全に空気が飲み会ムードになると、ラキュースはやけになったように叫ぶ。
だが、一筋流れる滴は隠せなかった。
四人の仲間たちと歩んできた命がけの冒険の日々、積み上げてきた冒険者としての実績。
それら全てを投げ打つ時だ、彼女の笑顔の仮面が一瞬ひび割れて涙を見せても仕方ないだろう。
なにより、王国はこれから暗黒期を迎える。
王都の惨状が帝国に知られればすぐにでも侵略の危機に迫られるだろう。
その時先頭に立つのは貴族に戻ったラキュースを含む出戻り、あるいはノウハウのない新興貴族なのだ。
王国が帝国の占領下に置かれる可能性は極めて高い。
ランボッサ三世が強権を発動して粛清を行わざるを得なかった状態で、不逞貴族その他を粛清したばかりで新王ザナックの地盤も弱い。
だが、だからこそなんだと笑ってラキュースは前に進む。
安易に強者に頼ることの危険さを子孫に伝えるために、明日を生きるために。
だから今夜は仲間達と飲み明かすのだ、心を強く持つために。

番外編：星の下で

「アヴェさん。星を観に行きませんか？」
「ナザリックの地表に上がるという事ならワールドアイテムを装備したらすぐにでも」
「いえ、以前俺が守護者達とフロストドラゴン狩りにいったじゃないですか」
「あ、ありましたね。なんだかクアゴアっていう奉仕種族とフロストドラゴンが予想以上に弱くてがっかりしたって」
「確かにあれはがっかりものでした……って、そうじゃなくて。あの時に狩りにいった山がアゼルリシア山脈っていうらしいんですが」
「はい」
　玉座のひじ掛けに掛けた手を、開いたり閉じたりしながらモモンガはアヴェを見つめる。
　その熾火の様な炎の瞳はその時の情景を思い出したのかひときわ強く輝き、アヴェに注がれる。
「星が、綺麗なんですよ。キラキラと光る天然のイルミネーションみたいな星が今にも空から零れ落ちそうな大きさで見えて。多分ナザリックに詰めてるアヴェさんにはいい気分転換になるんじゃないかなぁって」
「なんだモモンガさん、デートのお誘いじゃないですか。そういう事なら喜んで」
「う、うん。デート。デートですねちょっとしたリスクはあり、守護者にはちょっとした負担をしてもらうことになりますが……行きませんか？」
　答えはでているのに、どこか自信なさげに聞くモモンガにアヴェはくすくす微笑みながら並んだ玉座越しにもたれかかる。
「喜んでといってるじゃないですか、あなた」
「いや、うん、守護者達に負担が掛かるっていうとアヴェさんは、遠慮しちゃうかなって思ったんですけど」
「私もナザリックに詰めてばかりだと、いくら快適でも気分転換がし

たくなりますから。モモンガさん、気を使って頂いてありがとうございます。有難くデート、ご一緒させていただきます」
「あ、いや実際は階層守護者の……アウラとシャルティアあたりかな！それと八肢の暗殺者なんかも同行しますし、俺も現地で集眼の屍とかだして色々おまけがついちゃうというか。二人きりにはなれないんですけど……」
「そういうことならナザリック内でも同じですよ。常に一人は一般メイドかプレアデスを傍に置いてるわけですし」
「……」
「どうしました？モモンガさん」
　モモンガが自分にしなだれかかる六本腕の下半身蛇の美女の顔を見ながらなにやら黙り込んでいるのをみて、つん、つんと頬骨をつつくアヴェに。
　ハッと我に返りながらモモンガが正直なところを語る。
「いや、女の人ってこういう時二人っきりじゃなきゃいや！とか言う物だと大図書館にある本に……」
「いやですよモモンガさん。さすがにそこまで空気の読めない女にはなれませんって」
「そ、そうですか？」
「だってモモンガさんが階層守護者を付けてくれるのも、スキル消費して集眼の屍を出してくれるのも私の安全を思っての事でしょう？そんな旦那様に文句をつけるなんてできませんよ」
「……アヴェさん、解ってくれますか」
「嫌でもわかりますよ。そもそもナザリックから殆ど私が出ないのもレベル百でも強さは中の下くらいの私の安全の為なんですから」
　解っていますよ、という風にローブ越しに頭蓋骨を撫でられるモモンガの胸中をもしアヴェが普通の強ビルドなら、というものが過る。
　単体戦闘力的にユグドラシルで下の下ということはフロストドラゴンの成体くらいとは渡り合えると思うのだが、不安は消せない。
　種族デルピュネー・パイア・キマイラ・スキュラ・ヒュドラーなどの種族レベルを合計八十五以上重ねることで特殊種族エキドナが解

放され、それを修得している。
　その能力の一端としてＰＴ内の異形種プレイヤーのステータスをレベル五分強化する異形の母が含まれるわけだが、その他のスキルは取得した種族に準じる再生能力Ⅱや突進などといった弱い物ばかり。
　さすがにＬｖ百分の前衛寄り後衛程度のステータスは持っているが、強力な職業補正のないそれはユグドラシル時代にはなんとも頼りないものだった。
　そのイメージからどうしてもアヴェを表にだせないのだ。
　もし死に戻りがあるとして、ナザリックに戻るならいい。
　死亡後すぐなら蘇生の短杖だって惜しみなく使う。
　だがもし、死に戻りがナザリック外に設定されていて万が一その先でアヴェが成すすべもなく殺され続けるなど、可能性を考えるだけでモモンガの肉のない背筋に怖気と怒りが這いずり回る。
　もし蘇生の短杖での蘇生が上手くいかなかったら。
　もし、もし、もし。
　モモンガの頭蓋の中を悪い予感のもしが埋め尽くす。
　思わず玉座に座ったまま前かがみになり、じんわりとした沈静化されることのない恐怖に包まれるモモンガ。
　その体はカタカタと震えていただろうか、だがそんな身体を包み込む柔らかく優しい感触。
「大丈夫……大丈夫ですよ……あなたが、ナザリックの皆が私を守ってくれる……だから私は大丈夫なんです」
「ああ、アヴェさん……そうですよね。大丈夫ですよね」
「はい、大丈夫なんです」
　モモンガと顔を合わせて美しく微笑むアヴェの顔に、モモンガの背筋を這っていた怒りと恐怖が消え去る。
「ああ、そう。星を見にいく話でしたよね」
「そうです。いつごろにします？」
「アルベドとデミウルゴスに調整を付けてもらって……一週間後くらいですかね」
「ふふ、じゃあアルベドとデミウルゴスの説得はモモンガさんにお任

せしましょうか」
「ええ!?手伝ってくださいよアヴェさん」
「そんな難しくないと思いますよ?私とモモンガさんが望んで、それを完璧に行える作戦の立案を頼めば喜んで仕事をしてくれるかと。ちょっと愚図るかもしれませんが、それはあくまでモモンガさんの反応を見るため、ですかね。なんだかんだいって守護者の皆は私達の希望に最大限応えてくれるわけですから」
「そっかぁ……じゃあアルベドとデミウルゴスには悪いけど、ちょっとわがままを聞いてもらおうかなぁ」
「二人とも、モモンガさんに頼られて悪い気はしないと思いますよ。ＮＰＣはそういうものっぽいですから」
「じゃあ、ちょっと甘えてきます。アヴェさんは吉報を待ってください」
「はい。いってらっしゃいあなた」
そうと決まれば、という気持ちが先行しているのか、指輪での転移や伝言ではなく自分の足を使おうとするモモンガをアヴェは笑顔で見送る。
ここで転移すればとか、伝言で呼びつければ、という言葉でモモンガのやる気に水をさすのは野暮という物だろう……。

そして有能なしもべ達の手に拠って、ぽんぽんぽんと予定が決まり深夜のアゼルリシア山脈。
アヴェだけでなく以前に来ているはずのアウラも、改めて感嘆の声をあげ、悔しいけれど第六階層の星空にも劣らない、とナザリックの者としては最大限の賛辞を星空に奉げる。
「うわーやっぱり凄い！ブループラネット様がお造りになった円形劇場の星空も綺麗だけど、ここまで範囲が広いと光の強さや配置の妙ではナザリックに負けるけどなー、雄大さでは匹敵するものがあるよ！」
「こらチビ助。今回私達はオマケなんだから静かにするでありんす」

「ん、そうだね。珍しいじゃん、シャルティアがモモンガ様の近侍をしてる時に大人しいなんて」
「だって……あんなの見せつけられたら大人しくするしかないじゃない……うう―！・モモンガ様―！・私にもそのお慈悲の一端を―！・」
「はは、諦めるわけじゃないのがシャルティアの凄い所だよね」
「そ、そうでありんすか？・まぁ私は大人の女でありんすから」
　姦しくシャルティアとアウラがやり合っているのをよそに、珍しくアヴェがモモンガの膝枕でぼんやりと星空を見上げ、宙に手を伸ばす。
「すごい……まるで星が降りてきそう……」
「どうですかアヴェさん。ずっとこの光景をアヴェさんにも見せたかったんですよ」
「モモンガさん、初めてこの世界に来た時の星空を覚えてますか？・」
「ん？・ああ。綺麗でしたね……スモッグに覆われてない空があんなに綺麗だとは思いもしませんでした」
「今見ているこの天然の宝石箱はそれ以上に綺麗で……なんだか泣けてきますね。」
　アヴェのその言葉を聞きつけたのか、アウラが提案する。
「アヴェ様が欲しがるなら私達で星空も取ってきますよ！・是非お命じください！・」
　命令が与えられることに対して期待があるのか、アウラはその青と緑の瞳をキラキラ輝かせている。
　シャルティアもいつでも命に応えられるように控えている。
「それはとても魅力的ね……でもこの星空は私達で独占してはいけないの。この星空は世界の物、ね、モモンガさん」
「そうですね……俺達の手に収まるのはナザリック地下大墳墓くらい。いや、くらいなんていったらいなくなった皆に悪いな。ナザリック地下大墳墓が大きすぎて、俺の手に余るのはそのくらい。世界なんて望まないよ。アウラ」
「そういう事でしたらこれ以上は私からは何もいいませんモモンガ様。御心のままに」

「チビ助と同じく。私はモモンガ様の忠実な下僕でありんす！」
「ははは、心強いな」
「ふふ、そうですね」
モモンガとアヴェ、二人で笑いあい、しばらくするとアヴェはモモンガの大腿骨の上に頭を乗せて瞳を閉じる。
「モモンガさん。今晩は星の下で、モモンガさんに甘えて眠っていいですか？」
「いいですよ、アヴェさん。おやすみなさい」
「ふふ……いつも甘えているようなものだけれど、こうやって具体的に甘えているととても気持ちいい……おやすみなさい。モモンガさん」
星の光が降る中で、モモンガの膝でアヴェは眠る。
その寝顔は普段の慈愛に満ちた異形の母の顔とは違い、非常にあどけないものだった。

番外編：ティータイム

最近紅茶の香りを楽しむのに嵌っているモモンガと、香りを味わい終わった後の紅茶を飲むアヴェがモモンガの私室で寛いでいる。
少々行儀は悪いがベッドの上にティーカップを持ち込んでアヴェの身体にモモンガが寄りかかる形だ。
「そういえばアヴェさん」
「はい。なんですか？」
「色々試した結果フレンドリーファイアが解除されてましたよね」
「そうですね」
「じゃ、じゃあこの世界に来た時に胸を触った時負の接触切ってなかったから……」
「それがどうかしましたか？」
「あ、いや。ダメージ入ってたはずなのに全然痛がるそぶりもなかったのでなんでかな、と」
「それは……」
「そ、それは？」
モモンガが表情の出ない骸骨の顔に緊張を走らせる。
そんなモモンガを包み込むように鎖骨に指を走らせるとアヴェは言った。
「あそこで痛がったりしたら拒絶してるみたいじゃないですか、慌てて飲み込みましたよ」
「無、無理してたってことですか？」
「まあ無理の内に入るなら、ですが」
「はあ、俺やらかしちゃってたなー」
「まあまあ、負の接触自体のダメージなんてないよりましな微弱な物じゃないですか」
「それでも！俺は心配なんです！」
「……はい」
「だから、次からは痛かったら痛いって言ってくださいね」
「解りました。ごめんなさいモモンガさん」

アヴェを気遣うモモンガの頬骨にアヴェは謝りながら頬を擦りつけた。
するとモモンガの背中に六連の巨峰が当たっている。
「……わらか」
「どうしましたモモンガさん？」
「アヴェさん、狙ってやってます？」
カタカタと身体を揺らすモモンガに、アヴェはにっこりと微笑んでいった。
「当ててるんですよ」
「もー！真面目な話なんですよ！」
憤る、というよりじゃれ合う感覚でモモンガはティーカップのソーサーを持っている手を振り回す。
その腕をアヴェはソーサーを摘まみ取りながら絡めとる様に腕を絡ませた。
もちろん、そんなのモモンガがその気になればあっさりひきはがせる程度の力でだ。
だが、捕まえられたモモンガはなすがままに成る。
「……アヴェさんに捕まってるとずっと捕まっていたい気分になるんですよねぇ……」
「ふふ、それも異形の母の効果でしょうか？」
「どういうことです？」
「思うに異形の母ってこの世界に来てからかなり効果の変わったスキルだと思うんですよ。効果範囲とか、色々」
「はあ」
「変わった効果の中に異形種には母親のように思われる効果なんてあったりしたら、面白いと思いません？」
「それは実験で確認したんですか？」
「そういうわけではないんですけど、ナザリックの皆がモモンガさんを含めて優しすぎるのでそうなんじゃないかなって」
「いやナザリックの階層守護者はじめ皆俺達には優しいじゃないですか」

「あはは、じゃあ母親のように思われる効果は気のせいですか」
「気のせいですよー。それにもし仮に母親のように思われてるならそれはアヴェさんの人柄ですよ」
「そうでしょうか？」
「少なくとも俺はお母さんと思ったことはないですけどね……なにせ奥さんですから」
「え。それはゲーム時代からですか」
「……リアルでの顔合わせはしてなくてもずっと二人で話してた仲ですからね」
「ふふ、そうですか。なんだか嬉しいですね」
　嬉し気な様子のアヴェ、改めて奥さんなどというと僅かに恥ずかしいのか絡めた腕を引き離す。
　そして声色を変えて話し出す。
「あー、そういえばゲーム時代と言えばぷにっと萌えさんは凄かったですよね」
「ぷにっと萌えさんですか？確かにあの人は確かに凄かったですね。私のスキルによる能力値上昇を隠すために皆の武装を調整して倒せないのを乱数かと思わせたり。スキルバレしたらしたでそれを逆手にとってＰＫの作戦に活かしたり」
「ですです。頭の造りが違うって感じでしたよね」
「そうですねー。当時からぷにっと萌えさんのリアルは気になってたんですけど。モモンガさんは何か聞いてます？」
「いや、俺も結局詳しくは教えてもらえなかったですね」
「古来の戦術・戦略の教養があるからなんとなくアーコロジーの上層に住んでる人かしら？とは思っていましたけれど」
「でもウルベルトさんに突っかかられることはなかったんですよね。人当たりもいいし立案した作戦を自然に皆に納得させる人でした」
「モモンガさんは色々ぷにっと萌えさんに教えてもらってましたよね」
「ええ、ぷにっと萌えさんにはＰｖＰにおける戦術のイロハを教えてもらいました。主に知識面で」

「実技はたっち・みーさんとウルベルトさんですよね。私が加入した時には落ち着いてましたけど、お二人のどちらが教えるのに向いてるか競争になってたりしたんじゃないですか？」
「あ、解りますか」
「あのお二人は大体そんな感じですものね」
二人、顔を合わせて笑う。
アヴェは笑顔だがモモンガは恐ろし気な骨の顔の顎をカクカクさせるだけだったが。
「ですねぇ……懐かしいな」
「懐かしいですね……」
「こんな話、ゲーム時代はここまでしみじみとはしませんでしたよね」
「ええ、もっと軽い感じで……またひょっとすると復帰してくれたらまたあんなプレイ、こんなプレイできるのに、っていう流れになりましたよね」
「アヴェさん」
「はい」
「やっぱり……アヴェさんが隣に居てくれてもユグドラシルが終わっちゃったのは寂しいです……」
「そうですね……ここはユグドラシルじゃないですから」
「未知の世界に自分とナザリックのＮＰＣ達、そして拠点だけで移動してたらと思うと……沈静化が働くくらい怖いですよ。今はちょっと、アンデッドのこの身が有難いです」
「私も自分だけだったらと思うと凄く怖いですね。多分ナザリックの中を一歩も出られなかったと思います」
「俺も動いたとしてももっと慎重に、疑い深くなってたと思いますよ。そして寂しかったと思います」
「そうですね、寂しいは悲しい……もっと切実に居なくなってしまった皆さんの影を追っていたかもしれませんね」
「ですね。正直、アヴェさんが居てくれるお陰でこうも思えるんです」
「え？」
「リアルの都合がある皆を巻き込まなくて済んでよかった、とか。い

や、でもヘロヘロさんはあの様子だと巻き込んじゃった方が良かったのかなぁ、ははは」
「異常な体重増加にお薬も増えてるんですっけ……ヘロヘロさんもあと少し残っていたらこちらにきていたんでしょうか」
「かもしれませんねー。それで一日スパ・ナザリック漬けとか」
「ありそうですね。ヘロヘロさんがヘニョヘニョさんになってたかもしれません」
「巻き込めるなら巻き込んだ方が良さそうだったのはヘロヘロさんとして、絶対に巻き込めないのはたっち・みーさんですよね」
「ご家族がいらっしゃいますからね……」
「るし★ふぁーさんなんかは状況をエンジョイしそうですが」
「もしかしたら真面目なるし★ふぁーさんっていう珍しいものが見れたかもしれませんね」
「いや……るし★ふぁーさんならこの状況でも何かやらかす可能性が……」
「モモンガさんってるし★ふぁーさんにはあたりが強いですよね？」
「そりゃさんざんやらかされましたから。警戒するくらいは当然です」
「でも嫌いではないんですよね？」
「まぁそうです。ちょっとおふざけが行き過ぎるのは苦手でしたけど、るし★ふぁーさんはある意味もっともナザリックを盛り上げてくれた人ですからね」
「私はあんまりるし★ふぁーさんのいたずらの目標にされたことはないんですよね。だからいつもは眺めてるばかりで」
「あ、もしかしてアヴェさんがるし★ふぁーさんのいたずらで面白そうにしてたのって」
「割と楽しんでました。ふふふ。仲間にいれてもらえてるんだなって思っていたので」
「そういう見方もあるかぁ……ちょっと斬新でした」
そこでモモンガがはっと一息入れて身体をアヴェから話す。
そしてティーカップをアヴェに渡すと言った。

「なんだか懐かしい話をしてるうちに紅茶、冷めちゃいましたね」
「あら、本当だわ」
「淹れなおします？」
「折角楽しくお話しした証ですから、戴きますよ」
「そうですか？じゃあどうぞ」
モモンガが差し出した冷めた紅茶をアヴェは一息に飲み干す。
そして傍に控えていた一般メイドにカップとソーサーを渡す。
これはある日のティータイムの話。

番外編：さよならザイトルクワエ

　それはアルベドからの報告が切っ掛けだった。
「え？法国に大樹が移動してた？」
「はい。彼の国はシャドウデーモンを排除可能な人員を確保しているのを確認しているので、情報の入手が他国から入って帰還した人間の噂話からとなりご報告が遅れたことをお詫びいたします」
「いや、それは仕方ないからいいんだよアルベド。しかし……一晩で大樹ね。単純な植物成長では無理かな？マーレクラスのドルイドなら可能……だろうか？」
　玉座に腰かけるモモンガは視線で玉座の間の階段下に跪くアルベドに問いかける。
「はい、その点についてですが該当の大樹の正確な大きさが分からないのでマーレも明言は避けましたが、元から大樹と呼ばれる大きさに育つ品種で無ければ魔法的な補助があっても大樹が確認できる範囲……周囲に荷駄で移動できる三、四日程度から見える大きさに育成することは難しい、ということです。当然、移動など望むべくもありません」
「ふーむ。大樹そのものにはさして重要度を感じないけど、それにまつわる色々は調査の必要がある、か。リソースの無駄遣いは避けるべきだが、シャドウデーモンの諜報能力に限界がみえたとなるとユグドラシル金貨を消耗してでも調査用の配下を作るべきかな」
「至高の御方の手を煩わせてしまうのは守護者として恥ですが、八肢の暗殺者が諜報以外の任務も担っている以上、その穴を埋めるためになにとぞモモンガ様のお力添えを戴きたく……」
「よし。では隠密系モンスターのハンゾウを生み出す。活用して結果を出してほしい。いいね？アルベド」
「至高の御方の手を煩わせること汗顔の至りです……」
「いや、ナザリックは内に入った外敵を排除するという面に関しては強い組織だったけど、外の出来事に対処するという事に関しては脆弱な面がある組織だ。そこを補強するのは主人として当然だよ」

「寛大なお言葉、万の喜びの言葉を費やさせていただいてもなお余りある思いです」
「いいよいいよ。それより余裕はあるとはいえハンゾウはナザリック金貨を消費して召喚するユニットだ。情報の持ち帰りを最重要にさせるように」
「はっ。了解いたしました」
　若干、冷や汗を掻いているアルベドとあくまでも気楽なモモンガ。
　なにやらアルベドの様子がおかしい事に気付いたモモンガだが、脳裏にアヴェの「女性には急に体調を崩すことがあるんです」と言われたことを思い出す。
　ふむ、さては話してる最中に急に体調が崩れたのかな？とあたりを付けたモモンガは言葉を付け加える。
「ハンゾウには多少の無理をさせてもいいけど、アルベドも体には気を付けるんだよ？なんだか体調が悪そうだ」
「いえ、そのような事は……」
「そうかい。本当に気を付けるんだよ？ナザリックのＮＰＣは皆子供の様な物……子供……ＮＰＣ……二グレドだ！」
「は、はっ!?姉が如何なさいましたかモモンガ様？」
「ハンゾウを創造するのは決定としても、問題の大樹を二グレドに視てもらおう。いやぁ、なんですぐに思いつかなかったんだろう。ぷにっと萌えさんがいたら叱られてたなぁ。ははは」
「左様でございますか。ではさっそく姉の元を訪ねて調査を依頼します！」
　カツンと頭を叩いたモモンガに、若干顔色を戻したアルベドが命令を受けとる。
「うん。頼んだよ」
「では御前失礼いたします。モモンガ様」
　どことなく血色を戻した様子のアルベドに安堵しながら、モモンガはつぶやいた。
「うーん。しかし突然現れた大樹か……後でアルベドやデミウルゴスと対策会議をする場合を想定して色々考えてみるかな……」

そう言って、モモンガは玉座から立ち上がりアヴェの待つ自室に戻る。
それは黙考するにしても、会話でブレインストーミングをするにしてもそこがモモンガにとって一番物思いに耽るのに適した場所だからだ。
しかしその目論見も驚くほど速く伝言を入れてきたアルベドの言葉に遮られることになった。
だが、その報告は無視できるかと言えば難しい物でアヴェを伴って玉座の間にとんぼ返りしたのだった。
そこにはアルベドとデミウルゴスが揃って待ち受けていた。

「それでアルベド、二グレドの監視魔法によると法国の大樹の周囲は土地が枯れ果て、守護者であるお前から見ても手強いと見える動きの人間が大樹を刈り取っていたんだね？」
「その通りでございます。若干疑問の残る行動ですがデミウルゴスと協議してある程度の推測を立てています」
「え？」
ただでさえアルベドから報告が入るまで早かったのにその上でデミウルゴスと協議して推論を建てるなんてどれだけ頭いいんだろうというモモンガの思いを知らず、アルベドは続きを奏上する許しを願う。
「続けてよろしいでしょうか？」
「う、うん。頼むよ」
「では……デミウルゴスと協議した結果、何らかの手段で周囲の養分を吸収する樹木型のモンスターをテイムした物の、予想以上の燃費の悪さに処分を決めたのではないかと」
「ふーん。筋は通る、のかな？」
「姉の監視魔法によって痕跡を辿った所、大森林のある方角へ法国の枯れた土地が点在しているのを確認しております」
「おそらく人間たちがトプの大森林と呼んでいる地域からあの大樹は移動をしたと思われますが、距離的にも地理的にもあの大樹が周囲の

森林を枯らすより先に法国に行く必然性は低いと思われます」
「ふむ。だからアルベドとデミウルゴスは法国が過分なペットを飼おうとして失敗した、と考えたのか」
「はい、その通りでございます」
「そうそう、アルベド。忘れてはいけないよ。テイムしたものとはいえ巨大な植物系モンスターを『無抵抗』で刈り取った法国には憂慮すべき物品があると思われます」
「……強力な洗脳アイテム、かな？」
「その通りでございます。モモンガ様の慧眼、このデミウルゴス恐れ入ります」
「あ、いや、うん。話の流れ的に当然思いつくよ。ですよね、アヴェさん」
「そう……植物系モンスターも様々ですけれど、大多数が本能的な活動を行う生物の根源的な自己防衛を封じる洗脳能力はかなり、やっかいですね」
「姉と共にみていましたが、樹木型モンスターの刈り取り現場には役割不明の老婆が歳不相応な衣装を着て控えていたのを確認しております」
「こちらも、洗脳、ひいては樹木型モンスターの制御を担っていたのではないか？というのが私めとアルベドの意見でございます」
「ふむ……樹木系モンスターは特に精神作用に対する抵抗は特に持っていないと思うけど、それにしても洗脳役の老婆と刈り取り役の戦士というのは気になるなぁ」
「はい。ついては臣下の恥をさらすようですがモモンガ様にはアルベドに仰られた様に諜報用の隠密特化の下僕を創造していただくしかないかと……」
「うん。それについてはアルベドとの話で決定しているし問題ないよ」
「申し訳ありません。我々守護者の力不足でモモンガ様の財を使うなど……」
「いやいや、アルベドにもいったけど諜報要員の欠如はナザリックの

構造的な弱点だからね？アルベドもデミウルゴスもそんな気にしないでもいいんだよ。ねえアヴェさん」
「そうですね。でもモモンガさん、きっと二人が欲しい言葉はそうじゃなくて……」
そっと上体をモモンガの方に寄せて囁きかけるアヴェ。
それを聞いてモモンガはカツンと握った拳を空いた掌にぶつける。
「そうかそうか、アルベドもデミウルゴスも心配しないでいいよ。俺もアヴェさんも何があっても、守護者や他の配下……プレアデスや領域守護者、一般メイドに至るまで失態があってもどこにもいかない、いけない。ここナザリック地下大墳墓が俺とアヴェさんの居る場所であり還る場所だ。だから何の心配もしなくていいんだよ」
「モ、モモンガ様……あり、ありがとうございます……守護者としての手落ちで最後に残った至高の方々がお隠れになったらそれは命を失うよりも恐ろしい事で……そのお言葉で不安が一気に晴れたようです」
「ああ、恐れ多いお言葉を……このデミウルゴス、いえ、守護者一同に御方々の言葉を伝え皆でさらなる忠勤に励む所存にございます」
「あ、あ、アルベドもデミウルゴスもそんな泣かないで……アヴェさん助けて！」
「まぁまぁ、守護者達は子供達。子供は泣くのもお仕事ですよ、モモンガさん」
「アヴェさーん!?」
その後、しばらくモモンガとアヴェは行く先々でＮＰＣ達に涙ぐまれることになる。
なお、結局巨大植物モンスター（ザイトルクワエ）の名前についてはハンゾウの活躍によりナザリックの面々にほどなく知られて終わった。
そして法国にはシャドウデーモンの数倍危険な諜報要員が常駐することになったのだった。

番外編：嫉妬マスク

豪奢な装飾の施された室内に据え置かれた執務机の上に奇妙な仮面が並べられている。
それはほとんどが怒りの様な何かを顕した奇妙な装飾の物だったが、三個ほどだろうか、明らかに他に並べられた怒りの仮面とは違う、笑顔を模した白が主色彩になっている仮面が置かれている。
これらを眺めて感慨に浸っているモモンガの居る部屋に、プレアデスの奉仕である鱗の手入れを受け終わったアヴェが入ってくる。
「あ……モモンガさん、それまだもってたんですね」
「ああ、アヴェさん。はい、これもユグドラシルの想い出の内だと思うとなんとなく残しちゃってるんですよ」
「懐かしいですね。嫉妬マスクと嫉妬を受けるべき者達の仮面」
「ですね。初めて嫉妬を受けるべき者達の仮面を受け取った時は何事かと思いましたけど」
「運営の無駄な繊細さには逆に怒りすら覚えましたよね。ふふふ。結婚システムで婚姻するまではすぐ傍に異性プレイヤーが居ても嫉妬マスクがそれぞれに配布されてたのに。婚姻してからはしっかりこういうアイテムを個別配布するんですから」
「でも今となっては良い思い出ですよね。アヴェさんはさすがに処分しちゃいましたか？」
「嫉妬マスクはさすがに……嫉妬を受けるべき者達の仮面は変なデザインでも大事な思い出だからとってありますけど」
ほら、と言いながらアヴェはモモンガに教えてもらった通りにインベントリを操作して三枚の白いマスクを取り出して見せる。
モモンガとお揃いの白いマスク、よく見るとその額には通し番号が振って在り、その数字がモモンガと同じで末尾のα・βが対になる様に変わっている。
「デザイン的には五十歩百歩なのによく女性のアヴェさんが取ってありましたね」
「それはほら、あれです。運営からの結婚記念品みたいな……そうい

えばゲーム時代の結婚記念日にはナザリックのＢＡＲで飲みましたね」
「ああ、やりましたね。リアルで会えないしせめて雰囲気だけでもって食堂の料理長ＮＰＣにケーキの材料渡して作ってもらって、ＢＡＲで飲みながらケーキを食べる。今はもうできないんだなぁ」
「不思議ですよね。ゲーム時代は骨だけでも食事Ｂｕｆもらえたのに今は食べられないなんて」
「そして残念です……アヴェさんがたまに部屋に持って来るビスケットとか凄く良い匂いがするんですもん」
「私も残念ですよ。モモンガさんと美味しい食事……一緒に食べたかったです……」
　執務机の前で仮面の群れからアヴェに視線を動かしていたモモンガの視界が青白い肌で埋まる。
　六連装双丘の下、人間本来なら臍があるであろう位置に顔を埋められて、包み込まれてモモンガを沈静化が襲う。
　未だにスキンシップ過多なアヴェのこういった行動は時折モモンガの羞恥心を強く煽る。
「あああ、アヴェさん！はしたないですよ！」
「あ、はい……でも本当に残念なんですよ、一緒にご飯……家族っぽいのに」
　珍しく子供っぽい事を言うアヴェ。
　そんな彼女の身体を引き下ろして顔と顔が向かい合う高さにしてモモンガは邪念なく正面から抱き締めて背中をぽん、ぽんと叩く。
「アヴェさんって家族らしさに拘りますよね。どうしたんですか？」
「だって、私もモモンガさんも長い事独り暮らしで、やっとささやかにユグドラシル内でささやかに夫婦ごっこができるようになって、今は本当の家族、夫婦として触れ合えるのに……」
「あー。アヴェさん。一緒に食事が取れない以外では俺達結構夫婦してると思うんですけど。それじゃダメですか？」
「うう、下手に他の部分ができる分食事っていう小さな幸福の共有ができないのが悔しいんですよぅ」

「ああ、こうやって触れ合えるから余計見たいな……じゃ、じゃあアヴェさん」
「はい？」
「む……息子に会いにいきますか？」
　特大級に歯切れ悪く、言いたくないなーという雰囲気でモモンガが口火を切る。
　それに対して一瞬はてな？という顔をしたアヴェだったがすぐに得心したのかモモンガの抱擁から離れて目を合わせて問う。
「あ、もしかしてパンドラズ・アクターですか？」
「そ、そう。その通りです。そういえばあいつにも俺とアヴェさんの婚姻は常識として擦り込まれているのかとか、嫉妬マスクを宝物殿に仕舞い込みにいくのとか、アヴェさんの家族らしさの実感の為に行きませんか？」
「行きます行きます！いやぁ、十の指輪の中の一つが毒無効で良かったです。心置きなく宝物殿にいけますからね」
「そこらへんはアインズ・ウール・ゴウンでは標準装備でしたねぇ……」
「……アヴァターラは観に行きますか？」
「いえ、今回はそこまでは。まだいなくなった皆さんのよすがを偲ぶには早いでしょう」
「では、行きましょうか。あー……とシクススよ。もし我々が不在の間階層守護者などが部屋を訪ねてきたら第十階層の宝物殿に行っていると託けておいてくれ」
「はい。畏まりましたモモンガ様」
　モモンガの息子、といって差し支えないモモンガ謹製のＮＰＣに顔を合わせに行くという事実に心を躍らせ、リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンで転移する。
　モモンガ本人も実はガリガリと内心羞恥心に正気を削られながら、なんとか自分たちが急に自室から居なくなる事態を空気のように部屋になじんでいた一般メイドに託けて後を追ってすぐに転移する。
　転移先での視界が開くと蛇の下半身をうにょろうにょろさせつつ

六本の腕を突き合わせて指先を遊ばせているアヴェの姿がモモンガの視界に入った。
「そんなに楽しみですか？パンドラズ・アクターと会うの」
　若干げっそりした声のモモンガに対してアヴェは楽しみに頬をテカテカさせていそうな明るい声で答える。
「だってモモンガさんの子供ですよ？母親になるからにはきちんと挨拶しないと」
「あー、きちんと挨拶できるかについては俺の方に心配が……うう、ユグドラシル時代にアヴェさんと二人で設定を変更しておくんだった……」
「あの、モモンガさん？なんでそんなにパンドラズ・アクターと会うのが嫌そうなんですか？」
「…病なんですよ」
「え？」
「厨二病なんですよ！俺の黒歴史ノートの体現者！それがパンドラズ・アクターなんです！うっ……ふぅ……なんということだ、アヴェさんに視られると思うと何度も沈静化が発動する……」
「厨二病、ですか。そ、それいったらナザリック自体が割と皆の……」
「やめて！なんでアヴェさんはＮＰＣ作ってないんですかぁ！」
「それは拠点のＮＰＣ作成上限が……モモンガさんだって知ってますよね?!」
「アヴェさんのー後ろ暗い所みってみったいー……くくく」
「モモンガさん、キャラ崩壊してますから。落ち着いてください。ね？息を吸ってー、吐いてー」
「すー……はー……いや、すみません。ほんと俺にとってはキャラ崩壊するくらい恥ずかしい相手なんですよ。絶対に笑わないでくださいね？」
「それは勿論。笑いませんよ」
「ならいいんです……さて、ここでコントしてても仕方ないので進みましょうか」
「はい。行きましょう」

宝物殿の劇毒の空中を二人はふわりとモモンガの集団化飛行で進んで行く。
その合間にもよくこんなに金銀財宝集めましたよね、とか。
ユグドラシルの自由度ってやっぱりすごかったですよね、なんていう雑談を交わす二人。
そして宝物殿の武器庫などに通じる暗黒の扉の前で降り立つ。
「えーと、確かここのパスは……うーん。ヒントヒント。『アインズ・ウール・ゴウンに栄光あれ』……ふむふむ。このラテン語はタブラさんだなー。本当に凝り性なんだから」
愚痴のようにも聞こえる言葉を嬉しそうに言いながら、ナザリックのギミックのパスワードの秘密の質問的なリアクションとして現れたラテン語を、モモンガは記憶をたどって日本語（異世界に転移して何語でしゃべっているかという疑問はあるが）で読み下して無事に扉の鍵を開く。
「この武器庫、久しぶりに来ましたけどやっぱり宝物殿は圧巻だわ。ゲーム時代も凄かったけど、リアルになると……ね」
「そうですねぇ、金貨にうずもれた何気ない品物もリアルになると」
「あ、なんかすごそう」っていうの解りますもん」
「学がない私達でも解る凄さですからね。相当ですよ」
「一応俺達小卒でも世間的にはエリートなんですけどね」
「でも工芸品の知識とか富裕層の物じゃないですか。実際私宝物殿の宝『すごい、きれい、すごい、すごい』くらいしか解りませんよ」
「あはは、俺もそんな感じですねー。ユグドラシル的に言えばそんな価値のあるものじゃないはずなんですけど、リアルは凄いですね」
そんな話をしながら武器庫を抜けると、応接室のような空間にでる。
そしてそこにはそこにいないはずのタブラ・スマラグディナの姿があった。
「パンドラズ・アクター、そういう心臓に悪いジョークはいいから」
「え、あれパンドラズ・アクターなんですか？私が知ってるのと姿が違う……」

「あれ？パンドラズ・アクターそのものは見たことあるんですかアヴェさん」
「あ、それは」
　二人が言葉を交わしているとタブラ・スマラグディナの形態をとっていたパンドラズ・アクターが、つるりとした埴輪の様な顔の上に軍帽を乗せてぬらりとした丸みのある異形の手を覗かせる軍服に覆われた体を姿勢よく整えて敬礼する。
「これはこれはモモンガ様、アヴェ様！お二人でご来場とは何かありましたでしょうか？アヴェ様一人ならよくモモンガ様の狩りの様子を良くお話しにきてくださっておりましたが！」
「あ、あああー！言わないでパンドラズ・アクターー！」
「おや、なぜですか？我が創造主と！義母にあたる立場の貴方様がわたくしに気を掛けていただいていたのは無上の幸福の記憶であります！」
「……あ、あー。アヴェさん。俺が狩りしてる間はずっとナザリックに缶詰でしたもんね。暇つぶしは必要ですよ……」
「う、うぅー。モモンガさんの優しさが辛い……！」
「はて？なぜお義母様はそのように苦しんでおいでなのか……ああ！何も察せない我が身の不明が心を苛む!!」
　オペラの演者のように全身で哀しみ、苦しみを表わすパンドラズ・アクター。
　だがその卵の様な顔と演技過剰が笑劇のような様相を呈している。
「パ、パンドラズ・アクター。お前が演技過剰なのは俺の設定だけどその、なんだ、観てると恥ずかしくなるからなるべく抑えて、ね？」
「パンドラズ・アクター私からもお願い。一方的に義理の息子に夫ののろけ話をしていたのは私達だけの秘密にしてね……」
「ｈｕｍ……解りませんが解りました！さて、今日のご用向きはなんでしょうモモンガ様、アヴェ様！」
「う、うん……この嫉妬マスクシリーズと嫉妬されるべきもの仮面を宝物殿の適当なところに収めてもらいたいんだ」
「これは……ただのマスクのようですが？」

「思い出の品なんだ。目立たなくてもいいからいい感じの所に頼むよ」
「は！そういう事でしたらお任せください！この！晴れがましいナザリック地下宝物殿のもっとも！相応しい場所に据えてごらんにいれます！」
「あ、ああ、頼んだよ。アヴェさん。行きましょう」
「ううー。パンドラズ・アクターのバカ……」
「まぁそう気を落とさずに……あいつそのものを作った俺もかなり恥ずかしいんですから」
「じゃ、じゃあ私がどんな話をパンドラズ・アクターにしてたか聞くとか無しですよ？絶対ですよ？」
「あっ、はい……」
「我が創造主とその奥様の仲の良き事美しきかな！また折りをみて不肖の身に顔をお見せください！マジック・アイテムの手入れもいいですが、時折は誰かに語りたいものですから！」
　さらりと語られたのはパンドラズ・アクターも孤独であった、という事。
　それはそうだ、この第十階層である宝物殿は他の階層から隔絶されていて、リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンがなければ出入りすることすらできない場所なのだ。
「……」
「モモンガさん」
「……パンドラズ・アクター」
「は！何事でございましょうかモモンガ様！」
「お前にリング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを与える」
「モモンガ様！よろしいのですか!?」
「お前はマジック・アイテムを愛好するように作成したがその愛を他の者に語りたいこともあるだろ？節度を持って語る分には宝物殿を一時退去して雑談することを許すよ。ただナザリック防衛時には即座に戻ってもらわないとならないけど」
「おお！モモンガ様！わたくしはその寛大なお言葉だけで満足！でご

ざいます！」
「そうか。話がなくても偶には俺かアヴェさんに顔を見せる様にな。何せお前は俺の子供、アヴェさんにとっても義息子なんだから」
「そうですね。パンドラズ・アクター。何か面白いマジック・アイテムがあったら話を聞かせてね」
「はぁぁぁい！光栄でございます！アヴェ様！」
「さて、それでは今度こそ行きましょうかアヴェさん。またねパンドラズ・アクター」
「はい。ではまた、楽しいお話の機会、待っていますわ。パンドラズ・アクター」
「は！一時のお別れでございます！モモンガ様！アヴェ様！」
　こうして異世界転移後初の宝物殿探訪は終わった。
　宝物殿の片隅には、八枚の赤いマスクと六枚の白いマスクがその後飾られたのは知る人ぞ知る事実である。
　だがちょっとした恥ずかしい想い出が込められているのは三人の秘密である。

番外編：モモンガさんとアヴェさんのファッション事情

実をいうとユグドラシルから異なる世界に転移して、少し困っていることがアヴェにはあった。
「アヴェ様、こちらの衣装など如何でしょう」
「そうね……ビスチェだと中段と下段の胸を通すのに手間が掛かるのよね、今日は楽をしたい気分だわ」
「ではこちらの黒レースのポンチョなど如何でしょう」
「どちらかというと夜着っぽいけれどポンチョなら被るだけだからだいぶ楽かしらね。じゃあ今日はそれでお願いするわ」
「畏まりました」
「よろしくね……ん、ありがとう」
踏み台の上に乗った一般メイドがアヴェの肩の上から、見るからにふわふわとしている刺繍が入った黒のレースのポンチョを纏わせる。
そして失礼しますといってポンチョの裾からアヴェの流れるような長髪を引き出して流し、櫛で整えると一般メイドは満足そうに頷いた。
「お似合いですよ、アヴェ様」
「そう？ありがとう」
一応、無理はしていないつもりだがユグドラシルからリアルに変わって困っているのは実はこの服の事なのだ。
（やっぱりどう考えても透けてるわよね……ちょっとだけだけれど）
確かに胸部の局部は重ねられたレースで絶妙に隠されている。
しかしそれだって腕を動かしてしまえば衣装であるポンチョの方が動いてあわや、という事になりかねない。
ユグドラシル時代はそれこそ腕を動かしてどんなに衣装が動いたところでR―15レベルの規制も厳しいという制限状、自然にレースの透過が制限されていたものだった。
だが今はそれがない。

一応、六つの乳房に合わせられたブラジャーの様なカップの形状をもった衣装も多数所持はしている。
だが今日のように胸部の開放感を求めて肩に掛けるだけの衣装もそれなりの数存在しており、当然当日の衣装選択担当の一般メイド自身が選んだりするし、アヴェ自身から望む事もある。
だがやはり内心、若干、いやかなりの恥ずかしさは有る。
当然だ、リアルでの彼女は裸族ではなかったし、現在では異性の眼もある。
もちろん、モモンガと一緒に寝台に入るというシチュエーションでは恥ずかしさより嬉しさの方が勝るのだが……。
実をいうとデミウルゴスやコキュートス、マーレと顔を合わせる予定が入る日はカップのある衣装を意識的に選ぶようにしている。
だがそれでも急なモモンガの思い付きなどで呼び出すことは、頻度は高くなくともあるわけで。
そういう時はポロリしないようにそれなりに気を使っているのだ。
「でもやはり不味いかしらね……」
「ど、どうかなさいましたかアヴェ様」
「え?あ。いや何でもないのよ。ちょっと女としての慎みが薄れているような気がして不味いような気がしただけ」
「そんな、アヴェ様はいつも慎み深くモモンガ様の奥様として振る舞われています!」
だが、これである。
ただでさえ第九階層を行き来するのはほとんど同性である一般メイド達だ。
エクレア・エクレール・エイクレアーという執事助手は見た目だけなら愛玩用のペンギンであるし、助手の助手である執事達も男なのだろうが覆面のせいで異性という印象は薄い。
そうなるとどうしても『異性の視線』というのを気にする力が鈍ってしまう。
もちろん、モモンガの視線だって『異性の視線』に入るがそれはそれ、これはこれである。

唯一自分から見せていきたい相手と、見られれば恥じらわないとおかしい相手は違うのだ。
そういう感覚がナザリック内では鈍化しやすい……ような気がアヴェはしていた。
「自分で気を付けましょうか……いっそこれからは恒久的にカップのある衣装だけ選ぶか……ああ、でも衣装を選んでくれる一般メイドのセンスも大事にしてあげたいのよね。はぁ……どうしたものかしら」
ここでノックが鳴る。
着付け役の一般メイドが確認を取るとノックしたのはモモンガだった。
それでもアヴェには確認がとられ、彼女が許可するとようやくモモンガの入室許可が出たことが一般メイド越しに彼に伝えられる。
緊急時に最も優先されるべきはギルド長であるモモンガだが、平時においてはこの様な男性が気を使うべき場面ではアヴェが優先される場合もあるのだ。
それはやはり偏にアヴェがモモンガの妻であるという事実が大きいだろう。
まあそれでなくともモモンガは常にアヴェの事を気遣っているようだが。
「アヴェさん、今日も素敵なお召し物ですね」
「ありがとうモモンガさん。でも実はちょっと、その、薄着過ぎるかしらという気持ちもあるんですよね」
「ん、んん、確かにユグドラシルなら規制に引っかかるぎりぎりラインの衣装ですね。でもそれがまた魅力的ですよ」
「魅力的だなんて。モモンガさんはお上手なんですから」
「いや、本気ですよ？これでも俺だってドキドキするんですからね」
「沈静化されるんじゃないですか？」
お上手な事を言われて物恥ずかしいのを誤魔化す為にからかうような口調で言われたアヴェの言葉に、モモンガは否定で返す。
「何でもかんでも賢者モードってわけじゃないですよ。すっごいもやもやするレベルのドキドキとかはちゃんと感じますから」

「ああ、そうでした。ということはこれは沈静化されない程度のドキドキをモモンガさんに与える衣装なんですね」
そういって微笑みながらすべての腕を下半身の蛇の身体と人間の上半身のつなぎ目あたりにあてるポーズを取る。
するとポンチョが腕に持ち上げられて一番下の段の乳房の下半分がちらりと見える。
「ん！んんっ！見えそうですよアヴェさん」
「ふふ、わざとですよ？」
言葉を切って、するするとモモンガの元までにじり寄って。
「モモンガさんにだけです」
と告げるアヴェ。
その言葉にモモンガは恥じらうように視線を外しながら小声でつぶやく。
「お、おかしい。貴方にだけ……なんていうのはエロゲの中の女の子だけだってペロロンチーノさんが言ってたのに」
「ペロロンチーノさんがなにか？」
「あ、いえいえなんでもないですよ!?でも、あの……こういうと童貞臭いって言われるかもしれないんですけど……」
「はい？」
「……ほんとに俺にだけなんですか？信じてもいいんですよね？」
「はぁ……モモンガさんかわゆ……」
「え、それどういう」
「信じていいですよ。あんなあざとい事するのこんな可愛いリアクションしてくれて……耳を貸してくださいな」
「はい？はい」
アヴェがモモンガの耳元に唇を寄せるとモモンガも首をかしげて耳を寄せるようなしぐさを見せる。
そして恥ずかしい台詞が囁かれる。
「大好きなあなたにだけですよ」
「……！あ、ちぇっ、沈静化がきた……」
「ふふ、アンデッドも大変ですね」

「本当ですよ。それにしても、俺以外には見せないのにそんな恰好していいんですか」
「今日はデミウルゴスやコキュートス、マーレの謁見の予定は入っていないですよね？一応、できる限りは気を付けてるんですよ」
「あ、そういえばそうですね……はっ、もしかしてアヴェさんが俺がちょっとエロいなぁと思ってる日に限ってアルベドとかとしか顔合わせないのは」
「選んでるからです」
「うわー……すいません。全然気づきませんでした」
「モモンガさんって服についてはあんまり気になさらないので気にしていませんよ」
「そうですか？あ、そういえばこれは恥ずかしい！って衣装を選ばれた時アヴェさんはどうしてます？」
「そうですね……さっき言った基準というか、モモンガさんと女性ＮＰＣ以外の眼に触れる予定がない時はなるべくそのままですよ」
「あ、そうなんですか……俺も服のセンスなんてないので殆どメイド任せなんですけど、アヴェさんから見て変な服とかないですか」
「ああ、モモンガさんって私と比べると衣装の装着部位が多いから派手になりがちですよね」
「やっぱり派手ですか……派手すぎて変っていう事はないですかね」
「一般メイドは皆それなりの服装センスがある設定なのか、向こうのリアルならともかく、ファンタジーな世界では派手すぎて変になるっていうコーディネイトは今の所ないですよ。安心してください」
「ほっ……正直適当に買った衣装もかなりあるんで、おかしなことになってたらどうしようって思ってたんですよね」
「ふふ、さすがにそういう服が選ばれていたら私が言って差し上げますよ」
「なら一安心ですねー。ははは」
そんなほのぼのとしたやり取り。
二人は気にしていないが控えている一般メイドが「モモンガ様は派手すぎる衣装を好まない」という事を心のメモ帳に書き込んで一般メ

イド仲間に広めることを密かに決意しているとは思いもしなかった。
だが悲しいかな、その情報は広まっても最終的に至高の御方が着る服に派手すぎるという事はない、という所に落ち着かれるのだった。

番外編：カルマ極悪と食人種へのフォロー

その日、モモンガの私室にはアルベド、デミウルゴス、ソリュシャン、エントマが集められていた。

皆一様にモモンガとアヴェの前で楚々としているが、ソリュシャンとエントマは呼び出された理由がいまいち解らずそれぞれに考えを巡らせている様子を見せる。

だがアルベドとデミウルゴスは高速で思考を回しながらもそれを表に出すことはない。

このあたりが知略謀略に優れると、そうあれと作られたナザリックの知能班と、純粋な玉座の間の前の遅滞戦闘を行うために作られた戦闘メイドの違いだろう。

そして、四人四色の思考を別に、一般メイドに飾り立てられたゆったりとした衣装を着こんだモモンガが口火を切る。

「実は俺が心配していることがあるんだ。それが何か集まってくれた皆には解るかな？」

「申し訳ありませんモモンガ様。卑小なる下僕の身には御身の崇高なお考えは推察しがたく……」

「御言葉ながら私も戦闘メイドと共に呼ばれて新たな外部へのアクションかと考えて居りましたところ、モモンガ様に心配事があると言われて困惑している所でございます」

「私も思慮が及ばず……申し訳ありませんモモンガ様」

「わ、私もぉ……何がなんだかわかりませぇん……」

モモンガの言葉に改めて困惑を新たにする一堂に、ワンクッション置くようにモモンガの横でとぐろを巻いているアヴェが声を発する。

「実はね、モモンガさんが皆の設定……例えばデミウルゴスは人間の苦しむところが好きよね」

「はっ、僭越ながら自らの愚かさに自滅していく惨めな姿は愉悦を感じる物であります」

「アルベドも形は違えど人間を翻弄するのは好きよね？」

「はい。一応は……と今は付け加えさせていただきますが。この世界

には破滅させて楽しそうな人間が少ない……いえ、皆無ですので」
「あー、これはアヴェさんに言われるとソリュシャンが委縮する可能性があるので俺からいうが、無垢な人間……赤子を体内で弄べなくて辛い、ということはないかな？」
「それは……確かに無垢なるものの叫びは悦楽ですが、至高の御方々が止めよと命じられるならば喜んで我欲を封じます」
「そう……これはソリュシャンと似た質問になってしまうのだけれど、エントマはグリーンビスケットとゴキ……恐怖公の眷属だけで食べるものに不満はない？」
「私はぁ、基本的に人肉が一番の好物というだけで雑食ですのでぇ。嗜好品の一つが食べられないだけで至高の御方々を困らせるなんて考えることもできませぇん」
「ふむ。なるほどね。ではもう少し突っ込んだ話を聞くがそれらに関して封じられている現状にストレスはないかな？これは正直に言って欲しい」
「欲求不満、という点では考える所があります。ですけれど私の食指を動かす男が居ないのは至高の御方々ではなく世界が悪いのです」
「私も知的ゲームを楽しみたいという欲求があることは否定致しませんが、それを不満と思う不忠は犯していないと断言できます」
「デミウルゴス様に同じく、不満だとは思いませんわ」
「私もぉ、グリーンクッキー美味しいですぅ」
　口々に不満はないと述べる面々の顔を見回してから、モモンガは顎骨に手を添えて問いかける。
「実はこうあるべしと作られた皆が行動を制限されて不自由な気持ちを味わっていないか気になっていたんだ。皆は不満はないと言ってくれるけど、やはり圧力を感じているのはたしかなようだ。だから」
　モモンガが言葉を区切ったことで集められた四名の身体が強張る。
　まるでその顔色は断罪を告げられるのを待つ囚人のようだ。
　もちろん、顔を擬態で覆っているエントマを除いて、だが。
「だからせめてそんな皆の心を安らがせるアイテムを与えるべきかな、と思ったんだよね」

その言葉に今度は別な意味でアルベド、デミウルゴス、ソリュシャン、エントマが身を固くする。
なぜなら至高の御方からの恩寵など身に余る光栄だからだ。
「そ、それはあまりに至高の御方々に対して我々が不敬というものですモモンガ様！」
「そうです、それでは周囲から対価がなければ御方々に忠誠を示せない存在だと喧伝するようなものです！」
「アルベド様とデミウルゴス様の仰る通りです。我々一同至高の御方々に見返りなど求めません」
「お仕えさせていただくことがぁ、最高のご褒美なんですぅ。モモンガ様の御手とおみ足の手入れとアヴェ様の鱗の手入れという光栄な仕事だけでも恐れ多いのにぃ、下賜品なんてとてもいただけませぇん」
四者四様の否定の声……特にデミウルゴスの言葉に、モモンガもアヴェもそういう見られ方がＮＰＣ間にもあるのか、と衝撃を受ける。
「困りましたねモモンガさん。これじゃあ無理やりにでもプレゼントを受け取ってもらうのは難しくなりましたよ」
「うーん。同僚からどうみられるかかぁ、これは俺達が気づいてあげなきゃいけない事でしたね」
「では……ブラック企業っぽくてアレなんですけど、集まってくれた皆の気がまぎれる様にさらに仕事を用意するのはどうでしょう？」
「あ、それいいですね。よし、アルベド、デミウルゴス」
「はっ！」
「なんなりとお申し付けください！」
モモンガの呼びかけに跪いて応える二人に、モモンガから命令が下る。
「どのような些事でもいいからソリュシャンとエントマに俺とアヴェさんに関する仕事を話し合って作り出す様に。一般メイドの皆の仕事を奪う事のないように気を付ける事、できるかな？」
「は、モモンガ様のご命令とあれば」
「何もない所に何かを作り出すのは我々の得意とするところでありま

す」
「うん。じゃあ頼むよ。それと、アルベドとデミウルゴスの二人には人間を弄ぶ以外の何らかの業務を増やす権限を与えよう。自分たちがナザリックに貢献していると実感できる仕事を作ってほしい。これなら周囲から仕事をより任される信頼された存在として認知されて、気を紛らわすこともできて一石二鳥だよね」
「有難いお言葉です、モモンガ様」
「はっ。より粉骨砕身の心づもりで仕事にあたらせていただきます」
「私どものような下僕に対してのお心遣い、真にありがとうございます」
「ありがとうございますぅ。えへへ、人間食べられるよりずっとずっと嬉しいですぅ」
「ふふふ、それは良かったわね、エントマ」
「はいぃ」
キチキチ、とエントマが擬態の下の本来の顎を噛み鳴らす音がわずかに漏れる。
だが今それを咎める者はいない。
アルベドだってわずかに腰のあたりに生えた翼をぱたつかせているし、デミウルゴスも今後の仕事の発案に対しての期待感から何度も眼鏡の位置を調整している。
ソリュシャンだって与えられる仕事への期待感に降りては体内に戻るロールヘアの循環速度を上げているのだ。
「うん。それじゃ以上だよ。皆下がってくれて構わない」
「今日は皆の正直な気持ちを聞けて嬉しかったわ。また私たちの方で気付いたことが在ったら下僕の皆に相談しますから、よろしくね」
「「「は！」」」
モモンガとアヴェの部屋から下がって歩きながらアルベド、デミウルゴス、ソリュシャン、エントマが少しの雑談をする。
「アルベド様、デミウルゴス様。どうか至高の御方々に関するお仕事の件。よろしくお願いいたしますわ」

「よろしくお願いしますぅ」
「ええ、デミウルゴスと協議の上で最適な仕事を見繕うわ。でも、ねぇデミウルゴス」
「解りました。私から説明しますよ統括殿。モモンガ様とアヴェ様は『君達』に仕事を与える様に仰っていたが実質はプレアデス全員に対する新規業務の発生という事になると思うね。君たちも姉妹と溝ができるのは避けたいだろう？」
「それは当然。仕事の独占ができないのは残念ですけれど、仕事を受けられないのが我が身であると考えれば受け入れざるをえませんわ」
「はいぃ、承知しましたぁ。デミウルゴス様ぁ」
「それでは私とデミウルゴスはさっそく協議にはいるからこれで失礼するわね」
「そういう訳です。失礼しますよ、お二人とも」
「はい。承知しました」
「はぁい。お疲れ様ですぅ」
　アルベドとデミウルゴスは二人でアルベドの私室に向けて足を向ける。
　ここでソリュシャンとエントマはプレアデスの務めとして玉座の間の前に控えに行く。
「ねえデミウルゴス」
「はい、なんですか？」
「他の守護者達に妬まれない程度の、至高の御方々に関われる仕事の設定はかなり難しいと思うの」
「そうでしょうねぇ。皆、至高の御方々にわずかでも忠誠を捧げる機会を狙っているのですから」
「だからゆっくり、お話ししましょう？ね」
「やれやれ、ほどほどにね、アルベド」
　こうしてアルベドとデミウルゴスは第九階層に用意されたアルベドの私室に二人連れで入っていて、ゆっくりと、話をするのであった。

番外編：コキュートスとナーベラル

その日はコキュートスとナーベラル・ガンマの定期報告の日だった。

普段は竜王国に出向きビーストマン狩りで外貨を稼いでいるコキュートスの安否確認と、報酬の現物を受け取り労働環境などを聞くための場だ。

玉座の間で並んで座るモモンガとアヴェの目の前で二人は跪いている。

「コキュートス、御方々ノオ呼ビニヨリマカリ越シマシテゴザイマス」

「ナーベラル・ガンマ、御前失礼いたします」

「うん。二人とも楽にしてくれていい」

「ハッ」

「有難き幸せです」

モモンガの声に、足元を崩し膝をつく蹲踞のような姿勢になるコキュートス。

楽にしていいと言われ礼を言いながらもメイドとしての礼の姿を崩さないナーベラル・ガンマ。

モモンガとアヴェは少し堅苦しいな、と思いつつこの二人らしいとも思い微笑む。

モモンガの微笑は顔が骨なため解らないが。

「さて……竜王国では最初は苦労したようだけれど、その後はどうかしら？」

「当初ハ異形種ト言ウ事デ戦線ニ参加スル事スラ危ブマレマシタガ、彼ノ国ハ少シデモ強力ナ味方足リエルナラバ選ンデイラレナイト言ウ状況カラカ今ハスッカリ我々モ重要ナ戦力扱イトシテ女王ノ指名デビーストマンノ国トノ国境巡回ヲ依頼サレルホドノ信頼度ヲ得テオリマス」

「なるほど、そういえばプレイヤーに繋がる情報があるという伝言を昨日送ってきたよね」

「それに関しては実際に相対したコキュートス様からお聞きくださ

い」
「うん。話してくれるかなコキュートス」
「ハイ。実ハ、ツアーヲ名乗ル鎧ダケノ戦士ガ私達ニ「君達はプレイヤーなのか？」ト尋ネテ来タノデス」
「ふむ。コキュートスはそれになんと？」
「正直、ソノ様ナ問イカケヲサレル想定ガ無カッタノデ、思ワズ正直ニ「ナザリック地下大墳墓ノ偉大ナル至高ノ御方々ニ仕エル者ダ」ト答エテシマイマシタ」
「なるほど、少なくともナザリックの存在がプレイヤーの存在を知る何者かに伝わった、か」
　モモンガの呟くような言葉を正確に拾ったのか、恐縮に身を震わせながらコキュートスが大きく氷の吐息を吐く。
　そして跪いていた身体を土下座の様な姿勢に変えて願い出た。
「モモンガ様、プレイヤーニ関ワル者ヘノナザリックノ存在ノ伝達ナドノ不手際ハ私ノ罪デゴザイマス。ナーベラルニハ累ヲ及ボス事無キヨウオ願イ致シマス」
「コキュートス様!?お、お待ちくださいモモンガ様！コキュートス様の対応が不手際ならば同じ場所に居て止めなかった私にも過失があります！なにとぞ私めにも罰を！」
「ナーベラル、良イノダ。オ前ハ変ワル事無キ忠誠ヲ御方々ニ……」
　なにやら一気に愁嘆場になってしまったが、モモンガがその空気を打ち払う。
「落ち着くんだコキュートス。俺はまだ我々の存在が伝わったことがいいとも悪いともいっていないぞ」
「ハッ。失礼致シマシタ」
「取り乱しましたこと、申し訳ありません」
「ああ、それは良いよ。二人の仲がいいのは解ったからね。それで、ナザリックの事をプレイヤーに知られた件だけれど。悪い事ばかりではないと思う。コキュートス、対象はナザリックという言葉に嫌悪感を示したりはしたのかな？」
「ソノ様ナ事アレバ我ガ刀ノ錆ニシテイル所デゴザイマス」

それがナザリックの下僕として当然、と言わんばかりに再び氷の吐息をもらすコキュートスに、続けてモモンガは言い聞かせる。
「切り捨て御免という概念は俺のナザリックにはないからね？少なくとも、明確に敵対していない相手には。それにしてもそうか、ナザリックに不快感を持たない者なら交渉の余地はあるね」
「交渉でございますか？モモンガ様、お言葉ではありますが一方的にプレイヤーか聞いてきて、世界を穢すものかどうか聞いてくるような相手と交渉が可能でしょうか？」
「落ち着きなさいナーベラル。逆に言えば相手が性急に確認を取ろうとした世界を穢す……それがどのような行為を示すかは不明だけれど、その点以外では交渉の余地があるということだと思うわ」
「その通り。元々、コキュートスとナーベラルを外に出しているのだって、リ・エスティーゼでプレイヤー級の強さを持つ蒼の薔薇の一人を合法的に招くために現金を求めただけだからね。我々ナザリックは責められない限り世界を浸食しようなどとは思わない。そう知ってくれる存在が増えるのは良い事だ」
「デハモモンガ様。次ニツアーナル者ト相対シタ時ハ……」
「うん。ナザリックは地下にある拠点であり支配するプレイヤーはその中で穏やかに暮らすことを願っている旨を伝えてほしい」
「承知イタシマシタ、至高ノ御方」
「ナーベラルもいいね？」
「はっ。モモンガ様の御言葉とあれば」
揃って跪き直したコキュートスとナーベラルが頭を下げ、了解の意を示したのに満足してモモンガが頷く。
そこで、アヴェが再び差し込むように会話に入る。
「ねえあなた。プレイヤーを知る存在がコキュートスに接触を図ったという事はコキュートスの知名度が高まった、という事。スレイン法国の異形種への見方を考えるとワールドアイテムを持たせて耐性を持たせた方が良いかもしれません」
「む。それは確かに……うん、じゃあコキュートス。後ほど君には幾億の刃を預ける。そのアイテムは奪われないように気を配る事、ま

た、スレイン法国に潜り込ませているハンゾウの内数体を周囲につける。ＰＫを仕掛けてくる存在が居たらそれらや雪女郎を壁にしてでもなんとしてでも情報を持ち帰る様に。それから、ツアーなる者が再び接触を持ってきたらナーベラルに伝言を入れさせるように、間接的にでも話がしたい」
「御下命承リマシタ」
「ナーベラル、ワールドアイテムは十一しかないために君には持たせられないので洗脳に気を付ける事。だが万が一洗脳されたらどんな手段を使ってでも取り戻すつもりなのは知っておいてほしい」
「慈悲深いお言葉ありがとうございます、モモンガ様」
「ああ、ところで……一先ず十分な外貨は稼げたと思う。コキュートス、ナーベラル、竜王国での任務は楽しいかい？」
「正直下等生物に囲まれる状況には辟易していますが……」
「モモンガ様、オ言葉デハゴザイマスガ。私ハ階層守護者ト言ウ護ル者トシテ竜王国ノ戦士達ニ共感ヲ覚エテオリマス。オ許シ頂ケルナラ、引キ続キ彼ノ国デビーストマンカラ竜王国ト言ウ『領域』ヲ護リタク存ジマス」
「……コキュートス……様、貴方のそういう所だけは理解しがたいですね」
「コレハ武人トシテノ思イダ。メイドデアルナーベラルニハ、少シバカリ解ランダロウ」
「はあ……というわけで私も解らないなりにコキュートス様をお助けしたいです」
「ふっ、はっはっは、そうか、そうか。では気が済むまで竜王国で活躍してくることを許可する。だが君達の家はここ、ナザリックだという事を忘れないでおくれよ」
「ハッ、ソレハ勿論デゴザイマス！」
「私共下僕にはナザリック以外に家はなく、他に還る場所はございません。必ず、帰ってまいります」
「うん。よろしい。では竜王国に戻ると良い。シャルティアに命じてゲートを開かせよう。行ってらっしゃい。二人とも」

「二人ともプレイヤーには気を付けていってくるのですよ。ご武運を」
「有難キオ言葉。デハ行ッテ参リマス」
「この身には過分なお言葉でございます。必ずやコキュートス様を助けてまいります」
　そう言って、退出の許可が出されるとコキュートスとナーベラルが下がると玉座の間に沈黙が戻った。
　だが、その沈黙をアヴェが破る。
「ふふ」
「どうしたんですか？アヴェさん」
「最後の方でちらりとナーベラルがコキュートスを呼び捨てにしそうになって思い出したのですけれど。弐式炎雷さんと武人建御雷さんは仲が良かったですよね」
「あ、あぁー。あれってそういう。もしかしてあの二人プライベートだと結構仲がいいんですかね？謁見の時はある程度一線を引いてるというか、弁えてる態度しか見せてくれませんけど」
「今度聞いてみます？」
「弐式炎雷さんと武人建御雷さんみたいに侍忍者談義してるかどうかとか、ですか？はは、それは面白そうですね」
「ふふ、侍や忍者談義に限らず東洋武器に関するお話も良くしてましたよね、あのお二人は」
「ですねー。でもナーベラルに武器系の知識って設定として入ってるのかなぁ……？あの二人の会話がどんどん気になってきましたよ」
「どうなんでしょうね？私もあの二人のプライベートな会話、気になります」
「でもまぁ……そこまで俺達が踏み込んだら悪いかもしれませんね」
「そうですね……ああ、永久の謎になってしまうんでしょうか」
「偶然に期待、ですね」
　その後、再び去って行ったギルメン達の昔話に話を咲かせる二人であった。
　ツアーなる謎の存在については、アルベドとデミウルゴスにも相談

しておこう、と心の片隅に刻んで。

番外編：至高のものまね大会

ある日、パンドラズ・アクターの細かすぎて伝わらない物まねシリーズを見るために円形劇場に来ていたモモンガとアヴェ。
そこへご機嫌伺にやってきたアウラとマーレが見たものは、懐かしきピンクの肉棒。
正確に言えばぶくぶく茶釜に化けて黙れ弟のツッコミを入れる真似をしているパンドラズ・アクターだった。
「ぶくぶく茶釜様!?」
「……違うよお姉ちゃん。あれはぶくぶく茶釜様じゃない」
「え、えぇ?……ホントだ」
「なんだろうね、アレ」
喜びに一瞬顔を輝かせたアウラを能面の様な無表情に瞳の輝きを消したマーレが引き留める。
そして引き留められれば即座に違和感を感じてアウラも表情を消す。
「……攻撃していいのかな?」
「でもお姉ちゃん。モモンガ様とアヴェ様は笑ってみてるよ」
「そうだね。じゃあ縊り殺すのはちょっと待ってあげようか」
「う、うん。それよりモモンガ様とアヴェ様にご挨拶しようよお姉ちゃん」
「あー、それもそっかー。じゃあさっさと行くよ、マーレ」
「ひゃ、ひゃわ!そんなに引っ張らないでぇお姉ちゃん!」
非常に不快だが至高なる創造主に擬態した何者かを観て至高の御方々が楽しんでいる。
その事実が殺意に歯止めを掛け、いつもの調子を取り戻す二人。
そのままマーレがアウラに引きずられるように二人はモモンガとアヴェの前に辿り着いた。
「こんにちはモモンガ様!アヴェ様!第六階層にようこそ!」
「こ、こんにちは。お二人ともご機嫌いかがですか?」
普段と違いアウラに小走りに引っ張られていたにも関わらずマー

レは大地に足が接着しているかのようなしっかりとした急停止を見せた。
「ああ、アウラ、マーレ。そういえば全階層守護者との顔合わせはまだしていなかったね。今ぶくぶく茶釜さんの姿を取っているのは私の創造したした下僕、第十階層の領域守護者であるパンドラズ・アクターだよ」
「第十階層になんて領域守護者なんて居たんですか!?」
「あら……ああ、そういえばアルベドも「職務上の都合で知ってはいたけれど顔は見たことがない」と言っていたわね。普通の守護者はパンドラズ・アクターの事はしらないのかしら」
「も、申し訳ありませんアヴェ様。そのパンドラズ・アクターさんですか?その人の事は知りません」
「そうだったかー、これは失敗だな。これは後でちゃんと顔合わせの場を設けないと」
　呑気なモモンガの言葉に一応は納得した物の、アウラは本来の怒りを思い出すと聞かずには居られなかったのか、不敬と感じながらも問いを発する。
「あの、これは不敬になるのかもしれませんけどパンドラズ・アクターは何をしていたんですかモモンガ様。事と次第によっては実力でパンドラズ・アクターとお話したいなって」
　活発なアウラが普段見せない無邪気な残酷さとは違うドスの効いた顔を見せることでモモンガは慌てる。
　当然だ、なんだか解らないがこんなところで階層守護者同士の関係に罅をいれるわけにはいかない。
　よく見ればマーレもぐっとシャドウ・オブ・ユグドラシルを握る手に力を入れている。
　ここは失敗するわけにはいかない、と汗などでないはずの背骨を汗が伝うのを感じる。
「うん。実はパンドラズ・アクターは今は居ない三十九人の外装を使って完璧な物まねをできるんだ。アヴェさんと俺はそんなパンドラにギルドメンバーの皆の真似をしてもらって昔を偲んでいた、とい

うわけなんだ」
「そうです。特にぶくぶく茶釜さんのアバターには茶釜さんがわざわざ残してくれた音声データのお陰で声まで真似できる……いいえ、それは正確ではないわね。ぶくぶく茶釜さんの声を限定的に発することができるのよ」
「え、えええ！本当ですかモモンガ様！アヴェ様！ぶくぶく茶釜様のお声が、聴けるんでずが……!?」
「う、ふわあああ……ぶくぶく茶釜様ぁ……」
ここに至ってなぜアウラ達が怒っていたかモモンガとアヴェは理解した。
何者かも解らない存在が自らの親（創造主）の姿を真似ていたら、それは怒りもするだろう、と。
そこでぶくぶく茶釜の声を聞きたがっている二人の為にパンドラズ・アクターに命じる。
「パンドラズ・アクター、何か適当にぶくぶく茶釜さんの声を再生できる物まねをせよ」
ピンクの肉棒が頷くように頭頂部（？）を下げると、見事な伸縮運動で中に舞い、思い切り触腕の一部を横に突き出す。
『黙れ愚弟！やっぱり可愛くない弟よりアウラとマーレがナンバーワン！』
「ぶくぶく茶釜様の御声だぁ！」
「凄い！すごーい！」
さらにパンドラズ・アクターはうにょうにょと悶えるような様相を呈しながら触腕をこすり合わせる。
『ももんがお兄ちゃん、愚弟のちょうきょ……教育をお願いしても、いいかな？』
このネタには若干モモンガが内心でなんでそれを選んだ!?と後悔の色を滲ませたが、アウラとマーレは大喜びだ。
「ぶくぶく茶釜様の声！」
「わぁ……やっぱりぶくぶく茶釜様の声は天上の調べのようです……」

「そっかぁ、ぶくぶく茶釜様がペロロンチーノ様にお仕置きをする時はこんな動きをしてたんだぁ」
「そ、そうだねお姉ちゃん。僕達の所にいらっしゃるときは大抵やまいこ様と餡ころもっちもっち様と一緒でこんな激しい動きは……僕らの着替えの時以外はしてなかったよね」
「そうだねぇ……あ、あれおかしいな……懐かしいぶくぶく茶釜様の御姿をみているはずなのに……」
「うん。御姿と声が同じでもやっぱり別の人っていう感じがして……寂しいね」
「ふむ。俺とアヴェさんは似姿だけでも満足できるけど、二人には違和感があるか？」
「あ、その、えっと、はい……やっぱり、似てるけどぶくぶく茶釜様では、ないです……」
「そうかぁ……アヴェさん」
「はい」
「アレ、あげましょうよ」
「ああ、アレですね」
　モモンガの言葉とインベントリを探るのに従ってアヴェもインベントリを探る。
　そうこうしているうちにパンドラズ・アクターが擬態を解いてアウラとマーレに話しかける。
「ふんむ！さすがに至高の御方に直接創造なされたお二人には私の三文芝居はお気に召さなかったようですな！」
「あ、それがパンドラズ・アクターの本当の姿なの？卵みたいだね」
「お、お姉ちゃん失礼だよ……」
「はっはっは、この卵の様な顔はモモンガ様自ら格好いいと思って創造してくださった顔なのですよ！」
「えええ、そうなんだ！凄いね！」
「モモンガ様はそういうお顔が格好いいとお思いなんだ……僕の顔ももっと丸かったらかっこよかったのかな？」
　ここでインベントリから目的の物を探し出したモモンガとアヴェ

が会話に加わる。
「楽しそうに話している所に悪いが、俺からマーレにこれを送ろう」
「私からはこれをアウラに……とはいっても、これは同じものなんですけれどね」
「え!?そ、そんな悪いですよ！」
「そ、そうですよモモンガ様！僕達至高の御方々に何も貢献してないのに……」
「いや、これはぶくぶく茶釜さんの姿と声で子供に寂しい想いをさせた詫びの様なものだ。受け取ってくれ」
「ほら、遠慮は無用よ二人とも。この時計はぶくぶく茶釜さんが声を吹き込んだタイマー付きでね、時報代わりにぶくぶく茶釜さんの声が聞けるの」
「えええ!?そ、そんな貴重な品を戴いてもよろしいんですか!?」
「ほ、欲しいけど……欲しいけど……欲しいって言ったらわがままな気がします……」
「ははは、いいんだよ。これなら違和感なく茶釜さんの声を聞けるだろう？詫びだと言っているだから子供らしく遠慮なく受け取るんだ」
「は、はい！えへへ……ぶくぶく茶釜様の御声を聞ける時計……」
「た、大切にします！命よりも！」
「さすがに命と比べたら命の方を大事にしてほしいわね」
「そうですねアヴェさん。この世界での死者蘇生実験はまだしてませんから。皆には命を大事にして欲しいな」
　和やかに言葉を交わすモモンガとアヴェに、アウラとマーレが跪くとその言葉を受け入れる。
「解りました！時計も、命も必ず守ります！」
「お、お姉ちゃんと同じく守ります！」
「良かったですねお二人とも。モモンガ様とアヴェ様のご慈悲に感謝なさいませ」
「あ、パンドラズ・アクター！ありがとうね！君のお陰で大事な宝物を戴けたよ！」
「あ、ありがとうございましたパンドラズ・アクターさん。実は最初ぶ

くぶく茶釜様の真似をしてるのを見た時は殺した方が良いか迷ったんですけど、こんな結果になるなんて。ありがとうございました」
「ふぅーははは！マーレ殿は怖いですな！如何ですモモンガ様、アヴェ様。他の御方々の姿を偲ぶのは自室にお招きいただいた時だけにするというのは」
「う、うん、そうだね。俺達は気軽に物まね大会を観覧する気持ちでパンドラズ・アクターにお願いしちゃったけど。他の皆にとっては自分の創造者を真似られるのは不快みたいだから」
「そうですね。私達の配慮が足りませんでした。ごめんなさいね、アウラ、マーレ」
「そんな！アヴェ様が頭をおさげになる事なんてありませんよ！結果的には私達、こんな幸運いいのかな、っていう逸品を戴いてしまったわけですし」
「そ、そうです。本当なら不敬として怒られるのは僕達の方です」
「いや、アヴェさんの言う通りだよ。どんなに偉くても無暗に、理由なく他人に嫌な思いをさせるのは避けるべきだからね」
モモンガの言葉に、アウラとマーレは感動した様子だ。
両者の顔はこれでもかといわんばかりに輝いている。
そこでモモンガははっとして急いで付け加える。
「そ、そうだマーレ！タイマーの七時二十一分と十九時十九分は絶対にセットしたらダメだよ？約束だ」
「ふえ？モ、モモンガ様がそう仰るならお言いつけの通りに致します」
それを見てアヴェは苦笑いしている。
アウラも不思議そうな顔をしているが、その理由はモモンガとアヴェの永遠の秘密となる。

そして、モモンガとアヴェは自室に戻って、パンドラズ・アクターは宝物殿に籠ってから。
「いやー、予想外だった」
「そうですね、真似事は許せない……それだけＮＰＣの皆には創造主

であるギルドメンバーの皆さんの姿は神聖なものなんでしょうね」
「ですね。じゃあこれ以降パンドラズ・アクターの物まね大会で昔を思い出すのは」
「私達だけの秘密、ですね」
「ですね」
という事になるのだった。

番外編：ちょっとした行き違い

「はぁ」

モモンガがため息をつく。

それを見てモモンガの私室に控える一般メイドが息をのむ。

「……アヴェさん最近宝物殿に籠りっきりで何してるんだろう……着いていこうとしても秘密の仕事があるんですっていうし……なのにパンドラズ・アクターは借りるっていうし……うぅ、アヴェさん何してるんですか……」

じんわりと広がる不安感がモモンガを苛む。

それを少しでも誤魔化そうと夫婦のベッドの超キングサイズのベッドの上をゴロゴロ転がる。

確認したい、でも秘密だと言われている。

悪いようにはしませんから、というアヴェの言葉を信じて待っているが、不安は消えない。

そもそもアヴェは種族レベルである程度の毒耐性をある程度保持しているとはいえ、うっかり毒無効の指輪を外してしまえばブラッド・オブ・ヨルムンガルドに護られた宝物殿の中は死地だ。

そういう意味でもモモンガは心配を募らせる。

これがまたモモンガの存在しない胃を痛めるのだが、結局その煩悶は数週間続いたのだった。

「モモンガさんすみませんでした。今日で宝物殿通いはやめます」

「あ！目的達成したんですか!?」

「ええと、目的を達成したというか……目的を達成できないことが確認できたという感じです」

「目的を達成できないことが確認できた？」

アヴェが離れる時間が減るという事を喜ぶモモンガに対し、アヴェの歯切れが悪い。

モモンガがその事を疑問に思っていると、アヴェがこの数週間何をしていたか語り始める。

「実はですね、結構この世界に来てからアイテムやＮＰＣのフレーバーテキストが適用されてるって判明しましたよね？ほら、その、シャルティアの胸とかで」
「あ、あー……ありましたね。それがどうかしたんですか？」
「ここ数週間、宝物殿を訪ねていたのはパンドラズ・アクターに協力して貰って『飲食を可能にする』っていうフレーバーのついてるアイテムを探してたんです」
「アヴェさん、それって」
「でもごめんなさい。パンドラズ・アクターに協力してもらってもそういうアイテムは宝物殿にありませんでした。ごめんなさい。毎日モモンガさんを一人にしてまで探したのに見つけられなくて」
　肩を落とすアヴェを、モモンガが抱きしめる。
　そして優しく彼女の長い髪を手櫛で梳く。
「いいんですよアヴェさん。ユグドラシル……というかあちらの世界の電脳規制法で嗅覚や味覚の一部の五感は厳しく制限されてた上に、システム的にはどんな異形種でも飲み食いできてたんですから。そんなピンポイントなフレーバーがついてるアイテム、あったら奇跡です」
「ですよね……でも私やっぱりモモンガさんとお食事したくて」
「ははは、紅茶の香りを俺が楽しんで、紅茶そのものはアヴェさんが飲むとか今までもやってたじゃないですか。俺はそれだけでも満足ですよ」
「ですけど……」
「だったら着眼点を変えましょうよ。それこそ匂いとか食感を楽しむような料理を料理長に作ってもらえばいいんです。食べかすは……顎下に無限の背負い袋でも据えましょうか。あれならいくらでも予備がありますし」
「そう、ですね。私ちょっと空回りしてましたね」
「そうですよ。毎日俺に秘密のお仕事とかいうから心配してたんですからね。場所が場所ですし」
「すいません。随分心配を掛けちゃったみたいで」

謝りどおしのアヴェへのハグをやめ、モモンガがアヴェの本来の腕……課金で指輪を嵌められるようになる、という意味だ。ユグドラシル時代のアヴェは腕が六本あってもその分だけ嵌められる指輪が増えたというわけではないのだ……を手に取ってじっくりと確認する。
「今日も毒無効の指輪は外れたりしてなかったみたいですね。毎日確認してたけど、俺待ってる間アヴェさんが何かの事故で指輪を落としちゃうんじゃないかって心配してたんですから」
「ふふ、お気遣いありがとうございます」
礼を言った後、取られた手をじっと見つめるモモンガの視線に、アヴェが身をよじらせる。
「あの、私の手がどうかしましたか？」
「あ、いや。相変わらず綺麗な爪だなぁって……」
「ふふ、ソリュシャンを褒めてあげてくださいね。あの子が定期的に爪の手入れをしてくれてるんです」
「へえ、ソリュシャンが。確かにソリュシャンはこういう細かい美容に気を使いそうなイメージありますね」
「爪が滑らかになる程度に調節して溶かして、その後磨いてくれるんです。あの子、かなり器用ですよ」
「はー、そんな手入れの方法をしてるんですねぇ……アヴェさんは酸耐性ないのに怖くないですか？」
「そんなことありませんよ。ＮＰＣは皆私達を大事にしてくれますから」
「俺はデミウルゴスが怖いですよ」
「え、なんでですか？」
「ナザリックの防衛方針報告の時とか滅茶苦茶難しい言葉を使うんですよ……もう何度も噛み砕いて説明してくれるようにお願いしてて……いつ切れられたらと思うと、胃が、胃が」
「ふふ、モモンガさん胃なんかないじゃないですか」
「あ、真面目な話ですよアヴェさん！」
「と、冗談は置いておいて……デミウルゴスの報告する姿は私も見ていますけど、モモンガさんに説明を求められるたびに嬉しそうにして

ますから。きっと大丈夫ですよ」
「えー、そうですかねー」
「モモンガさんに「簡単に話して」っていわれると何時も悪そうな、嬉しそうな顔するじゃないですか」
「あれ素直に受け取っていいんですかねー」
「ナザリックの皆、モモンガさんの役に立つのがうれしいみたいだから怖がらなくても大丈夫ですよ」
「そういえば報告の度に解らなかった部分が徐々に簡便な表現にすげ変わっていってる気が……」
「でしょう?ナザリックの皆は優しいんですから」
「んー、ですよねー。でももしあっちのリアルでデミウルゴスにするような質問の連打してたら確実に上司から雷が落ちてたなーっていう意識が抜けなくて……」
「まあ、それはおいおいですよモモンガさん。私達はもうサラリーマン・OLじゃないんですから慣れないと」
　アヴェの言葉の後も手に取ったアヴェの指先をさすりながらモモンガは続ける。
「アヴェさんは仕えられるのに凄い馴染んでますよね。なんか、こう、使用人がいる家の生まれだったりするんですか?」
「そんな事ないですよ、なんていうか憧れに身を任せてるんですよ」
「憧れですか」
「ナザリック地下大墳墓って皆の色んな憧れを詰め込んだ場所じゃないですか。そこで奉仕されるのって一種の憧れがあって……」
「あー、なるほど。今はお姫様気分ですか?女王様」
　悪戯っぽい声色のモモンガがアヴェの手に唇のないキスをする。
　それを受けてアヴェはくすくすと笑いながら答える。
「ええ、今夢心地です。貴方とこうして触れ合えることも」
「はぁ、アヴェさんには敵わないなぁ……それなら俺は精々お姫様に夢を見せる王子様役をやりますよ。骨ですけどね」
「骨でも悟さんは素敵ですよ」
「う……あ……ふぅ……不意打ちは卑怯でしょう」

「ずるいのはモモンガさんですよ。手を取られてお姫様扱いなんて、一種の女の子の夢じゃないですか」
するり、とアヴェの下半身の蛇身が動いてモモンガを取り囲む。
「はぁ、ずっとこうして居たいですね……」
「本気で望めばそれが叶っちゃいそうなのが今のナザリックなんですよね」
「ですね。だから、溺れてしまわないように我慢です」
するするとアヴェのモモンガ包囲網が解かれる。
そしてモモンガが明るい声でアヴェを誘う。
「じゃあ手始めに皆と交流するためにさっき言った香りと歯ごたえの良い食べ物の作成を依頼しに行きましょうか」
「そうですね、行きましょう行きましょう」
閉じた世界（ナザリック）に閉じこもっても、心を閉ざすものではない。
そういうように二人は大食堂に出かけるのだった。

番外編：デートｉｎＢＡＲ

「アヴェさん、ナザリックのＢＡＲに行ってみたくないですか？」
「着いて来て欲しい、と？」
「着いて来て欲しいのはその通りなんですけど、ＢＡＲでデートとかリアルじゃできませんでしたから、やってみませんか？」
「ああ、確かにそれはいいかもしれませんね」
「どうせだからアヴェさんが夕食を食べてる間に俺は先にＢＡＲに行ってますから、待ち合わせしましょう」
「お互いに衣装を変えて、という趣向ですね？」
「ですです。如何でしょう」
「良いですね。それ、やりましょうモモンガさん」
「じゃあ……十八時ごろに待ち合わせで」
「はい解りました。楽しみにしていますね」
「俺の方も楽しみにしてますよ」
「ふふ、どんな服にしようかしら」
　ここでモモンガは重要な事に気付く。
　こういうデートの時のコーディネイトまで一般メイドに任せていい物なのか？
　なんとなくアヴェはすいすいと衣装を決められるイメージがある。
　なら自分も頑張って自分のセンスを試してみたい気がする。
　でも自信がない……こういう時どうすればいいのか教えてくれる友人も、読み物も読んだことがなかった。
「対処が必要だな……」
「どうかしました？モモンガさん」
「あ、いや。ちょっとデミウルゴスに相談事ができたのでちょっと席を外しますね」
「……？はい、いってらっしゃいモモンガさん」
「はい行ってきます。ではでは」
　モモンガはリング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンの力によって第七階層に赴く。

そう、困った時のデミウルゴスと言わんばかりに。

「アヴェ様とのデートの時の服選びのポイント、でございますか」
「うん。マーレはまだ子供だし、コキュートスは全裸だからね。相談できるのはデミウルゴスだけなんだ」
「なるほど、そういう事でしたら是非、全力でご相談に乗らせていただきます」
「う、うん。頼むよ」
眼鏡の位置を整えてきらりと光らせるデミウルゴス。
その口元には隠しきれない喜びの笑みが見える。
「まずデートはどのような場所で行われるのでしょうか？」
「一応ＢＡＲを予定してるんだけど……」
「ＢＡＲですか、では思い切りシックに決めるか、反対に派手に決めて周囲の耳目を集めるか、です」
「うーん。周囲の反応を集めたいわけではないからシックに行くかな……」
「ではやはり至高の御方を飾るのは神器級のあのローブと外套が相応しいかとも思いますが、あれはいわば戦装束。ここはモモンガ様の白磁の身体に映える様に黒、ないしは濃紺のローブ系の衣装がよろしいかと存じます」
「ふむ、外套は必要ないかな？」
「室内でのデートですから、思い切ってモモンガ様の頚骨から頭蓋骨への美しさを演出するのも手かと」
「なるほどなぁ。いやぁ、デミウルゴスは頼りになるよ。ありがとうね、デミウルゴス」
「いえいえ。モモンガ様の御役に立てて無上の幸福でございます」
「そう言ってもらえると助かるよ……おっと、じゃあもう衣装選びに時間をかけるからもういくね」
「はっ、行ってらっしゃいませモモンガ様」
リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンの力で去って行ったモモンガを見送ったデミウルゴスは、やり遂げた顔をして鼻歌を歌い出し

た。
嬉しいのだろうに何故かドナドナで。
「邪魔をする」
ナザリックの規模からすると小さすぎる店内……それも全て大人の社交場をイメージしてつくられたためである……に銀糸でユグドラシルにおける魔法的な言語を裾に縫い付けた漆黒のローブを着込んだモモンガが入店する。
それに驚いたのはこのＢＡＲを運営する副料理長だ。
「い、いらっしゃいませモモンガ様！この度はどのような御用でございましょう!?」
「うん、アヴェさんと十八時ごろから飲みたいんだけど、席をキープできるかな？」
「はっ！至高の御方々の為とあらば命に代えましても！」
「まあまあ、アヴェさんは下半身がアレだからスペースを取ってしまうと思うからできるだけでいいよ」
「いえ、なんなら今日はお二人の為に貸し切りにすることも辞しません」
「それだと他の飲みたい皆に悪いんじゃ……」
「モモンガ様がアヴェ様とお飲みになるという事情を説明すれば、その場を見られないことを残念がる者は居ても不満に思う物はおりません！」
モモンガの問いに答える副料理長はキノコのような姿から涼しい顔で対応しているように見えるが。
内心炙られたシイタケのように汗だくだくである。
万が一にも至高の御方々に失礼があっては腹を切ってもたりないというのが下僕としての共通認識であるからだ。
「そうかな？」
「そうでございます」
「じゃあ頼むよ……ところで俺もアヴェさんもお酒を嗜むのは初めてなんだけどお勧めは有るかな？」

「そうでございますね……モモンガ様は香りだけをお楽しみになられるという事で香りがよくとも癖の強い蒸留酒系をお勧めします。アヴェ様にはまず軽めのカクテルから……サワー系もよろしいかと」
「蒸留……合成ビールとは違うの？」
「蒸留酒とは……」
　モモンガの好奇心を満たすために色々質問されて副料理長は極度の緊張と幸福感を味わうのだった。

「お邪魔します」
　アヴェがＢＡＲに入店するとモモンガがゆったりとしたローブに包まれた腕を上げて彼女を呼ぶ。
「アヴェさん、こっちです。席取っておきましたよ」
「あら、ありがとうございますモモンガさん。副料理長も手間を取らせたわね」
「いえ、その様な事は……」
「そう？じゃあ飲みましょうか、モモンガさん」
　アヴェは臙脂色のコルセット状のカップが六つある上着に艶のある薄紫色のケープを重ねた衣装を着ていて、青白い肌によく似合っている。
　飲み始める前に「良く似合っているよアヴェさん」という言葉を掛けたいが、ちゃんと言えるかモモンガは葛藤している。
　だが、勇気を出してモモンガは口に出した。
「良く似合っているにょ……よ、アヴェさん」
　全然無理でしたぁ！というモモンガの内心の叫びを無視して、何事もなかったかのようにアヴェはお礼を言った。
「ありがとうございますモモンガさん。実はちょっと似合っているか自信がなかったんですけど、そういっていただけると嬉しいです」
　にこにこと微笑むアヴェは、即座に言葉を送り返した。
「モモンガさんのローブも良くお似合いですよ。その服の裾の縫い取りどこかでみたおぼえがあるんですけど、なんでしたっけ……？」
「あ、ああ！これは実はユグドラシルの超位魔法の魔法陣の文字を縫

い取った柄でこれは失墜する天空の柄なんですよ！」
「ああ、この袖口の模様とか確かに失墜する天空を唱える時に出る小魔方陣の柄ですね」
「えと、実はこれ自分で選んだんですけど……変じゃ、ないですよね」
「とってもお似合いですよ。モモンガさんみたいに元が良いとなんでも似合いますよね」
「も、元が良いって、俺骨ですよ!?アヴェさんはその……絶世の美女って感じ、ですけど」
　恥ずかしいーというように片手で顔を隠しながら、ちらりとアヴェを覗くと、アヴェはモモンガの頭蓋骨の頂点から頬骨、あご骨となぞり濡れた瞳でモモンガに告げる。
「モモンガさんも良い骨格ですよ。とっても、格好いいです」
「ふ、副料理長!?アヴェさんにピーチリキュールのサイダー割りを！」
「はっ、畏まりました」
「そ、そういえばアヴェさん、毒無効の指輪は外してきましたか？アヴェさんが来るまでの間に聞いたんですけど、デミウルゴスやコキュートスとかこのＢＡＲに来る皆は酔うために毒無効装備を外してくるそうですよ」
「あら、アルコールって毒扱いなんですね」
「みたいですね」
「じゃあ素のスキルで毒耐性を持ってる私は酔いにくいのかしら……？」
「だと思いますよ。俺に至っては飲めないから酔えないんですけどね」
「あら、じゃあ雰囲気に酔ってもらえるように頑張ります」
「え？それってどういう……」
「ふふ、それは飲みが進んでからのお楽しみ、という事で」
「はあ……」
　うむむ？と疑問を飲み込むモモンガをよそに、副料理長がモモンガの注文に従って出してきたサワーを上品に、しかし一息に飲み干しアヴェ。

グラスを取る動作、口につけて傾ける挙措、置く時も無音。
それらが相まってがっついているようには見えない。
「お、アヴェさんお酒飲む姿が様になってますね。結構リアルでご経験が？」
「それが不思議なんですけど、この身体になってから身体能力が伸びたからか『丁寧に動く』のが格段に楽になったんですよ」
「あ、あーあー。それ、俺も覚えがありますよ。身体をこういう状態で保持したい、とかいうのが凄く正確にできるんですよね」
「ですよね？モモンガさんもそうですよね。モモンガさんがグラスを傾けてお酒の香りを楽しむ姿、とても様になっていますよ」
「え？そうですかね……こんな感じですか？」
モモンガがＢＡＲのカウンターに膝をつき大きめのグラスを傾けて香り立たせるためにグラスを揺らすと、どうです？と言うようにアヴェに顔を傾ける。
「そうそう、そんな感じです。よくお似合いですよ」
「ふふ、アヴェさんに様になってると言ってもらえると嬉しいですね……それに香りも良い……」
カラコロとロックの氷を回して、モモンガは良い気分になる。
アヴェも話の切れ目に出されるお代わりを飲むピッチを緩め、じっくりと味わうように飲むようになる。
「ねえモモンガさん私少し酔っちゃいました……ちょっと調子よく飲みすぎましたかね……」
「え!?もう廻っちゃったんですか？」
「はふ……顔が熱いです……赤くなってませんか？」
「赤……くはないですけど青い顔がもっと青くなってますね」
「ふふ、血が青いからですかね。ほら、ちょっと触ってください」
アヴェがモモンガの空いた手を掴んで頬に当てる。
するとほんのりと上気した頬に相応しい僅かな熱がモモンガの骨の手にじんわりと伝わる。
「あ、暖かい、ですね」
「えへへ、酔っちゃってますから……ふふ、モモンガさんの手冷たくて

気持ちいいです……」
　モモンガの手を頬から外すとアヴェはモモンガの肩にしなだれかかる。
「ふふ、私酔っちゃった……なんて言われた経験あります？モモンガさん」
「なっ……ないですよそんなの……」
「モモンガさんに酔わされちゃった……」
「ええ、俺のせいですかぁ!?」
「もう、そこは一緒に飲んでたんですから」
「あ、ああそういう……」
「それとも一緒に飲んでる女に甘えられてモモンガさんはスルーするんですか？」
「う、うぉぉ……」
　酒は回っていても飲まれたという感じではないアヴェの濡れた瞳と心なしか艶の良い唇に魅せられ圧倒される。
　そしてついつい、なんで実戦使用する前になくなっちゃったんだ……！なんていう気持ちに支配されるモモンガ。
　無くもないような性欲が沈静化されることもなくじりじりと股関節のあたりで燻っているかのように感じる。
「雰囲気で酔わせること、できました？ふふ」
「そ、それは……その、はい……」
　気づけばしなだれ掛かるアヴェの肩に手を廻そうとして手を開いては閉じてを繰り返している自分の動きに敗北を認めるモモンガ。
　そして思い切ってアヴェの肩を確りと掴む。
「じゃあ、その、お持ち帰り、しちゃおうかなー。なんて……」
「うふふ、どうぞどうぞ」
「モモンガ様、アヴェ様。仲睦まじくいらっしゃいますね。お帰りならお飲みになったアルコールが抜ける前をお勧めしますよ」
　さりげなくそのままベッドの上の乱戦に持ち込んでしまわれればいいのに、という願いを込めて副料理長がいうと、アヴェを余った尻尾を引きずりながらもモモンガがお姫様抱っこしてった。

きのこな副料理長は祈る。
勢いで御世継ぎできてしまえばいいのに、と。（※出来ません）

番外編：ツァー・コンタクター

「此処デ待テバ、御方々カラノ迎エガ来ル手筈ニナッテイル」
「そうかい。感謝しているよ、百年の揺り返しを確認するための協力をしてもらって」
「貴殿ハ優レタ戦士ダ。我ハ戦士トシテノ貴殿ヲ信ジテ、ナーベラルヲ通ジテ御方々トノ繋ギヲ取ッタノダ。間違ッテモ御方々ヲ世界ヲ穢ス者ナドト言ワヌ事ダ」
「それは気を付けるよ……初めてそれを言った時の君からの倶利伽羅剣は恐ろしい威力だったからね……」
「ならばそのまま恐れて引っ込んでいれば良かったのよ。カメムシが」
「ナーベラル、抑エロ。未ダニオ前ガツァーニ怒リヲ向ケル理由ハ解ルガ。我々ハ狂犬デハナイ。統制ノ取レタモモンガ様ノ猟犬トシテ噛ミツクベキ相手ハ見極メロ。オ前デハ無理ダ」
「ちっ……力の足りない我が身が恨めしいわ……」
「仕方アルマイ……プレアデスニ与エラレタ力ハ至高ノ御方々ガソノ程度デ用ヲ成ストオ考エニ成ラレタ結果ダ」
「だけどコキュートス、御方々のためにより強い力を求めるのは間違っているかしら？」
「ソレハ難シイ問題ダ。ダガ唯一ツ確カナ事ガアル。至高ノ御方々ノ為ニハ全身全霊ヲ尽クス。ソレダケダ」
「……そうね。私も忍法微塵隠れの精進をします」
「ウム。ダガナーベラルノ微塵隠レハ煙幕玉ヲ併用シタ次元ノ移動ダロウ」
「わ、私にとっては忍法微塵隠れなんです！二式炎雷様の忍術メイドというコンセプトは守らなければなりません！」
「ソウダナ。連鎖スル龍雷ハ雷遁双龍撃ダナ」
「それは他の姉妹達には秘密ですよ」
「ウム……」
緊張感のないコキュートスとナーベラル・ガンマのやりとりを見

て、白銀の鎧は首を振り肩をすくめる。
「二人の仲がいいのは良い事だけどね。本当に迎えは来るのかい？」
「ム？ソウ言エバ遅イナ……ダガ、丁度来タ様ダゾ」
　ある意味ジャストタイミングと言えばいいのか、ゲートを開いてデミウルゴスを伴ったシャルティアが現れる。
「どうも。ツァーといったかね。至高の御方々に拝謁する栄誉に浴する光栄を噛み締め給えよ」
「デミウルゴス、何故オ前ガ」
「ああ、一応シャルティアの抑え役だよ。モモンガ様の客人に失礼があってはナザリックの沽券に関わるからね。例えナザリックの事を世界を穢すなどと評する相手だろうとね」
「それは……申し訳ないが、ぷれいやーは大昔にこの世界を支配していた法則を歪めた存在なんだ。この事について譲るつもりはないよ」
「正直、今すぐにでもこの空っぽの鎧をばらばらにしてやりたいでありんすが。モモンガ様の命でありんす。丁重に送らせていただくでありんすよ」
　しかし言葉とは裏腹にシャルティアは紅い鎧の完全武装状態であり、敵意を無暗に発散しないようにか、ツァーからは視線を外している。
「さ、ここで空気を悪くしてもモモンガ様に益はないからね。ゲートを頼むよシャルティア」
「解っていんす。さぁ、ナザリック地下大墳墓に足を踏み入れてその威容に跪きなさい」
「威容、ね。どんなものか解らないけれど楽しみにさせてもらうよ」
「ツァーヨ。御方ハ寛大ダガ奥方ニ関シテハ迂闊ナ事ヲ言ウナヨ。モモンガ様ハアヴェ様ヲ真ニ慈シンデ居ラレルノダ」
「解った。心に留めておくよ。忠告ありがとうコキュートス。有難く受け取らせてもらおう」
「いい加減にしなんし。モモンガ様が御待ちでありんすよ。とっととゲートにはいりなんし」
「うん、ちょっと雑談が過ぎたね。じゃあ、お邪魔します」

ツァーがゲートを潜るとその後についてシャルティアとデミウルゴスが続く。
玉座の間の前、右に女神左に悪魔の彫刻が施された巨大な扉の前に出る。
「ふむ。君達が誇るだけの事はある、壮麗な造りの建造物だね。この扉の中に入ればいいのかい？」
「まぁお待ちください。モモンガ様！お客人をお連れ致しました」
デミウルゴスが扉越しに伺いを立てると、ややあってセバスが玉座の間を開く。
「どうぞお入りください。モモンガ様が御待ちです」
それを見てツァーは改めて思う。
今回のぷれいやーは彼らにとって真に王たるものなのだね、と。
そんなわけで輝く白に包まれた玉座の間を進むツァーを、ある一点。
玉座の前の階段の下でデミウルゴスが囁く。
「このあたりで止まるのが招かれた者の礼儀だと思うがね。それ以上は近すぎる」
「……そうだね。後ろの怖いお嬢さんを刺激したくないからここで止まらせてもらうよ」
「その通りだ。では『ひざま……』」
「良いよデミウルゴス。未だ敵か味方か解らない以上警戒は必要だけど、今日は客として来てもらったんだ。跪いてもらう必要はないよ」
一面の白を基調とした壁面に金細工で飾られた部屋の最奥に存在する、漆黒よりもなお昏い暗黒の主。
そんな邪悪そのものと言う印象のアンデッドがその印象とは大きくかけ離れた柔らかな口調でデミウルゴスを制止する。
「はっ。申し訳ございませんモモンガ様。出過ぎた真似を致しまして」
「すまないねツァーさん。部下が失礼をしまして」
「あ、ああ。それはいいんだ。それより早速話し合いをしないかい？ぷれいやー」

「うん。実を言うと俺達もこの世界におけるプレイヤーの立ち位置と言うのを計りかねていてね。スレイン法国という国にはプレイヤー級の人材がいるにも関わらず、俺達だけ「世界を穢すもの」と言われる。その辺りの詳しい話をね、直接聞きたいんだ」
モモンガの眼窩に灯る火がわずかに絞られた気がする。
一方でツァーは戦慄して居た。
恐ろしいほどの汚染魔法を行使する魔力を迸らせるアンデッド。
こんな存在が百年の揺り返しからずっと大人しくしていたというのが信じ難い。
「では説明させてもらうけれど。そもそも君達ぷれいやーが何故世界を穢すもの、と僕達竜王の間で呼ばれているかの謂れだ……」
そこで語られるのは六大神と、八欲王の伝説。
世界の法則を捻じ曲げたそれらと、世界を一部とはいえ変えてしまえる力を持っていた十三英雄を伴った、実体験の話。
それらをモモンガはじっと聞き取っていた。
そしてすべてを聞き終えて、モモンガはカッカッカッカと顎を鳴らすように笑う。
「つまりは、君は世界を守護する竜王として俺達ナザリック大墳墓に所属するものが世界を変えるのを危惧しているわけだね」
「その通り。もし君達がそのような行動に出るというなら、僕にも覚悟がある」
「ふむふむ。なら何の心配もしなくていい。俺達はナザリック地下大墳墓を維持し、愛する人と共に在れればそれで満足なんだ」
「その言葉を信じろ、と？」
「信じてもらうしかないね。これは俺の本当の気持ちだから……だから、こそだ」
「……？」
「もし世界の穢れだというだけで理由なく我がナザリックに敵対し、潰そうとした時は我々の全力をもって世界を穢し尽してやる！天に、地に、海に！たとえ神だろうと癒せない傷を刻んでやるぞ！良いな！」

言葉が放たれた刹那、モモンガから絶望のオーラVが放たれる。
その波動は分体であるツァーの鎧越しにもモモンガの激情を感じさせるに十分だった。
ツァーは思う、このアンデッドは本気だ。
本気で安寧を願い、それを破る者には容赦しない。
この会談の結果得られた判断は……藪をつつかないに越したことはない、という事だった。
「では君達は自発的には世界に広がろうとしないんだね？」
「多少は外界とつながりを持つためにコキュートスにさせているような活動は行うかもしれない。でも、それ以上はしない。だから君の様な存在とは相互不可侵で居たいと願う」
「……解ったよ。僕は君たちに安易な手出しはしない。だが、アルゼリシア山脈に住む竜王の一体を倒したことについては説明を求めたい。あれはなぜ死ななければならなかった？」
「う……ん。それを言われると弱いな……」
直前まで覇気に満ちていたモモンガが若干居心地悪そうに委縮するのをツァーは感じた。
もしや彼のフロストドラゴンの竜王を倒したことに罪悪感を感じているのか？と思うほどに。
「ツァーさん、君はプレイヤーとはどんな存在か詳しくしっているかい？」
「いや、異世界から突然やってきて世界を歪めるものとしか……」
「実はプレイヤーというのはゲーム……仮想の世界で冒険し、モンスターを打ち倒す遊戯にふける者のことなんだ」
「なんだって？じゃあ彼の竜王を倒したのは遊び半分だったと……？」
「率直に言えばそういう事になる。その詫び、になるかわからないが君が望むなら竜王の蘇生を行おう。あの時はまだ俺達は仮想のつもりで……ゲームのハンティングのつもりだったんだ」
「……はぁ。竜狩りがハンティング、か。つくづく君達ぷれいやーは規格外だ。あの地域にはもう他のフロストドラゴンによって新たな

秩序が形成されている。そこに前竜王を復活させても混乱の種にしかならない。故にその件については無用に願うよ」
「そうか……本当に申し訳ない事をした」
モモンガが頭を下げる。
形としては壇上から椅子から立って頭を下げる、という上から目線な行為にあたるが、ツァーの横に居るデミウルゴスと背後にいるシャルティアが我らが主に頭を下げさせるとは！という雰囲気を発していては何も言えない。
それに、モモンガの精一杯の誠意はツァーにも通じた。
「解った。では僕と君達ナザリックは理由なき以上お互いを不可侵とする。それでいいよ」
「そういってくれるとありがたいですね。そろそろお帰りになられますか？」
「ああ、うん。もうこうなったら無用に長居をする必要もなさそうだしね」
「では……シャルティア、玉座の間の前からコキュートスの所にツァーさんをお送りして。デミウルゴスも頼むよ」
「はっ、畏まりましたモモンガ様。ほら鎧男。行くわよ」
「承知いたしましたモモンガ様。ほら鎧男。行くわよ」
「あ、ああ」
「シャルティア。お客人はお客人のまま帰るのだから敬意を払い給え」
「むぅ……こちらにいらしてくださいまし。お・客・様」
デミウルゴスとシャルティアの伴われて玉座の間を出たツァーはその後何事もなく、コキュートス達が待つ竜王国付近に送還された。
何はともあれナザリックと白金の竜王の接触は無難に行われたのだった。

「モモンガさん、本当に私は同席しなくてよかったんですか？」
「いいんですよアヴェさん。相手はコキュートスと互角……あるいは

それ以上の強さをもっていたんですから」
「そうはいってもナザリックの……モモンガさんの妻として私もお客様を迎えた方が良かったんじゃ」
「いいんです。もし相手がトチ狂ってアヴェさんに何かしたら」

『俺もこの世界に何をしたかわかりませんでしたから』

モモンガの世界は今、アヴェを中心に回っている。

閑話１８・赤ちゃんはどこからくるの？

「あー、あのーほんとにやるんですか？アヴェさん」
「ええ、やります。必要な事でしょう？」
「そうですけど……」
　モモンガは豪奢なローブの開いた胸の前、赤い玉の埋め込まれた鳩尾の前でちょんちょんと指を突き合わせている。
　一方アヴェは六本ある腕の内三本を腰の少し下、腰、腰上にくの字で当てて残る三本で力こぶを作るしぐさをしている。
　ここから解るのはモモンガは乗り気ではなく、アヴェは非常にやる気だ、という事だ。
「でもなぁ。やっぱり俺は気が進みませんよアヴェさん」
「気恥ずかしいのは解りますけど、やっぱりきちんとしておくのが親の務めですよ」
「う……親ならぶくぶく茶釜さんなんですけど……」
「そ、それは。今は茶釜さんが居ないから私たちが親みたいなものなんです！さ、覚悟を決めましょう！」
　時はナザリック大墳墓がリ・エスティーゼ王国に転移してから永い時を経てからの話。
　そう、アヴェ達はとうとう向き合う時が来たのである。
　アウラとマーレの性教育、という問題と。
　モモンガｗｉｔｈマーレの場合。
「ん、んん！よく来てくれたねマーレ」
「い、いいえモモンガ様。僕なんかをお傍に呼んでくださってありがとうございます。それで、今回はどのようなご用件でしょうか」
「え、デミウルゴスから聞いてない？」
「えと、デミウルゴスさんからは『モモンガ様が君に大事な話があるそうだ。よくよく至高なる御方の御言葉を心に刻む様に。君の種族に関することだからね』としか」
　そういえば僕の種族に関する事って何でしょうね、モモンガ様。と女装を止めてスーツ姿なのに、なおどこか女性性を感じさせるハンサ

ムなマーレが問いかける。
（ああー！そりゃ遠回しに性教育の事を伝えてくれとは言ったよ！でもさ、遠回りすぎないかデミウルゴス！確かに種族には関係することだけどさぁ！）
「あのー……モモンガ様。僕になにか失態でも……？」
身形は青年になっても、昔と同じようにおどおどとした様子を見せるマーレ。
モモンガはそんな彼の不安を感じて、とっさにそれを拭い去ろうとする。
「い、いやいや。失態など何もないよマーレ。お前の働きはいつも私とアヴェさんに喜びを与えてくれたよ。例えばマーレとアウラが冒険者として外を廻り外貨を稼ぎ、ナザリック内に持ち込んだ果物の生産などは特にアヴェさんの舌をを楽しませてくれた」
「そ、そんな……僕と姉さんの小さな働きをそんなに評価していただけるなんて恐れ多いです」
「そう自分を過小評価するものではないよマーレ。お前達姉弟は本当に……」
と、ここでモモンガが傍と気づく。
（そうじゃない、話がずれているぞ俺！
いや、本音を言えば？このままどこまでも脱線を続けてマーレとの会話を無難に終わらせたいー！という気持ちがないといえば嘘になる。
でも、でも性教育の話をちゃんとしてなかったなんてアヴェさんに知られたら怒られるかもしれない……！
そ、それは避けたい！）
「んっ！んんっ！まあマーレとアウラには日ごろから深い感謝を抱いていると知ってもらいたいな」
「あ、ありがとうございます！モモンガ様の多大なるご配慮を頂き恐悦至極にございます」
「あー、ところでそれは本題ではないんだ。非常に繊細かつ微妙な話題なので俺もどういったらいいのか迷うんだけど……」

「も、モモンガ様が口になさるのを憚るほどの話題ですか？」
「あ、うん。お前とアウラに関する重要な話題だね……」
「僕と姉さんに関する……どのようなお話でしょうか？モモンガ様の御心に掛かる霧を晴らすためならどのようなご命令にでも従う所存です！」
ふんす、とボブカットを揺らして気合を入れるマーレを前に、モモンガは内心
（うわー！なんか大事にしちゃった気がするぞ！どうする、この空気で雄しべと雌しべの話をするのか？できるのか？）
と混乱をしてなにげに羞恥心からか沈静化が発動する。
そしてそのタイミングでなるべく科学的に話を進める決心を固める。
そうだ、もしここまで引き延ばしてきたＸ―ＤＡＹを先延ばしにしてナザリックの外貨獲得班（冒険者チーム）として外回りを行っているマーレが望まない妊娠をさせ責任を取らされるかもしれない可能性を考えれば、一時の羞恥心などねじ伏せることができた。
「マーレよ。お前はセ……セックスという言葉が解るか！」
「解りますよ？」
「んなに!?ごほん！し、知っているのかマーレ！」
「はい。５０年くらい前だったかな？図書館にいる司書Ｊさんが『マーレ様もお年頃的に知っておくべき知識でしょう』って〝保健体育〟っていう本を貸し出してくれて……あの、アインズ様？」
記憶をたどるように視線を揺らしていたマーレがモモンガの様子が若干おかしいことに気づいて問いかけると、モモンガは白い面を細い骨の手で覆った。
「モモンガ……様？」
「は、ははは、なんだ、そうか。マーレは保健体育をしってたかー」
「はい。あの、もしかしてご不快に思われて……？」
「い、いやいや！不快に思うどころか助かったというか……人に性のレクチャーなんかしたことないから自ら学んでくれてとっても安心してるところだよ！いやぁ、子供って大人の知らない所で大人になっ

てるもんだなぁー」
「えと、それでセックスのお話ということは……夜伽を御申しつけでしょうか？」
「へ？いやいや！違うよ!?自分の子供みたいなお前達ＮＰＣに夜伽なんてとんでもない！それにほら、俺にはアヴェさんがいるから」
「そ、そうですよね！変なことを申し上げてすいません！」
「や、紛らわしい言い方をした俺も悪かったよ。まあ、なんだ。子供の作り方は把握している、ということでいいだね？」
「はい。それは十全に」
「ならいいんだ。重要な話というのは子供の作り方を知っているか？という事だったからね。種族に関する大事な話だったろう？」
「あ、そうですね！や、やだなぁ僕ったら恥ずかしい勘違いを……」
「はっはっは、勘違いなんて誰にでもあるからさ。気にしない気にしない」
「あうぅぅ……」
　というように、マーレに対するモモンガさんの性教育は無事に山を越えたのだった。
　後日、なぜか司書Ｊにモモンガから新しいローブの下賜があったとかなかったとか……。

　アヴェｗｉｔｈアウラの場合。
「アヴェ様！お呼びにあずかり参上致しました！どのようなご用命でしょうか？」
「アウラ。今日呼んだのは他でもないのだけれど……貴女男性との間に子供を作る方法は知っていますか？」
「え？はい、そりゃあ触りくらいは」
「そう……その知識はどこから？」
「あー、そりゃあ……あの変態吸血鬼とかと話してると自然と」
「そう。シャルティアが……」
「要するにあれですよね。女同士では股を合わせるけど男女の場合はち」

「ストップ。ストップ。解りました。大まかには理解している訳ね？」
「はい」
慌ててアウラの口を止めたアヴェを、アウラはきょとんと見つめる。
「じゃあその知識があっているか私と答え合わせをしましょう。その為に図書室のティトゥスから性教育の本を借りているわ」
「え。あー……たしかにシャルティアの知識だと変な抜けがあるかもしれませんしねー。でも、アヴェ様御自らに私の為にお時間を使って頂いて宜しいんでしょうか」
「何を言っているのアウラ。貴女達ＮＰＣは私とモモンガさんにとって子供も同じ。子供が傷つかないように適切な知識を与えるのは親の役目です。むしろ遅くなって申し訳ないくらいなのよ？」
そういって手を合わせ頭を下げるアヴェにアウラの方が驚いた。
「そ、そんな！アヴェ様が申し訳なく思う事なんてありません！それより早く答え合わせ、しちゃいましょう！」
精一杯気を利かせるアウラに、アヴェも頭を上げ微笑む。
「じゃあ、まずは男性に触れられた場合の反応について……」
「はい！じゃんじゃん行きましょう、アヴェ様！」
この後めちゃくちゃガールズトークした。

そしてその後のモモンガとアヴェ。
「いやー。まさか自分で保健体育を履修していたとは……」
「シャルティア情報で７６歳のころから知っていたなんて……」
「はぁ!?何やってんだシャルティア！」
思わず声を荒げるモモンガだが、問題ない。
なぜならここはモモンガとアヴェの私室のベッドの上だからだ。
「まあまあ、女性同士の話ですから」
「う、ううん。女の子の方が早熟という事なんですかねー」
「冷静に考えてみれば、外見だけで判断してはいけないことでしたね」
「え、どういうことです？アヴェさん」

「ほら、人間と違ってエルフって幼いまま過ごす時間が長いでしょう」
「まあ、そうですね」
　アヴェの腕枕の上にある頭をかっくりかっくりと縦に振るモモンガ。
「そうなると自然とそういう、性に関する情報に触れる機会も増えるじゃないですか」
「あー……ですよねー。見た目は子供、心も子供、でも周囲との時間は膨大！ですもんねえ」
「今回のは「学んでくれていたラッキー」ではなく、「もっと早く勉強する機会を親である私達が作ってあげるべきだった、反省」っていう事態ですね」
「確かに……特にアウラみたいな女の子に手を出すクズ野郎は相手の無知に付け込むことがおおいですからね……」
「モモンガさん、モモンガさん。絶望のオーラが漏れてますよ」
「はえ!?す、すいませんアヴェさん。アウラがクズの手に掛かってたらと思うと、つい」
「ふふ、許しますよ。〝お父さん〟」
「……ありがとう。〝お母さん〟」
「ふふ、くすぐったい」
　その夜はお父さんもお母さんも仲良しでした（棒）

万物の胎盤

「はぁ……」
白すぎる美白の表情を曇らせ、アヴェがため息をつく。
悩まし気に眉根を寄せる表情はどこか熱に浮かされたようで……隣で見守るモモンガには色っぽく映った。
「あの、何か悩み事ですかアヴェさん。外に出たいとか……」
内心、最初に二人でナザリック大墳墓の地表に出たのがほとんど唯一の外出となればそうなるのも仕方ない。
そう思って尋ねたモモンガだったが、返球は波動砲級のものだった。
「いえ、産みたいなぁ……。と思いまして」
「へ？」
「ですから、私産みたいんです」
「う、うううう、産むって何を!?……ほあ、何をじゃないですよね。俺の子供ですよね。そりゃ毎晩その……してれば当然の結果というか。あ、産むな、なんて当然言いませんよ！むしろ俺とアヴェさんの子供なら何人でも欲しいっていうか……」
大いに慌てた直後、精神の沈静化によって冷静さを取り戻したモモンガが嬉しそうな口調で、そっかぁ、俺とアヴェさんの子供か……。
と彼方に旅立ちそうになっているのを、アヴェがモモンガを揺さぶって正気に戻す。
「違います。違うんですモモンガさん。すいません誤解をさせるようなことを言ってしまって。でも違うんです。モモンガさんの子供じゃないんです」
「え……俺の子供じゃないとしたら……だ、誰の子供なのかな……ははは……」
乾いた笑いをたてながら、心の何かが折れたのか眼に当たる炎を消してしまうモモンガに、アヴェは気付けのびんたを見舞うと事の次第を話し出した。
「浮気でもありません！もう、モモンガさんったら。早とちりですよ。

私のいい方にも問題がありましたけど現実に戻ってください」
「え、ええ。で、でもじゃあ一体何を産むんですかアヴェさん」
「お忘れですか？私の取得職業のスキルを」
「えーと、一番目立つのは《《異形の母》》ですけど……あとは壁ＭＯＢ召喚用の《《万物の胎盤》》に、微妙な秒間リジェネ能力の《《原始の生命》》、あとは……」
　指折り技能を上げようとしたモモンガの手を、アヴェが握りしめながら言った。
「そう、その《《万物の胎盤》》の影響か、とっても産みたいんです。私」
「は？え？えええええ？アヴェさん、《《万物の胎盤》》の影響って、ＭＯＢを呼びたいってことですか!?」
「ＭＯＢを呼ぶというか……その……あの、恥ずかしいけど話す事柄だと思ってくださいね？」
「あ、はい」
「お腹の、下の方がうずうずするんです……産みたい、産みたい、眷属を輩出したいって……ここ数日そんな感覚がずっと続いてて……」
「え!?もしかしてここ数日ずっと上の空が続いてたのって」
「……それのせいです」
「あ、それは、その、気づかなくて申し訳ない……です」
「いえ、いいんです。ちゃんと言わなかった私も悪いですし」
　お互い、初心な中学生カップルの様に俯いて視線を外し合って赤面するアヴェと、白い骸骨のモモンガ。
　ちょっと気まずくなった空気を変えるように、モモンガが呟く。
「この場合、アヴェさんの産む眷属ってどういう扱いになるんでしょうね」
「それは、どういう？」
「いや、守護者の皆に限らずナザリックのＮＰＣって俺達に凄い忠誠を誓ってるじゃないですか」
「そう……ですね」
「アヴェさんが眷属を産んだら、同じＮＰＣっていう認識になるのか。

それともさっき俺が慌てたみたいにアヴェさんの御子として扱うのかどうかっていう」
「あ、あぁー。確かにその疑問は残りますね」
「ですよね。それに、実際産んだ後アヴェさんがその眷属をどう思うかが……その、ちょっと不安です」
「なんでですか？」
　アヴェがきょとんと小首をかしげると、ちょっと拗ねるようにモモンガがアヴェに背を向け、腰をかがめながら言う。
「眷属が子供みたいに可愛くて、俺にあんまり構ってくれなくなったらって思うと……安易に産めば？とか言えませんよ」
「ふ、ふふふ、うふふ！モモンガさんたら可愛い！」
「か、揶揄わないでくださいよ！俺にとっては……本当に重要な事なんですから」
「ああ、ごめんなさい。いえ、揶揄ったんじゃないですよ。そんな心配をするモモンガさんが本当に可愛らしくて……こんなに好きな人を放って子供一辺倒になるような女に見えますか？」
　するり、と蛇身を伸ばしてモモンガの背中に寄り添うように六本の腕で彼を抱きしめながらアヴェがささやく。
「そんな事に成りません、私の一番はいつでもモモンガさん、貴方なんですから」
「本当ですか？子供ばっかり構ったら、俺いぢけちゃいますよ」
「信じてくださいな」
　背後から身体を伸ばすアヴェに、寄りかかるように背中を預けるモモンガ。
　ローブ越しに触れあいそうな距離にあったアヴェの頬に、自らのちょっとごつごつする頭蓋骨を擦り付けた。
「約束ですよ」
「はい。約束です」
　そうして存分にアヴェに甘えた後になってようやく、モモンガは自分を抱きしめるアヴェの腕に手を添えながら言った。
「アヴェさん。アヴェさんの気が済むなら存分に産んでください」

「……モモンガさん。今重大な事に気づいたんですが」
「なんですか？」
　六本の繊手をかわるがわる撫でていたモモンガに、アヴェの、ちょっと真剣な声が届く。
「私の<<<万物の胎盤>>>ってモモンガさんのスキルに寄る召喚と同じ……一定時間で消えてしまう効果なのか、恐怖公の眷属召喚のように永続効果なのか……」
「あ、あー。そういえばどっちなんでしょうね……アヴェさんという依り代から分離する、という感じなら俺の死体を使った中位アンデット創造みたいに永続っぽいですけど」
「うーん。もし永続ならあんまり無計画に産むのはナザリックの経営に関わってしまうかもしれませんね……」
「そうですねぇ。でも、とりあえず一回は試してみない事には始まりませんよ。産んでください、アヴェさん」
「モモンガさん……」
「一定時間しか出現しないならそれはそれで利点がありますが……もし出産の効果が永続なら、俺とアヴェさんで沢山可愛がってあげましょうよ」
「そうですね……ふふ、聞こえていますか？貴方のパパはとっても優しい人ですよ」
　モモンガの身体から手を放し、自分の下腹部を撫でながら胎の子に話しかけるアヴェの穏やかな声色に、モモンガも沈静化とは異なる落ち着きを得る。
　改めてアヴェに向かい合い、下腹を撫でる彼女を見ると、その気持ちはさらに高まる。
「ええと、じゃあアヴェさん。事は出産ですから……ペストーニャを呼んで産婆みたいなことをしてもらいましょう」
「そうですね。他にも色々準備をしてから、ですね」
「そうですね。頑張ってください」
「はい。頑張ります。といっても、この身体はこと出産に関してはそんな心配事が浮かばないんですよね。もともと産むための種族だか

らでしょうか」
「はは、そうかもしれませんね。でも万一がありますから」
「ふふ、ありがとうございます。あなた」
「……こんな心配なら、アヴェさんの為なら幾らでもしますよ」
そんな遣り取りの後、モモンガとアヴェは再び甘い空気に没入していったのだった。

産むというスキル

「ペストーニャ、少し相談があるの」
　アヴェが、ペストーニャの元を訪れてそう切り出したのはある夜の事だった。
「はい、なんでしょうかアヴェ様。……あ、ワン」
「ええと、貴女はメイド長であり、高度な回復魔法を行使する、このナザリックの医師のようなものよね？」
「そうですワン。不肖私、至高の御方々の健康を維持する役目を担っております……ワン」
　アヴェの問いに礼を取りながら答えたペストーニャに、アヴェが独り言ちる。
「そうよね。お医者様に相談するようなものだから……恥ずかしいなんていっていられないわよね」
　それを聞き取ったペストーニャは若干動揺するも、何か言いづらい事を言おうとしているアヴェの言葉を止めないように。
　必死で忠誠心の発露……あれこれと問いただしたい気持ちを抑えた。
「ええと、笑わないで欲しいのだけれど」
「至高の御方がお悩みになることを笑ったり致しません。あ、ワン」
「それなら話させてもらうけれど、実はここ数日ずっと悩んでいることがあって……」
「はい」
　ここは設定されたものとはいえ、キャラ付けのワンを付けるべきではない、と思ったのかペストーニャの語尾からワンが消える。
「実はね、胸が張るのよ」
「胸が張る……しこりがある、ではなく？」
「そうなの。乳房全体が張り詰めていて、痛いのね。しこりとかではないの、自分で触って確認したわ」
「失礼いたしますアヴェ様。少し触診を試みてもよろしいでしょうか」

「お願いするわ」
宝石を連ねて胸当ての様になっている着衣をめくりあげ、六つの乳房をペストーニャの前に晒すアヴェ。
ペストーニャはゆっくりとした動きで乳房を一つ一つ撫で、突き、揉んでしばらく考え込む。
「……どうかしら。ペストーニャの診たては」
若干、不安そうなアヴェを前にして、ペストーニャは彼女を安心させるように微笑んだ。
「心配ありません……ワン。アヴェ様の胸が張っているのはお乳が溜まっているからですワン」
「お乳？」
納得した声色で語るペストーニャに対して、アヴェはきょとんとしてた。
それはそうだろう。
だって彼女は自分が乳が出る身体、という自覚がないのだ。
「私、乳の出るような体ではないわよ？」
「お言葉ですがアヴェ様。アヴェ様は異形の母で在らせられます。産むことがスキルの御一つでございますから、いつでも産めるということはいつでもお産みに成る子供に乳を与えられる状態でいるという事ですワン」
「……ああ、そう言う事。なるほどね。そういわれればそうだわ。産むことが私の力。産むことが私を形作るスキルの一つ。ならこれは異常でもなんでもなく……」
「はい、常態でございます……ワン」
「これが常態、ね。でも胸が張って辛いのよね……どうすればいいのかしら」
「それでしたら、適当な幼生体の眷属をお産みになるのはいかがでしょうか……あワン」
「なるほど、お乳が張るなら飲んでくれる存在を産み出せばいいというわけね」
「はい。仰る通りですワン」

胸元を直し、考え込んだアヴェを前にペストーニャは安堵していた。
なにせ至高の御方が不調を訴えたのだ、もし残ってくださった王と妃の片割れが欠けたらと思うと気が気ではない。
そんなことを考えさせる不調がただの杞憂だと解ったのだ。
僕としての彼女の安堵は深いだろう。
「……うん。そちらに気を向けてみればどうすればいいか解る。ペストーニャ」
「はい。何でしょうアヴェ様」
「出産の用意を。その前にモモンガさんに産むことを話すから1時間ほど待たせることになると思うわ」
「了解いたしました……ワン」
再び礼をして出産の準備をするために部屋をでたペストーニャを見送るアヴェ。
彼女は、如何にして乳が張る、というちょっと恥ずかしい理由をモモンガに告げずに眷属を産み出すかを考え始めたのだった。

その出産の後。
きゅうきゅうと鳴くキメラの幼生体の声と、部屋の外で待っていたモモンガを入れるアヴェの意向を伝える一般メイドのに案内され産室に入ったモモンガ。
彼の視界へ愛おしそうに腕に小さな、生まれたての子犬のようなサイズの山羊と獅子の頭、蛇の尻尾を持つキメラの仔を抱くアヴェの姿が入る。
部屋に入ってきたモモンガに気づいたアヴェが微笑みかける。
その表情には出産の疲れは見えない。
おそらく、産むこと自体がスキルなのでさした労力ではなかったのだろう。
実際、アヴェに付き添って産室の前でモモンガが待たされた時間は10分に満たない。
「モモンガさん。どうですか?この子」

「えーと、俺あんまりこういう時の表現を多く知ってるわけじゃないので端的に……可愛いですね。ゲームだとアヴェさんのスキルで生まれてくるキメラって全部成体っていうんですか？大人でしたから。こんなちっちゃいのも産めるんですね」
「ふふ、ありがとうございます。どうもこの世界だと好きな段階で産める感じがするんです。その気になれば大人の状態でも産めますよ」
「え。キメラって結構デカいですよね……その、セクハラになるかもなんですが」
「なんでしょう？」
「成体のキメラはお腹に入らないのでは……」
「この子を産もうとしたときはそんなにお腹は目立たなかったんですけど、多分成体を産もうとするときにはお腹も相応に大きくなるのではないでしょうか？」
「相応にって、お腹が裂けちゃいません!?だ、ダメですからね！成体を産むのは当面禁止です！」
「スキルだから大丈夫だと思うのですけど」
「ダメダメダメ、もしそれで取り返しのつかない事になったら、俺、俺……」
わたわたと手を振って泣きそうな声を出し始めたモモンガに、アヴェは心配も当然かな、という気持ちになった。
だいたい、腕の中の小さなキメラを産むのだってモモンガには心配されたのだ。
だから、モモンガの不安を拭うように言葉を発した。
「解りました。モモンガさんが安心できない限り成体の出産はしません。ほら、大丈夫ですから傍によってください」
「……はい」
「ね、この子に触れてください。小さいでしょう」
「はい」
「私を心配してくれたモモンガさん、この子よりちっちゃくてか弱そうに見えましたよ」
「え、そうですか？結構アバターは大きく作ったつもりなんですけど」

抱いた仔を一番下側の腕だけで抱いて、アヴェは近くに来てくれたモモンガの肩に真ん中の両手を置き、一番上の手でモモンガの頭を掻き抱く。
「見えるんですよ……ふふ、不思議ですね。ユグドラシルで魔王ロールしてる時モモンガさんはあんなに大きく見えたのに」
「小さい男は嫌い、ですか？」
「大きくても小さくてもモモンガさんが大好きですよ」
そういって、アヴェは静かにモモンガの頬骨にキスをする。
すると、沈静化寸前までいっていたモモンガの降った気持ちが今度は上限側で沈静化しそうなほど浮かび上がる。
「どっちでもいいんですか？」
「どちらでもモモンガさんでしょう？」
「それは……そうですね。すいません、バカなことを聞いて」
「いいんですよ。モモンガさんも男の人なんだなって感じますから」
「えー、それどういう意味ですか？」
「好きな人に自分を格好良く見せたいとか、男の子じゃないですか」
「はは、男の子って年じゃないですけどね」
アヴェの顔が離れた頭蓋骨を手で掻くモモンガ。
そんなモモンガからちょっとだけ距離を取って、アヴェは言った。
「では、モモンガさん。この仔を抱いてあげてください」
「あ、そうですね。アヴェさんの子、ですもんね」
「この子にはちょっとした私用の用途があるのでスクロールには暫くしないでおこうと思うんですけど」
「え、いいですけど。良いんですか？随分可愛がってる感じですけどこの子もスクロールにしちゃって」
ぽかん、というように顎を開けたモモンガに対し、少し首を傾げたアヴェが言葉をつづる。
「ええと、確かに可愛いは可愛いんですけど。そこまでの執着はないというか……産んだ時点でふっきれちゃう？感じなんですよね。それを言ったら自動ＰＯＰの子達だって私の子ですけどこれといって感慨は……人間辞めちゃってますね」

「……俺も、人間の時なら引きそうだなーと思いつつそんなにショックは受けていない自分がいますね……」
「やっぱり、どこまでいっても私達は化け物、ってことなんでしょうか」
　どこか、困ったような表情で問いかけるアヴェに、モモンガは顎に手をやって、考えてから答えた。
「アヴェさんが化け物なら俺も化け物ですよ。いいじゃないですか、化け物同士仲良くしましょうよ」
「ふふ、そうですね。人間の時から仲は良いと思ってましたけれどね。あ、そうだ。モモンガさんもこの仔を抱いてあげてくださいよ」
「え、大丈夫ですかね。潰しちゃったりしないかな……」
　化け物だという事を否定しなかったモモンガに、アヴェは寄り添うようにキメラの仔を渡す。
「そっと、そっとですよモモンガさん」
「わわ。ぐにゃぐにゃしてる……柔らかい……」
　二人ともすでに冷徹な怪物だろうとも、そんなことは関係ない。
　このキメラの仔が育ったらどうなるかはわからないが。
　そこには家族のような温もりがあったのだった。

ナザリック地下大墳墓の応対

「モモンガ様。御耳に入れておきたい儀があります」
「ん？なんだいアルベド」
　アヴェがスパナザリックへと出向いている時間に、アルベドが緊急に、と面会を求めてきた。
　モモンガはそれを受けて即座に、ベッドに寝そべって大図書館から持ち出した本を読むのを止め、自室に据えられた執務机に座って彼女を迎える。
「先日、ナザリック大墳墓付近に人間が訪れたのはお聞き及びの事かと思います」
「ああ。そんな話あったなぁ。それがなにか不味い事になったの？」
「いえ、そのような……いえ、モモンガ様のご指示を仰ぐべきですね。ナザリック大墳墓を発見した人間達に念のため、恐怖公の眷属による追跡を行わせていたのです」
「ふむ」
「その結果、その人間達がナザリックを調査するための人員を送り込もうとしている、という事が判明いたしました」
「ナザリックに調査か。うーん、どう対応するのがいいのかな……」
　机の上で両手を組んで視線を跪くアルベドに投げかけることでモモンガは彼女に返答を促した。
「私共が取れる手は二つだと思います。一つ、神聖不可侵なる至高の御方が作り出した墳墓を荒らさんとする下等生物どもを抹殺する。……これはあまりお勧めしたくありませんが、友好的に調査員を歓待し、好感を持った状態で帰らせる事です」
「ふーむ。デミウルゴスはなんと？」
「ユリ・アルファと現地の虫けらどもとの交戦を見る限り、生半可な敵であれば問題なく撃退できる、と。ただ……」
「ただ？」
「送り込まれる塵芥をただ殺すだけでは、繰り返し調査の手を伸ばされた場合に無駄なコストがかかるのでは、と」

「コストか……確かにただ殺して、その結果何度も警戒を要する事に成るのは問題だね」
「はい、そこで折衷案といたしましてデミウルゴスから策があると」
　きりりと引き締められた美しい顔をモモンガに向けながら、アルベドがデミウルゴスの献策を申し奉る。
「まず地上にセバスとプレアデスを置きます」
「セバスとプレアデスをかー。セバス達に接待をさせるのかな？」
「いえ。セバス達にはナザリック大墳墓の墓守を演じさせます」
「墓守？」
「はい。ナザリック大墳墓はセバス達の主人が眠る墓所、というカバーストーリーを展開することで、もし侵入者が手向かえば討ち取る大義名分を手にします」
「ふむふむ」
　アルベドの言葉に、モモンガが何度も頷く。
「もし、セバス達が敵わない場合にはセバスが時間を稼いでいる間に当番のプレアデスを撤退させ、報告。その報告を受けて守護者を纏めて迎撃隊を編成。ソレによりより確実な侵入者迎撃を行います」
「うーん、まるでセバスを捨て駒にするような策なのが気になるな……」
　腕を組み、顎骨に指を掛けたモモンガが難色を示すと、アルベドは首を振る。
「捨て駒ではありませんわ。もし侵入者が敵対的でない存在だった場合、穏便に事を勧めることができる人員として考えられるのはカルマが中立、ないし善に偏ったもの。その中から最も確実に応対した相手が敵対的だった場合自衛ができるものを選んだ結果です。もちろん私もデミウルゴスも、徒にセバスを死なせるようなことは致しません」
「そうか……すまない。捨て駒というのは良くない表現だった」
「いえ、セバスもそこまでモモンガ様がお気に掛けてくださったと聞けば感涙にむせぶことでしょう」
「それで……ええと、なるべく外部との軋轢を少なくする人選がセバ

ス、ということでいいのかな？」
「はい。その通りでございます」
「んー。セバスだけだと索敵が弱くないかな？八肢の暗殺者も配置するのは？」
「索敵でしたら、モモンガ様のご裁可を頂こうと思っていた腹案がございます」
「なにかな？」
「これを機に、私の姉のニグレドによるナザリック上空からの監視網の構築をさせていただければ、と」
「ふむ……許可するよ」
「ありがとうございます。これ以後も今回の提案を元にデミウルゴスなどと検討を重ね、より完璧なナザリックの防衛体制を築かせていただきます」
「うん。頼むよ。しかし、侵入者か……」
モモンガが椅子に深くもたれ、ローブから除く肋骨の前で手を組む。
そして眼窩に浮かぶ炎を瞬かせ、燃え上がらせると一段低い声になってアルベドに言いつける。
「危急の時には俺自身がアヴェさんを守るけれど……侵入者がアヴェさんに近づくことが絶対に無いように計らってくれ」
「は、はい。それは勿論でございます。アヴェ様は直接戦闘をなさる御方ではございませんので。敵対的侵入者が大墳墓内に侵入した際には構築した連絡網を介してアヴェ様には宝物庫に避難していただくことも考えております」
「そうか。ならいいんだけど……アヴェさんが傷ついたら、俺は自分が何をするか解らないからね。重々気を付けてほしい」
「はい。承知いたしております」
頭を垂れ承知するアルベドの内心に、深い敬愛の念が湧き上がる。
モモンガのアヴェを愛する姿勢、それに心打たれない僕が居るだろうか、という思いの為に。
ナザリック地下大墳墓、それはこの世界に転移して以降は愛の墓場

と同義である。

なお、ナザリック地下大墳墓への調査を試みる者たちを「穏便」に帰す策が取られたため、幾人かの運命が変わったことは、誰にも知られていない事である。

爆発すべき人（？）達

「おはようございます、モモンガさん」
「おはよう、アヴェ」
　天幕のある豪奢な寝台の中で、モモンガに巻き付けていた蛇の下半身を外しながら挨拶したアヴェ応えつつ、モモンガは唇のない歯茎でアヴェの頬に口づけして起き上がる。
　そして、互いに一般メイドを呼び、その日のコーディネイトを任せながら会話をする。
「アヴェさん。今日はどうしますか？」
「そうですね……今日は第九階層から一層ずつナザリック内を見回っていって、地上部で見張りについているセバスたちを見舞った後は第四階層の地底湖で泳ごうかと」
「泳ぐ……ああ、スパナザリックだと水泳はできませんからね」
「るし★ふぁーさんの仕込みには驚かされましたよね」
　苦笑するアヴェだが、モモンガは若干……そう、沈静化が行われない程度の苛つきを覚えたのか、ガウンを羽織り終わって額の骨をコツコツと指で鳴らしながら不満の声を上げた。
「風呂場のゴーレムが動き出したのが、アルベド達守護者が入浴している時で良かったよ。もしアヴェの入浴している時だったらと思うと……まったく、るし★ふぁーさんは……」
　そんな風にぼやくモモンガに、アヴェがそこに居ないかつての友人……友人？……まぁ友人だろう。かなり困った人だったが……を取りなすように穏やかな口調で言う。
「まあまあ。ユグドラシルの時にフレンドリーファイアが解除されるなんて誰も思いませんよ。あれについては悪いのはるし★ふぁーさんではなく、急にルールが変わる方が悪かったんですよ」
　煌めく宝石で飾られたチューブトップの胸当て付けられながらアヴェが発したなだめる言葉に、モモンガも苛つきが収まったのか頬骨を掻く。
「んー……まぁそうですね。確かに俺達がこんな状況になるなんて、

誰にも想像できませんものね。すいませんるし★ふぁーさん、言い過ぎましたね……」
「ふふ、でも心配してもらえて嬉しかったですよ」
「そうですか？なんかだしにしたみたいでるし★ふぁーさんに悪いなぁ」
「これが「リア充」っていうことでしょうか」
「はっ。そうなのか……俺とアヴェ、今はリア充なんだな……これは確かに自分でなければ爆発しろ案件だ。ははは」
　おどけて笑うモモンガに、一般メイドにより着飾らされたアヴェが寄り添って、人差し指を立ててモモンガの口元を抑える。
「ふが？」
「今は、じゃないですよ。ユグドラシル末期にはゲーム内とはいえ結婚していたんですから。私達はとっくに爆発すべき側の人間です」
「は、はは。そうですね。あー、リア充爆発といえば嫉妬マスクってありましたよね」
「ありましたね……」
「毎年微妙にデザインが違ったんですけど、結婚したら貰えなくなったんですよね。あれ」
「え？あれって配布やめたんじゃないんですか」
「違うんですよ。俺も掲示板で年ごとの嫉妬マスクのスクショ見かけて初めて気づいたんですけど。どうも結婚システム実装後は配偶者がログインしてた人には配られなかったみたいなんですよね」
「私はあれ評判悪くてやめたんだと思ってましたよ」
「まあそう思うのも仕方ないアイテムではありますけど。コンプしそこねちゃったなーと一瞬思ったんですけど」
「けど？」
「アヴェと一緒にいて貰えないなら、貰えなくてもいいやって」
「ありがとうございます。アイテムコンプより恋人ですよね」
「ですねー。あ、これはまたリア充発言ですね。爆発しないように気を付けなきゃ……」
「ふふふ」

モモンガとアヴェが和やかに談笑していると、控えていた一般メイドが顔をあげ、必死の形相で声を上げた。
「も、モモンガ様！爆発してしまうとは何者かの攻撃でしょうか!?至高の御方を爆発させる不遜なものが居るとは……！守護者統括であるアルベド様に命じて対策を講じるべきでは！」
「え？あ、あー。こほん。リア充の爆発とは物理的、魔法的な危機を呼ぶものではないんだ。リア充……現実が充足しているものは爆発してしまえ、という慣用句だよ」
「慣用句、でございますか」
「そう。だからモモンガさんも私も本当に爆発することはありません」
「モモンガ様とアヴェ様がそう仰るのなら心配はないのですね。私お二人が爆発したらと思うと心配になって……ご無礼の段お許しくださいませ」
「ああ、許すよ。紛らわしい言い方をして悪かったね」
「心配を掛けてごめんなさい。私とモモンガさんは大丈夫」
思わず一般メイドに頭を下げた二人に対し、メイドは二人以上に頭を下げようと土下座せんばかりの勢いで口を廻す。
「お、お二人が頭を下げることはございません！この私の愚かさがすべて悪いのです！」
「うーん。ごめんだと通じないか……。じゃあこう言い換えよう。心配してくれてありがとう、その忠義に感謝するよ」
「ひゃ、ひゃい！もったいなきお言葉……！」
「私からもありがとう。貴方達、配下の皆が毎日私の事を慮ってくれるから私は毎日を平穏に過ごせているの。本当にありがとう」
「ふ、ふえええ……！」
「え!?なんで泣くの!?」
「モ、モモンガさん。感極まっているという奴じゃないでしょうか」
「あ、ああ。そういう事ですか……相変わらず忠誠心が天元突破してるよなぁ、皆」
感激のあまり直立不動になって泣き始めた一般メイドを前に、モモ

ンガとアヴェは何もできない。
ただ、この嵐が過ぎ去るのをお互いの顔を見合わせて待つことしかできないのだった。

指輪の話

ナーベラル・ガンマには一つの疑問があった。
それは彼女たちが仕える主である至高の御方の一人、アヴェの指輪だ。
指輪という装飾品は様々な効果を持ち主を守る物。
だがアヴェは本来十付けられる指輪の内、結婚指輪を左手薬指に、右手薬指にギルドメンバーの証であるリング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを。
それに加えて毒耐性の指輪、炎耐性の指輪、氷耐性の指輪をその日の気分で付け替えるだけになって久しい。
これは非常に不用心なことだ。
その証拠にアヴェの夫であるモモンガは、常に十の指輪を装着して耐性を整えている。
生身であるアヴェならばリング・オブ・サステナンスなどを身に着けていてもいいはずだ。
なのに今、彼女が身に着けているのは前述の四つの指輪だけだ。
もちろん、事あればアヴェの前に身を投げ出して盾となる覚悟はできている。
だが、もし万が一、億が一にでもその身を守れなかった時に、指輪による耐性の無さゆえに至高の御身が見罷られるようなことがあれば。
もしそうなったらと想像するだけで、ナーベラルは背骨に氷柱が差し込まれたような感覚に襲われてしまう。
だからだろうか、不敬かもしれない、そう思いつつもナーベラルはスパナザリックでのアヴェの鱗の手入れの時に問いを投げかけてしまった。
「アヴェ様。愚かな私にお聞かせ願いたい儀がございます」
「なにかしら、ナーベラル」
決死の想いを抱いて言葉を掛けたナーベラルは、ひとまず一息つく。

寛大な女主人は今のところ咎める気はないようだ。
「なぜ、耐性を取る指輪を全て御身に着けられないのですか？アヴェ様はモモンガ様とは違い生身の身体。それだけでも日々私達配下の者共は万が一があってはと心を痛めております」
一瞬、大浴場内の空気が凍る。
正確には、ナーベラルと共に鱗の手入れをしていた当番のシズとエントマが動きを止めただけだが。
アヴェ自体はきょとん、としてから、言葉を探すように視線をあちこちに飛ばしている。
「それ、私も気になってた」
ぽつり、とシズが漏らす。
そんなシズをエントマが「ダメよぉ。至高の御方のなさることに疑問を抱くなんてぇ」と窘めたが。
アヴェはそんな遣り取りを気にするでもなく、ナーベラル、シズ、エントマの順にゆっくりと視線を飛ばし、注意が自分に集まったと思ったところで口を開いた。
「そうね。確かに本来なら指輪で取れる耐性を取るべきなんでしょう」
ではなぜ、という問いをナーベラルは飲み込む。
瞼を降ろし何かを思いながら更に言葉を紡ごうとする至高の御方の言葉を止めないために。
「毒耐性は宝物殿、炎耐性は第七階層、氷耐性は第五階層に移動する時に必要だから付けていますが。本来ならこの三つも私は不要だと思っています」
結婚指輪とリング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを撫でてから、アヴェは言葉を続ける。
「なぜなら私はナザリック地下大墳墓そのものと、守護者達、そして貴方達プレアデスに加えて、愛するモモンガさんに守られているのですから。私は貴女達を、信じているの。皆に守られている限り、私は絶対に大丈夫、って」
ナーベラルにとっては衝撃の言葉だった。

至高の御方がそこまで、自分たち僕に厚い信頼を寄せてくださっている。
それは至高の四十二人に仕えるべく産み出された彼女にとって、如何ほどの喜びの言葉であるか。
気づけばナーベラルは……いや、シズとエントマも一時アヴェの身を清める手を止めて頭を垂れていた。
「そこまで……そこまで私達僕を信頼していただけていた証が指輪だったとは。思い至れなかった我が身の愚かさをお許しください」
「反省」
「アヴェ様がぁ、そこまで私達の事を考えてくださっていたなんてぇ……」
控えて敬意を捧げるナーベラル、シズ、エントマの肩にアヴェが優しく触れ、頭を上げさせる。
「許すも許さないもありません。指輪の件に関しては完全に私の落ち度ですからね」
「落ち度などと！全てはアヴェ様の御心を察することのできない私どもの……」
「いいえ、これは私の落ち度です。ですがそれでは納得できないというなら貴女達には罰を与えましょう」
「は！いかような罰でも受ける所存です！」
「じゃあ……鱗が洗い終わったら一緒に身に着ける指輪を選んでくれないかしら」
「そ、それは……」
「罰？」
「そんなの罰じゃありませぇん……ご褒美ですわ。アヴェ様」
恐れ入ったように一歩下がる三人に、ころころと笑いながら手を振ってからアヴェは言葉を続ける。
「私が罰と言ったら罰なんです。耐性は完全ということがないですから。皆にはたっぷり悩んでもらいますよ。さ、鱗の洗浄の続きをしてください」
「は、承知いたしました」

「了解」
「はぁい。お任せくださぁい」
ナーベラルは、アヴェのその態度に更なる忠誠を誓う事を心に決めた。
この心優しく慈悲深い女主人を、絶対に御守りするのだ、と。
なお、指輪による一日の耐性を選ぶ作業はプレアデスの担当する所となり、一般メイドからの羨望の視線を集めることになるのだった。